
口ウきゅうぶ ~不可視の6人目~

Bell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウきゅうぶ～不可視の6人目～

【NZコード】

N9119V

【作者名】

Be11

【あらすじ】

小学6年生のオリ主 園田 歩が私立慧心学園に転校してきた。さつそく真帆に目をつけられ女バスにかかわっていく。
そんな感じで始まるロリなにスボ魂なロウきゅうぶです。
なるべく原作にそつて進めていきたいと思つてます。（あくまで予定）

01・転校生の責務（前書き）

はじめまして。

文章は拙いとも思いますが楽しんでもらえたら幸いです。
それでは……どうぞ

（） 交換日記（ひかわ）（）

まほまほ「みーたんがまえにいってた、てんこづけってあしたく
んだよね？」

紗季「そうだけど、あんたはちょっとは重いやつよね」

湊智花「あはは。確かに私の時もいっぱい質問してきたもんね」

ひなた「おー？ 新しい人くる？」

あいり「そういえばひなちゃん、その時寝てたから聞いてないか
も……」

まだ桜が咲き誇る4月のある水曜日、俺は教室の一一番前に立つて
いた。

「園田 歩です。よろしくお願ひします」

転校生として味もそつけもない挨拶をする。

ここでみんなの気を引く一発芸でもあればいいこと思つたけど憎俺はそんなレパートリーは持ち合せていない。

挨拶と一緒にぺこりと頭を下げると隣にいる笠先生たかさき ひろしが教室のほうを見て、

「よじつーじやあ園田の席は……」

と、俺の座る席を探し始めた。その間、俺も先生に倣いぐるりと教室を見まわしてみると一番窓際の席に座っているツインテールの女の子がワンランとした田で俺の方を見ているのに気付いた。

（なんやろ？やたらと見られると……）

そう思つてみると、俺と田が合つたのに気付いたのかそのツインテールの女の子が手を挙げていきなり元気な声でしゃべりだした。

「はーい。みーたん、私の隣が空いてまーす」

「やうだなー。じゃあ真帆のところにいか。園田、お前の席はと

りあえずあそこだ」

そう言われて鞄を持って席に行くと、待つてましたとばかりに真帆と呼ばれたツインテールの女の子がバンバンと音が出そうなほど、自分の隣の空いてる席をたたいてここに座れとアピールしてきた。ちなみに、この私立慧心学園は小学校から大学まであり、俺が通うことになつたここも「初等部」と呼ばれている。

これだけでもこの学園の規模が大きいことがわかつてもらえるだろうか。

もちろん教室も普通の小学校と違い、机が三人一席になつていてさながら大学の講義室みたいになつていていたりする。

今、ツインテールの女の子が叩いているのはちょうど三人席の真ん中で、それを挟んで通路側の席に座っている眼鏡をかけた真面目そうな女の子に、

「もう一紗季は気が利かないなー。それじゃあ、あゆむんがこじこじ座れないじゃん」

「あんたに言われなくともわかつてるわよ」

(あゆむん?)

内心首をかしげていると紗季と呼ばれた女の子が席を立ち、道を譲ってくれた。

「ありがとう」

(でも、こきなり女の子の子の間に座るのなんか緊張するな)

そんなことを思いながらも道を譲ってくれたことに対する礼を言ひて席へひく。

「ねえねえ、あゆむんはどうして転校してきたの？ 前の学校はどんなところだった？ 好きなことは？ あとねつあとねつ……」

「もう真帆つ、少し落ち着きなたこ。」めんなさい園田君、私は永塚紗季つていいます。そして、いひかのつむたこのが三沢真帆です。みろしへ

三沢さんのマシンガントークに感つてみると、席に座りなおした永塚さんが自己紹介をするのと一緒に三沢さんを止めてくれた。

「じーーー真帆、いろいろ聞きたいのはわかるけど紗季のつとおつ少し落ち着け。休み時間にでもたつぱり聞かばいいだら。じゃあ授業はじめるやー」

篁先生にも注意をされてしまい、不満そうにしながらもそれならそれでと思つたのか、にかつと笑い、

「じゃあ休み時間に」

やつぱり、授業を受けるように机を体を前に向かた。

（授業が始まつてよかつたー。でも休み時間になつたうそつきの勢いで質問攻めにされたんかな？ それはちよつと勘弁してほしいわ。やつぱり転校生つてめずらしいんやうつな。それでもちよつとテンション高すぎる気するナビ……）

そんなことを思つて、こんなことをなるとわかつた田のじとを思つ出した。

約1ヶ月前のこと。家族で夕食を食べている時、

「歩、父さんな来月から転勤にすることになつた。だから、引越しするから準備しどけよ」

「は？」

今日のハンバーグはおいしさいなー。なんて思つていたら唐突に父さんからびっくりな報告を聞かされてしまつた。
俺はマジで？ と父さんの隣に座る母さんを見ると、

「そんなマジでって思つてゐるような顔しないの」

ぱつぱつ顔に出ていたらしい。

「今度はどこのなん?」

「父さんはいわゆる転勤族で、引っ越しもこれまで一度や二度ではないのと俺はすでに諦めた感じで質問してみた。

「今度はちょっと遠いところだな。けど、大きな学校が近くにあって歩はそこに通うことになるな。なんとその男バスは地区大会で優勝したらしくから歩が好きなバスケもできるぞ!」

「ふーん」

「なんか気のない返事ね? やっぱり引越しはいや?..」

「そんなことない。大きな学校は見てみたいし、強い男バスにも興味あるし」

「やつて、それならよかつた」

そつと母さんはこうと笑い、「」飯を食べ始めた。

「じゃあせうこいじだから、しっかりと準備してこだぞ」

と、父さんが締めくくつた後はたわいなことを話して夕食は進んでいった。

夕食もすんで、お風呂に入りながら

「地区大会優勝校かー。確かにバスケは好きだけどあんまりつまんないしなー。練習きついかなー？」

そんなことを考えて、これから引越しの準備にむけて気が重くなるのを感じつつ1日が終わりを告げた。

それからの1ヶ月は、引越しの準備やら友達との別れなんかでバタバタしていて、あつとつ間に過ぎていった。

そして、今日初めて学校にきて職員室で担任の簗先生を紹介され、教室まで案内してもらつて今に至るところわけやけど……

ちなみに簗先生を初めて見たとき、俺とあまりかわらない150cmくらいの身長とその童顔のせいで先生に見えなかつたのは秘密にしどいたまつがいいんやううな。

キーングーランカーンゴーン

「はーい、じゃあ授業はおしまい。もひ待ひきれないって感じだけ
ど、ほびほびにじとじてやれよ」

そんなセリフを残しつつ教室を出でていく簾先生を見て、いよいよか
と覚悟を決めてくると隣の三沢さんはもちろんだけど教室のあちこ
ちから人が集まってきて囲まれてしまった。

「じうじて転校してきたんだ？」

「父さんの仕事都合で」

「じいに住んでるの？」

「松角まつづかっていう駅の近く。ここから30分くらいで転車で行つたと
う」

「好きなことは？」

「うーん、バスケかな」

「「バスケっーーー。」」

囮まれてからいろいろなことを質問され答えていたらバスケと答えた瞬間、隣の三沢さんとちょうど前にいたツンツン頭の男子がそろつて大きな声をあげたのでびっくりしてしまった。

「あゆむん、バスケできるの？ うまい？」

「まあ、前の学校ではバスケ部だつたけど自分で言うのもなんだけどそんなにうまくはないよ。むしろ、後輩とかの指導なんかの方が多かった感じ。それより、わっせも言つてたけどあゆむんつて俺のこと……だよね？」

「そっ、歩だからあゆむん。へん？」

いきなりあだ名で呼ばれたのに驚いて聞いてみると、あっけらかんとして逆に聞かれてしまった。

「お前、バスケするのか？ なら、うちの男バスに入らないか？ あつ、俺は竹中夏陽^{なつひ}つていつて男バスのキャプテンをやつてるんだ」

「もう、私がしゃべってたんだから夏陽はあとにじるよ」

「ううだなー、1回部活を見に行つてから考えよ」

と、そんな話をしていたら休み時間の終わりを知らせるチャイムが鳴つた。

次の授業の先生が入ってきたので質問タイムはお開きになり、みんな自分の席に戻つていつた。

そうして午前の授業が終わり、昼休みになつたが俺はまだ席を動けずにいた。

その訳はといふと、母さんお手製のお弁当を持って席を立とうとした三沢さんにひきとめられたからだつたりする。

曰く

「まだまだ聞きたい」とがたくさんあるから逃がさん……！」

といふことである。

休み時間の度に質問タイムは開催されていたので、もう大丈夫だと思つていたら甘かつたらしい。

「じゃあみんなで」はんにしょーーー！」

そつ言つて後ろの席に振り返り、そこにお弁当を準備し始めている三沢さんをしり田に隣の永塚さんを見ると、「あきらめて」とアイコンタクトを送られ後ろの席にお弁当の準備をじだした。

仕方なしに俺もお弁当の準備をしようつと振り返ると、当然後ろの席にいる人と曰が合つた。

「ども、お邪魔します」

挨拶をしつつ後ろの席の人を見ると、なんとも奇妙な組み合わせだった。

向かって右、つまり三沢さんの後ろの席には、やたらと背の高い女の子がなぜかおどおどしながらこちらを見ていて、正面の子は反対にすく小さく、ここにこしてあまり見え手を振つていて。最後に左の子は髪を肩くらいまで伸ばして礼儀正しそうな感じでしつしつがお弁当の準備を終えるのを待つていた。

「園田歩です。よろしく」

「おー、ひなは袴田ひなた。よろしくー」

「湊智花です。じゅうまいよろしく」

「え、えと。香椎 あ、愛莉です。よろしく」

俺が挨拶をすると、それぞれ自己紹介をしてくれた。

正面の背の小さい子が袴田さん、背の高い子が香椎さん、そして礼儀正しい子が湊さんらしい。

しかしこうして考えてみると、転校初日から女子に囲まれてお昼を食べるなんてなんか変な感じだ。

今までは男子としか食べたことがないだけに緊張するな。

「ふふ、そんなに硬くならなくても大丈夫ですよ。真帆が無理やり誘つたようなもんなんですから」

永塚さんがフォローしてくれたことに感謝して、みんなでお弁当を食べ始める。

食べている最中も三沢さんからの質問は留まるところを知らず、永塚さんに注意されたりしながら楽しくお昼は進んでいった。

「そういえば、あゆむんはバスケ部だったんだよねー・私たちも女バスなんだよ」

「私たち?」

「おー、ひな達みんなバスケ部」

三沢さんが私たちと複数形にしたのを不思議に思つたら袴田さんが答えてくれた。

「ど、言つても女バスはこの5人しかいないんですけどね」

「えつ、五人しかいないの?」

思わずオウム返しに塚さんに聞き返してしまつたが、前の学校では30人くらいの部員がいたし、バスケは結構人気のあるスポーツだからびっくりしたとしても許してほしいところだ。

「女バスはみんなが私のために創つてくれた部活なんです。だから、まだ部員はこの5人だけだし顧問も美星先生なんですね」

「別にもつかんのためだけつてわけじゃないよ。私がバスケをやつてみたかったから女バスを創つとしたんだし」

「やうよ。だからトモがそんなに気に病むことはないわよ」

「へえ、だからみんなはすいべ仲がよれそうなんだね」

言つてから、はつとしてみんなの顔を見てみると、はにかむような感じの表情になつていた。

そんな風に反応されるとは思わず、すいべ恥ずかしいことを言つた気がして俺は頬が赤くなつてしまつを抑えられなかつた。

そうして楽しい昼休みが終わり、さすがに三沢さんの質問タイムもお開きになり午後の授業も何事もなく進んでいつた。

そして放課後になり竹中君に言つた通り、男バスの部活を見学しようと体育館に向かうのだが、これがこの後の学園生活をがらりと変えてしまう出来事に巻き込まれてしまつことをこのときの俺は露にも思つていなかつた。

01・転校生の責務（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字や感想などあればぜひひ書いてください。

02 · パーチ就任（前書き）

第2話の更新です。

ちょっと話が強引かなと思いましたが、それは勘弁してください。
それでは……どうぞ。

／＼ ガールズトーク ／＼

まほまほ「しかし、みーたんがほつかーにたいいくかんにしゅうつてなんだろ?」

あいり 「部活を見に来るのも少ないのでめずらしじよね」

紗季 「いつもみたいにまたなんか思いついたんじゃないかしら」

湊 智花「楽しいことならいいけど美星先生つて、とれども変なことじよつとするからちょっと心配だね」

ひなた 「ひな、楽しいこと賛成ー」

紗季 「まあとりあえず行ってみましょ」

「 「 「 「 「えええーーー」 」 」 」

放課後になり男バスの練習を見学しにきた俺が見たものは、簞先生の前で驚きの表情を隠せない女バスのメンバーだった。いきなりのことで、呆然としてしまい入口に立つたまま話を盗み聞きする形になってしまった。

「男バスと試合つてど「こり」とですか？」

「負けたら廃部つてひどくない？」

「2週間後なんて急過ぎます」

不本意なことを告げたであらう簞先生に詰め寄る五人。告げた本人も苦虫を噛んだような顔をしている。

「確かに勝手に試合を受けてきたことは謝る。ごめん。でも、そうでもしなきや問答無用で廃部にされてた。これでも譲歩したほうなんだよ。それにあんた達なら何とかなるつて思つたからOKしたんだ」

こんな風に信頼を寄せられたら、これ以上食い下がるのは簞先生にも失礼になってしまつ。

そして、今日1日一緒にいただけでもわかつてしまつほど、こんな

展開で燃えないわけがない人が1人いる。

「よーしー。やつたらーじゃんつー夏陽達なんて楽勝だよ」

案の[定]、三沢さんが一番早くやる気を見せた。

「やつね、もうやるしかないみたいだし廃部になんてさせないんだから」

「うん。廃部になんてさせない。私が何とかしてみせん」

「おー。ひなもがんばる」

「わ、私もがんばる」

三沢さんに続き、他の4人も決意を固めたようだ。

そんな中、篠先生が湊さんをみんなから少し離れたところに連れていくのが見えた。

「で、ああ言つたけどひさしひやは勝てそう。」

「えーと、正直今のままだと厳しいと思います。さすがに私ひとりでなんとかなるほど男バスも弱くはないですし。せめて、試合までの2週間のみんなの指導と当田の作戦を考えてくれる人がいてくれたらと思います」

「やつかあ……なら、ちょうどこいしやつを使つか。そんで、さしあたつては」

二人の会話は離れていたので聞こえなかつたが、話終わつたらしい簗先生がおもむろに俺の方を見た。

悪戯を思いついた子供のような笑顔をしてくる簗先生を見て、俺は今まで話を聞いていてすぐ帰らなかつたことを後悔した。

「こやふ、おーい。話聞いてただるつ、ちよつといちおいで園田?」

ぱっと女バスのみんなが一斉に入口に突つ立つてゐる俺の方を見た。

(おーおー、俺が居ることに今気が付いたんかよ)

「ちなみに拒否権は?」

「ない」

あの顔は絶対によくない」とこなると黙つて質問してみたらノータイムで答えが返つてきた。

逆らうのは諦めて簗先生のところへ行く時、ため息がでてしまつたのは仕方ないと思つ。

「どこまで聞いてた？」

「2週間後に男バスと試合して、負ければ女バスは廃部になるってことはわかりました」

「それだけ理解してたら十分だな」

どこか楽しそうにしている篁先生から、放課後の体育館での練習は、女バスが月・水・金、男バスが火・木・土と交互に使っていること。

今回、男バス側が女バスの練習は遊びだという理由で体育館の使用を譲るようになってきたこと。などの説明を受けた。

「と言う訳で、バスケ経験者の園田には女バスのコーチをしてもらいたいんだ」

「いやいや、俺なんかじゃとても荷が重いですよ」

「別に1人でやれとは言わないさ。私の方でも1人心当たりがあるからそいつと2人でやってくれたらいいよ」

「いや、でも……みんなも転校してきたばっかで見ず知らずのやつなんかにコーチされるなんていやなんじや？」

なんとか「コーチをやらせようとする篁先生を説得するのは難しいの

で、女バスのみんなは嫌がるだろ?と思いつて聞いてみた。

「バスケ教えてくれる? なら大歓迎だよ」

「休み時間の時、後輩の指導とかもしてたって言ってたからいいんじゃない?」

「なんと三沢さんと永塚さんが肯定派についてしまった。」

「でも、女子5人の中に男子が1人つておかしくない?」

「なおも食い下がる俺。」

「わ、私はちょっと苦手だけど頑張つてみる」

「バスケ経験者がいてくれた方が心強いから私も賛成です」

香椎さん、湊さんもまさかの賛成派らしい。

そうなれば、せめて1人くらいはと最後の袴田さんを見ると、

「あゆむーはひな達にバスケ教えるのいや?」

「…！」ピシャーン…！

（何これ、かわこうがいるやん…！）こんなに断つたら黙りやつ（つづ）

「…や、是非ともやります！」ただそれす。むしろやります！

首を傾げながら涙目で言つてゐる袴田さんを見た瞬間、体中に電撃
が走つた。

袴田さんに悲しい顔なんてわけにはダメだ。

こんな顔をさせてしまつてこるのは何の俺か？

ならどうすればいい？

動搖してしまい、つい反射で承諾の答えをしてしまつた。

「…ふふ、確かに聞いたからな。じゃあ頼んだよ

「はっ…！…いやそれは卑怯（ひき）…！」

なんとか正気に戻つたはいいけど、時すでに遅し、で言質をとつた
篁先生はいたずら子の笑顔全開になつていて。

「ああむんも早速ヒナの無垢（むく）なる魔性（まじやく）の餌食（えきじやく）か

（イノセントチャーム）

「無垢なる魔性？」

「ひなの」「つねなんです」

「一つねなんてあるのか、と思つけど今はそんなことを覚えてる場合ではない。

「まあ来週には私の方の助つ人を連れてくるから一緒にやつたらいいじやん」

「そんな簡単に……」

もう九分九厘諦めていたが最後にみんなの顔を見てみた。
……そんな期待に満ちたキラキラした田は反則だよ。

「あ……わかりました。コーチやります」
「よっしゃーーー！」

今度はしっかりと自分の意思で（なれば諦めでも）賛成の意思表示

をした。

三沢さんが嬉しそうにガッツポーズをとつて、俺の両手を握り

「男バスに勝つために、ビシバシよひこへな、あゆむん！…！」

「あ、ああ。」ひめみやひこへ、三沢さん

俺がそう返すと嬉しそうな顔だったのが一転して不機嫌顔になつた。

「もー『三沢さん』なんて堅苦しいから駄目。呼ぶなら『真帆』にして。それから『まほまほ』。それにあゆむーは微妙に敬語になるときがあるからそれも禁止だかんね」

「ちやん付けは？」

「ダメ」

「わ、わかったよ、真帆」

俺がちよつと戸惑いながらも返事をすればまた笑顔に戻つてくれた。

「じゃあ私も『紗季』でいいわよ

「私も『智花』でいいですよ」

「おー。ならひなも『ひなた』いーよ」

「わ、わたしも『愛莉』で大丈夫です。」

そうやって、みんなからも名前で呼んでいいと言つてもらえた。

「じゃあ俺のことも『歩』でいいよ。それと、ヒ、智花と愛莉も俺に對して敬語なんか使わなくていいよ」

そのお返しとして俺も名前で呼んでほしことを伝えた。

やっぱり名前で呼び合はるのは友達の第1歩だからな。けど、女子を呼び捨てにするのに慣れるのはちょっと時間がかかりそうだな。

「ところで、篁先生の心当たりつていつのはどんな人なんですか?」

これから俺と一緒に苦労を分かち合つることにも興味があつたので聞いてみる。

「えーと、私の甥で今は高1。中学時代は弱小校だったのを県準優勝にまで持つて行つた司令塔。そんで、いつもバスケのことだけ考えるバスケバカつてところかな」

「すごい人じゃないですか。そんな人がくるなら俺はいらないんじ

や
「

ちゃんとした人がくるなら素人の俺では逆に足を引っ張ってしまうんじゃないかと不安だ。

「そんなことないさ。そいつはどんなにすげても高一だしね。みんなの練習をみれるのは練習日時くらいだろうから、練習が休みの日なんかのフォローは園田にしかできないことだよ」

田線を俺に合わせ、俺の両肩に手を置いて授業中ですら見ていないような真剣な顔で言われ、こんな顔もする人なんだと感心してしまつた。

「で、あゆむん。今日はどうしよう？」

真帆にそう言われて時計を探せば、もう少しで5時になるとこりだつた。

「みんなも登下校はスクールバス？」

慧心学園の生徒は、ほとんどが登下校にスクールバスを利用している。

みんなもそれは同じくらい、俺も自転車でも大丈夫な距離だけどス

クールバスを使うつもりでいる。

それを考へると6時半くらいには片付けないとまずいので、あと1時間半くらい練習できるところなのだ。

「じゃあとりあえずみんなの実力を見てみたいから、俺もいれて30回をやってみよ!」

「ねえ、30回ってなに?」

紗季が質問してきたのでみんなの顔も見てみると、どうやらやる気になっている智花以外全員全滅らしい。

「バスケ経験者は智花だけ?」

「そうだよ。しかも、もつかんはすぐ一まいんだよ。夏陽なんて目じゃないくらい」

「もう真帆、そんなことないよ」

夏陽つていうとたぶん竹中君のことだから智花は男バスのキャラクターよりもつまいのか。

それは頼もしいと思う反面、他の4人が素人なのに大丈夫だろうかと不安もある。

まあその辺りはこの後の30回で見てみたらいいか。

「30コ3は3対3に分かれてハーフコートでやる試合みたいなもののことをいうんだ。という訳でそれをやりたいからみんな着替えときてよ」

「了解

「わかったわ

「うん

「おー

「う、うん

各自返事をしてみんなで体育倉庫の方へ向かっていく。どうやら今こを更衣室として使つてゐらしい。

「さて、じゃあ俺も着替えてこようかな

この後の30コ3に期待半分、不安半分に思いを馳せているところ重大な問題があることに気が付いた。

「俺、ビームで着替えたらいいんや?」

02・「チ就任（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
ここおかしいんじゃない？みたいな指摘があれば遠慮なく感想で書いてもらえるとうれしいです。

03・30月（前書き）

ついにバスケ描写ありの話です。
私自身がバスケ素人なので不自然な描写は寛大な心で見てください。
それでは……どうぞ。

~~ ガールズトーク ~~

湊 智花「いちじょびつなるかと思つたけど志君が口一チ弓を受け
てくれてよかつたね」

まほまほ「まあもつかんとわたしがいれば、なつひたちなんてらく
しうだつて」

紗季 「トモはともかくあんただつて素人でしょ」

まほまほ「そんなことないつて。せいしょのときだつて、わたしが
シユートきめたからわたしのチームがかつたんだし」

あいり 「あはは、そつこえばそんなこともあつたね

まほまほ「そつこえば、じやないつて。もつかんはおぼえてるよ
？」

紗季 智花「うん、ちゃんと覚えてるよ。そのあといつつてくれた」と
も全部

ひなた 「服が脱げないー助けてー」

ひなた 「服が脱げないー助けてー」

しばらくして体操服に着替えたみんながてきた。
ちなみに俺は着替えに使えそうな場所が見つからなかつたのでトイ
レで着替える羽田になつた。

「あれ？ 紗季、アイガードなんでもつてるんや？」

「？ ええ、バスケすると負けられを使つてるの。それより……」

「ねえ！… あゆむん、さつき関西弁じやなかつた？」

なぜか興味津々の真帆に氣おされてしまつ。

「そつか、さつきからなにか違和感があると思つてたけどそれが理
由なんだね」

「おー。なんでやねん？」

俺は関西が長かつたから、敬語の時は普通だけど地は関西弁なんだ
と説明した。

「そろそろさつを言つた30回をやろ。チームは、俺と紗季と
ひなたでチーム、智花・真帆・愛莉でチームに分かれよう」

「よつしゃー、むつかん、アイリーンいつちゅやれるといひみせ
るぞー」

ほんとに真帆は元気な子だな。

「みんなルールはどれくらい知ってるん?」

「ダブルドリブルやトライベーリングとかの初歩的ななら知ってるわ
よ」

紗季が答えてくれ、智花を除く3人も同じ程度らしいのでどうあえ
ずは問題ないな。

「30-0では相手からボールを取つたら一旦ハーフラインまで戻
つてから攻撃やからな。じゃあ、そっちの攻撃からはじめるよつか」

智花にボールを渡し、ディフェンスにつく。

「紗季は真帆、ひなたは愛莉を担当してくれ、俺は智花を相手する
から

「了解」

「おー、わかった

それぞれのマッチアップの相手を決め、配置につく。
そしていよいよココが始まった。

「真帆つ

ハーフラインに立っている智花とボールの受け渡しを行うと、智花
は少しドリブルをして真帆にパスをだした。

「まかしとけ

「いかせないわよ

真帆にパスが渡ると予定通り紗季がマッチアップにつく。
フリーースロー ラインより若干外の位置でパスを受けたので、紗季を
抜くべくドリブルをする。
まあそこは素人らしい感じの、べつたんべつたんとしたドリブルな
のは予想通りだ。

紗季も懸命にディフェンスをしてコートの端に追い詰めていく。

「くそー、アイリーン

追い詰められた真帆はコートの反対側にいる愛莉にパスをだす。

「あ、

苦し紛れのパスは愛莉には強すぎたらしく、パスをうまく受け取れなかつた。

パスミスの原因はパスの強さだけじゃなく、愛莉がびっくりしそうていたこともありそうだ。ルーズボールはひなたがとつたので、今度はひなちのオフーンスに交代だ。

「じゃあ今度はひなちの番や」

さつきとは逆になつて、智花とボールの受け渡しをやつてオフーンスをスタートさせる。

みんなの実力を見るのが目的なので、まずは紗季にパスをしてみる。

「まかして」

無事パスを受け取り、ちょいびとゴールドにいるひなたに向けてすぐパスを出す。

ワンバウンドを受け取りやすくしてくれたパスを体全体で受けたひなたは、愛莉が少し離れていたので両手で押し出すよじりショートを放つ。

2、3度リングに当たって危なつかしくもネットを振りりかじりがで
きた。

「ナイシ シュー」

「おー。 やつたー」

無事シューを決めたひなたと紗季がハイタッチを交わす。

「へへー、今度はひなちの番だよね？最終兵器もつかん、やつてお
しまこ」

「わつ真帆つてば」

最終兵器と呼ばれて照れている智花。

とこづか始まって数分で最終兵器が投入されるつてどうなんだひつ?
けど、そっちがその気なら……

「智花、竹中君よりつまつて言つ実力を見せてー や

「う、うん」

ハーフラインに立つた智花にそつ告げる。
さて、そつ言ったものの正直止められるかは不安なといふだ。

智花とボールを受け渡しをして氣を引き締める。

今度はドリブルで抜こうといつも満々な感じで対峙するので、抜かせまいとしっかりと腰を落としてそなえる。

しばらく、ダンツダンツと様子を見る感じでドリブルをしてキッと表情を変える智花。

「行きます」

そう宣言して閃光のようなスピードでドリブルを仕掛けてくる。

「へ」

間一髪で止めることに成功したが、内心冷や汗をかいて余裕なんて吹き飛んでしまった。

すぐさま体勢を立て直そうとする智花に、そのスキをつこうとステイールを仕掛ける。

なんなくかわされ、逆にこちらの体勢が崩れたのを好機に抜きにとかつてくる。

なんとか体勢が崩れるのをふんばり、フリースローラインに沿つて智花と並走する形になった。

けどラインの半分くらいのところで智花が急制動をかける。完全に虚をつかれ止まるのが若干遅れた。

「なつ」

智花にはそのちょっとの遅れも致命的で、すぐシユートモーションに入ってしまう。

そして俺はティファンスをするのも忘れ、視線を釘付けにされてしまった。

あの急制動の後だというのに一切崩れていらないフォーム。まるで教科書の筋書きのような流れのエリショーン。

時間がゆっくり流れていぬよひに感じぬほど智花の

だつた。

卷之二

智花の放ったショートはショットを立ててネットを揺らした。

「ナイス、もつかん」

「す、すごいね、智花ちゃん」

真帆たちに褒められて照れている智花に1つ質問してみる。

「智花つてどつかの有名チームのエースやつてたりしん？」
「そ、そんなことないよー」

思わずそんなことを聞いてみたくなるほど智花のショートは綺麗だつたし、その前のドリブルもすこかつたと思う。

なるほど、これなら真帆が智花の実力が竹中君より上だつていつのも頷ける。

それほど智花の実力は小学生の域を抜きんでている。

竹中君の実力は知らないけど智花より上だといつなら相当な強者のまちうになつてしまつ。

けどバスケは5人でやるスポーツだ。

たとえ智花一人がズバ抜けて強くてもイコールチームが強いとは限らない。

でも頼りになるHースがいるといつのは、すこく心強いことであるのは変わらないので嬉しいことだ。

「じゃあ今度はこつちの番やな」

智花にボールを渡してもらい、ハーフラインに立つ。
智花の実力を見せ付けられて黙つていられるほど俺は人ができていな

ない。
むしろワクワクしてしまつて、みんなの実力を測るといつ本来の目的を頭の片隅に追いやつてしまつてゐる。

実力的には智花より数段劣る（自己評価）けど、とつておきを見せれば多少は驚いてくれるだらつ。

「さて、行くで」

本日4度目となる受け渡しを行い、オフェンスを開始する。

俺に智花が見せたほどのドライブで抜き去るなんてことは無理なので、フェイントを混ぜてドリブルでゴールに近づくしかない。

けど智花はディフェンスもうまく、俺のフェイントに時折引っかかるけどすぐ体勢を持ち直してプレッシャーをかけてくる。

逆にこっちが体勢を崩せば、即座にステイールを狙つてくるので1秒たりとも気を抜けない。

（くそー、ディフェンスもめっちゃうまいな。せやけどもつちょい、ゴールに近づければ……）

このままではジリ貧なのは確実なので勝負にすることを決め。まず、ボールと智花の間に自分の体を置くような感じで、ほぼ真右と言つていいくほどの向きでドリブルをする。

これには智花も一瞬驚いていたが、すぐ気持ちを切り替えて追いついてきた。

しかしここで、智花が追いついたのを見計らつて仕掛ける。

「えつ」

『とつておき』その1

今まで右に向かつてドリブルをしていたのを急に反転させる。ただそれだけなら智花は余裕で着いてくるだろう。

けどその時、右手でドリブルをしていたのを左手に替え、智花に背を向け続けている格好でドリブルの向きを、ゴールの方へ90°。変える。

智花からは一瞬ボールが見えなくなり、完全に抜き去る形になる。

これが俺の『とつておき』その一の『ドリブルする手を変える』だ。これをやられるとたいていはリズムを崩され隙ができる。

「おーおー」

しかし、智花も一筋縄ではいかない。

完全に抜いたはずなのに、ゴール下まで行く前に追いつかれてしまった。

俺はフリースローラインより若干内側に入つたところで止められてしまつ。

本来ならここでまた智花のチェックをかわすための作戦を考えなければならぬが、俺はかまわずショートを放つ。

『とつておき』その2

智花のブロックを氣にもせず放つた俺のショート。

それを放つた俺は、体はゴールの方を向き、ゴールから遠ざかる方向、つまり後ろに向かってジャンプしている。

これが『とつておき』その2で、俗に言つフ_Hイ_Hダウ_Hイシショートのことである。

智花が懸命に手を伸ばしジャンプするが残念ながら（それでもギリギリだった）ボールには届かず、そのままボールはネットを揺らした。

ボールがコートにバウンドしているのを、乱れた呼吸を整えながら見ていた。

周りがやけに静かなのに気付くのには呼吸が落ち着くくらいまでか

かつた。

そして、ふいに静寂は破られる。

「すげー！ もつかんと互角だー」

「トモを抜いた時は一体なにをしたの？」

「あゆむーなんかすゞかつたー」

静かだったのが一転、真帆をはじめ紗季とひなたが駆け寄ってきて
ワイワイガヤガヤと騒ぎはじめる。

「へたなんてうそじやん。十分つまいじやん」

「ううで、あれがこいつなつて……」

褒めちぎりてくる真帆とさつきの俺のプレイを思い出さうとしている紗季を見ているのがかなり恥ずかしくなってきたので、早く次のゲームを始めるべくボールを拾いに行き智花に渡す。

「……もう一回勝負」

ボールを渡すと、そつと睨みつけるよつこ俺を見てくる。
静かだった智花も、実のところは悔しくて黙ってしまっていただけ

だつたらしい。どうやら智花は負けず嫌いみたいだな。

そういう俺は幾分頭も冷え、みんなの実力をみるという目的も思い出したので、今度はちゃんと紗季やひなたにバスをだして智花との勝負を意識しそうにしよう、と自分に言い聞かせる。決して智花にビビって敵前逃亡しているわけではない。

それから何本か30回をやって、6時半くらいになつたので今日はそれで終了にすることになった。

勝負は真帆たちのチームが勝つたので片づけの間中、真帆はウキウキとしていて、反対に紗季はバスつとしていた。

俺との勝負が1勝1敗で、あとは俺がまともに勝負をしなかつたので智花も不満そうな顔をしている。

勝負をしなかつたと言つても智花がオフェンスの時は俺がマークについていたので、そこで勝負は7対3くらいの割合で智花の勝ちだつたので、それで満足してほしいところだ。

そういうしているうちに片づけも終わつたので、みんなでスクールバスに乗り家路についた。

03・3023（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
誤字・脱字や感想等あればぜひ書いてください。

04・女バスの絆（前書き）

今日は若干ボリュームが多めなので少しきり読みでください。
それでは……どうぞ

（） 交換日記（ひづけ）（）

まほまほ「いやーあゆむんってけつこうつかつたよね？」

湊 智花「うん。最初のドリブルとかフロイダウエイシュー卜なん
かはすこかつたね」

紗季 「へー後ろに飛んで打つのはフロイダウエイシュー卜って
いうんだ」

湊 智花「そりゃー。結構難しいんだよ、あれ」

あいり 「そんな難しいシュー卜ができる人が教えてくれたら私で
もなんとかなるかな？」

まほまほ「だいじょうぶだつて。そもそも、なつひたちなんてらく
しうだじ」

紗季 「もうまたあんたは適当なこと言つて。でも、みーたんも
ゴーチを連れてくるつて言つてたし、2週間がんばつて練習して男
バスに勝つわよ」

ひな 「おー。ひなもがんばる」

あいり 「わたしもがんばつてみる」

まほまほ「いやいや、かつてこじきさなつ」

次の日、登校してきた俺は俺を見つけ手招きしている紗季に誘われ、昨日と同じ席に向かった。
真帆、だけまだきていないので窓側から席に着く

「おまめ」

俺が挨拶をするとみんな「おまめ」へ返してくれた。

「ちつちつだけ今日はなにをしようかしら~」

席に着くなり隣の紗季から今日の練習について質問されてしまつ。
今日は木曜だから体育館は使えないので昨日の夜に考えてこたこと
を提案してみる。

「具体的な練習はもう一人のコーチの指示でやつた方がええと思うから、今週は基本的に体力づくりをした方がいいんやないかと思うんやけど、どう?」

最後の方の質問は、この中で唯一のバスケ経験者である智花に向かって聞いたみた。

「それでいいんじゃないかな。じゃあランニングとか?」

「そうやな。この辺でちょうどいいランニングコースつてない?」

「うーん、それなら河川敷とかがいいかもね。往復2キロくらいかな」

紗季がそう提案してくれ、距離もちょうどいいくらいなのでとりあえず今日はそこにすることに決めた。

「じゃあ、始めは河川敷までランニングにしよか。で、悪いんやけどそれはみんなだけで行つてきてくれんかな?」

「ふー、なんであゆむーはこない?」

「俺は今日は男バスの練習を見に行つて」ようと思つとくるから

やつぱり敵の実力を知つとかないと作戦もたてれないから、これは

重要なことだ。

そんな感じで練習について話していたら簾先生が入ってきた。

「はーい、授業はじめの一席について

ダダダダ……パンつ

簾先生が入ってきてからすぐに廊下を走る音が聞こえてきたと思つていたら、教室の後ろのドアが勢いよく開いて肩で息をした真帆が飛び込んできた。

「ハアハア……セーフ？」

「まあ、ギリギリだな」

苦笑いをしている簾先生をしつゝ、俺の隣の席についた真帆に後ろに座る愛莉から声がかかった。

「おはよー、真帆ちゃん。今日はすいぶん遅かったね。お寝坊でもした？」

「おはよー。いやーパパの説得に時間がかっちゃって危うく遅刻するところだった」

遅刻の理由（未遂だけ）はまだやう寝坊ではなかつたらしい。真帆の性格なら寝坊でも不思議ではない、といつか常習犯でもおかしくないような感じだけど、後からみんなに聞けば真帆は無遅刻無欠勤の優良生徒なのだそうだ。

それならそれで元気いっぱいの真帆のイメージとぴったりだなと思つてしまつ。

「パパの説得つて、あんたまさか……」

「そうやつ、そのまさか。前から言つてたんだけど、やつと買つてくれるつて

「まじ真帆、静かにしる。授業始めるだ

「はーい。まあくわしくは休み時間にね

私語を注意されたので、先生に向かつて返事をしてみんなに聞こえるような小声でさう言つて前を向き、授業の準備を始める。

（なにを買つてもひつたか気になるといふやけび、まあ次の休み時間に教えてもらひもひつからいいか）

そんなことを思いながら俺も授業を受けている『フリ』をする。悲しいことに慧心学園の授業は前の学校より進んでいて俺にはまづりわからない（あまりわからうともしていない）。

2日目にしてなかば諦めている状態で、テスト前に賢そうな紗季や智花に教えてもらおうと思っている始末である。

なので俺はこの時間を使って、昨日の30回の時のみんなの印象をまとめる算段をしていた。

真帆

- ・運動神経は良さそう（体力もあり）
- ・ジャンプ力もありショーター向き
- ・単純思考なのがたまにキズ
- ・ムードメーカー的存在

紗季

- ・冷静沈着
- ・洞察力もあり司令塔向き
- ・チームのお姉さんの存在
- ・アイガードがかっこいい

智花

- ・絶対的工具
- ・俺に指導できることなし
- ・やや負けず嫌い

愛莉

- ・極度の怖がり（2週間でなんとかなるか？）
- ・身長が高いから絶対センター

ひなた

- ・おひとつしていて運動は苦手っぽい
- ・ショートはホールまで届くかもあやしい
- ・体力もなれやつ
- ・無垢なる魔性には要注意

昨日の状況を思て出しながらメモをとつてこべ。

（やつぱつ一番のネックは愛莉やな。恐怖症が治ればすいこセントーになるんやけど週間じゃわがに無理やんな。わたくしがついたものかな）

そんなことをついついと呟えていたが、この間とか授業が終わるといいだつた。

朝のことを聞くみんなに話したいといつて真帆が授業が終わるやいなや口を開く。

「ねえねえ聞いてよ。朝のことをまだい、やつホールを買つてもいいやん」とこなつたんだ

「やつぱつ『オールの』ことだつたのね。真帆パパはいつも甘こんだか
い」

「やつでもなこよ、苦労したんだからなオールポート買つてもいい
の」

「オールポート……」

思わず大きな声を出してしまつて愛莉を驚かせてしまつたとしても仕
方ないと思つ。

なんせ今、真帆は父親にオールポートを買つてもらつたなんて言つ
たのだから。

「オール本体ですらなかなか手が出る値段じやないのにオールポート
を作るだけの庭があるなんてどんな家だと思つてしまつ。

「真帆ん家つてもしかしてすいこお金持つだつたりする？」

「あはは、やつぱり驚くよね。真帆の家はお父さんが資産家でお家
もすつじく大きいんだよ。プールもあるし家にメイドさんがいるく
らいだし」

「マジでつーメイドまで……」

後ろに座る智花に小声で聞いてみるとまたしても驚きの事実が発覚
した。

しかし、真帆がお嬢様だったとは驚きだな。

こんなお転婆なお嬢様がいたんじやメイドさんもたぶん苦労してそつ

だな。

「なんだよ、あゆむん。そんなにじりじり見ぬなよ……」

「あ、悪い」

お嬢様なんているんだ、と考えていたらついつい真帆のことをじりじり見つめる形になってしまった。

「ふふ、真帆。顔が赤いわよ」

「へ、へへ。それより「コードは今週中に使えるようにしてくれる」から、来週からは家でも練習できるから」

まだ顔がちょっと赤いけど、それをついついんだからいいやしつべなりそのでそれには触れないでおい。」
そんなことをしているうちに、次の授業が始まることになつたので話は終わりになつた。

やつして昼休みになり、今日せの弁当を持つてきてないので購買パンを買つに行くこととした。

「あ、あむむんも購買? なら一緒に行!」

「お嬢様なのにパンなん?」

「朝急いでたから忘れてきたのよ、あいつ」

「二ーじゃん別に。ほら聞く行かなこと二ーパン買えな二ーじゃん」

そんなやり取りをして真帆と一緒に購買に行くことになった。
出遅れはしたもののお田町のパンを買つことができて、満悦な真帆と一緒に教室に帰る途中、昨日のことと『眞になつた』ことを聞いてみる。

「女バスつて真帆が作つたんやん? こつべりこで作つたん?」

「えーと、去年の一〇円くらいかな。なんで?」

「ちょっと言つてびつことを聞いてつとついたので、少しの間ためらつてしまつたけども意を決して聞いてみたことにした。

「一〇円くらいならできただいたい半年くらいこやんな? それにしてはみんなまだ初心者みたいな感じやつたからあんまり真面目に練習してこんかつたんやない?」

「最初のうちはちゃんと練習してたんだけどやつぱつつまんないじ

やん。だから最近はずっと試合しかしてなかつたからなー」

「Jさんこと眞帆のはなんやけど、なら今回のJとはそれほど無理して勝たなくともこいんじや? 遊びでやる感じのバスケなりそれJや眞帆の家でもやれるんやし」

「…………」

眞帆が黙つてしまい、ちょっと言い方がまずかつたかなと思つてみると、いきなり眞帆が携帯をいじりだした。

「よし。みんなには眞帆たから中庭に行Jや」

「え、ああ」

いきなり中庭に行Jやと言つた訳もわからず、とりあえず眞帆について中庭に行き、空こでいるベンチに2人で座る。

眞帆は何か考へていてるようで無言で「えまざー」のど、とりあえず買つてきたパンを食べ始めることにした。

1つ食べ終え、2つ目を食べよつとしたところで眞帆がいつになく眞剣な顔をして話し始めた。

「もつかんつて、ここには去年の2学期くらいに転校してきたんだけど初めの頃はなんか暗い雰囲気で、1人でいることを望んでる感じだったからみんな近づきにくくてしばらく友達もできなかつたんだ。私も初めはあゆむんが来た時みたいにいっぱい質問してたんだ

けど、答えてくれるんだけど返事がそつなくてだんだん話しかけなくなつてつたんだ」

「今の智花を見てたらそんな頃があつたなんて信じられないな

「ほんとにそんな感じだつたんだから。みーたんも氣を使って、みんなと仲良くさせようといろいろやつたんだけどそれでもダメで、ずっともつからんはひとつぼつちだつたんだよね」

真帆と智花の間にそんなことがあつたなんてな。智花が2学期の途中なんかに転校してきたなら、親の都合じゃないなら前の学校でなんかあつたんやろうな。

「それからしばらくして、体育の授業が急にバスケになつたんだ。まあ私はその時バスケするのに夢中でもつかんのこと見てなかつたんだけど、夏陽と一緒にチームになつた時に私のショートパンツにつかかつてきやがつたんだ。それで私と夏陽でケンカになつちゃつて、それがだんだん大きくなつて男子対女子でバスケで勝負することにになつちやつた。もつかんを女子のチームにみーたんが誘つて、なにか言つたら急に田つきが変わつてそこからのもつかんはすごかつたんだよ！ 夏陽なんて簡単に抜いて、私たちがボール持つたらすぐバスをねだつてそのままショート決めちやうし、男子のボールも自分でとつてショートしちやうし、男子が1本ショート決める間に2本3本ショート決めて、めちゃくちゃかっこよかつた。そんなもつかんを見て、バスケつてスゲつて思つて授業終わつた後の着替えする時からもつかんにバスケについていつぱい話かけるようになつたんだ。初めの方は無視されてる感じだつたんだけど、次の日も、その次の日も話かけてたら今度はだんだん話すようになつてくれ

れてうれしかったな。それで気付いたらいつも一緒にいるよつになつて自然に『友達』になつてた』

少ししゃべり疲れたらしい真帆が買つてきたオレンジジュースに口をつけた。

「友達になつて、話してるうちになんでそんなにうまいのかつて聞いたから前の学校でバスケ部だつたことや、だけどもうバスケは辞めたつてことを言つたんだよね。それを聞いたら、もつかんはあんなにつまいのにもつたといいし、私ももつかんみたいにバスケしたいつて思つて一緒に女バスを作つて言つたみたんだ。もつかんはいいよつて言つたんだけど、私はもう作る気満々だつたからみーさんに顧問を頼んで、すぐOKをもらつて、その時に部員が最低でも5人はいるつて言われたから次の日から部員集めを始めたんだ。最初は紗季を誘つたんだけどバスケなんかに興味ないつて感じで断られちゃつた。何日か説得したんだけどダメだつたから、あのアイガードを作つて「これもう作つちゃつたから責任とつて入部しろ」つて言つたら入部してくれたんだよね」

「いやいやそれ、かなり無茶やん。よくそれで紗季は入部したな

「あのアイガード作るのに結構苦労したんだよね。パパを説得するのは時間がかかつちやつて無理だからお小遣いで買つたり、紗季の眼鏡の度をやんばるに調べてもらつたり。きっとそんな苦労に気付いて、私がどれだけ本気なのか知つちゃたから入部したんだと思うよ。だてに幼馴染やつてないからね」

やんばるって誰だろ?」と思いつつも、今は些細なことなので話を先に進めてもらひ。

「それで紗季の勧誘に成功したから次は愛莉とひなたの勧誘に?」

「そっ。愛莉はよく泣いてるところを助けたりしてたし、ひなたは4年生の頃に給食を食べてあげたりして仲良かつたから勧誘は結構すぐ終わつたんだ。これで5人そろつたから女バスができる、初めての練習の日に試合をしたんだ。そしたらもつかんがすげー楽しそうな笑顔でバスケしてるんだよね。男子との試合のときはあんなに鬼気迫る勢いだったのに。あとで聞いたら、もつかんはバスケのことになると極度の負けず嫌いになっちゃうらしくてそれが原因で前の学校から変わってきたんだって。けど、私たちとやつてる時はそんなことにならないで心から楽しんでバスケができるって言つてくれたんだ」

なるほど、だからみんなすゞぐ仲良しで信頼し合つてる感じがするんだろうな。

そんな中に俺をいってくれるのには、すゞぐうれしいことなのと同時にうまく馴染めるかと心配になつてしまひ。

「だからもつかんにとつて、この女バスはきっとすごく大事なところだ思うんだ。確かにバスケなら、もう私ん家でもできるけどたぶんやらないと思う。だつてもし、女バスがなくなつてもまだもつかんがバスケをやりたって言つたら、私たちはきっと女バスを守れなかつたことを悔しく思うし後悔しちゃうと思うんだ。私たちがそんなことを考えるのもつかつてゐるから、もしこの試合

で負けて女バスがなくなつたら、きっともつかんはバスケを辞めると思うよ。少なくとも私たちの前ではやらないと思う

そこまで話して、今まで少しつつむきながらしゃべっていた真帆が瞳に涙をにじませながら俺の方を向く。

「だけど、もつかんはバスケが大好きだから、もつとずっとバスケをやつていいだらうから、そして私ももつともつとバスケがうまくなりたいから絶対試合に勝ちたい！ そのためならなんだつてするし、なんだつてしたい！だからあゆむんつ私たちにバスケを教えて！！」

正直、俺は悔つてた。真帆たちがこんなに真剣に考えていたなんて思つてもみなかつた。

これからは、もつとずっと真剣に真帆たちが勝てるように努力することを心に誓つ。

「負けてもいいじゃないか、なんて言つちやつて悪かつたな。ごめん。これからは真帆たちの力になれるようにもつと努力するよ」

「謝らなくていいよ。……じゃあこれからビジネス鍛えてくれよな」

「ああ、まかしとけ」

うるんだ瞳を拭いながらそつと言つてくる真帆に俺も精いっぱいの誠

意をこめて答える。

それから2人でパンを食べ、教室に戻ると紗季に盛大にからかわれてしまつた。

どうやら真帆は、『あゆむんと2人で食べるからみんなはもう食べていいよ』としか伝えてなかつたらしくあらぬ疑いをかけられてしまつていた。

顔を真っ赤にして反論している真帆には気の毒だけど、下手にあれに巻き込まれると余計ややこしくなるのは目に見えているので真帆には1人で耐えてもらうしかない。

そつしているうちに昼休みが終わつていつたのだった。

04・女バスの絆（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
女バスの結成について書いてみましたけど、やっぱり原作ほどグッ
とこないです。
誤字・脱字等あれば指摘をお願いします。

05・男バスの理由（前書き）

もつら話なのに鼎すらでてきてない……
カメ速度で進行していきますがよろしくです。
それでは……どうぞ

05・男バスの理由

（～ ガールズトーク ～）

紗季 「ふふふふふ、いきなり歩と2人で」はん食べるなんてどうしゃつたの」

まほまほ「べつになにもないって。ただてんきがよかつたからそれでたべよつてことになつただけだつて」

あいり 「ふふ、真帆ちゃん顔真つ赤だよ」

ひなた 「トマトみたーい」

湊 智花「そんに照れなくともいいのに」

まほまほ「うがー。ほんとになにもないんだつてば」

毎の騒動はそのあとでの休み時間の度に続いたけど、帰りのHRが終

わるいのにやつと落ち着いた。

ずっと必死に反論していた真帆は、すでに疲れ果てた感じで机に突つ伏してくる。

この後ランニングに行つても「いつもやのに大丈夫なんかな？」

「おーい、智花、それに園田。悪いけど」の後職員室に来てくれ

HRも終わり、帰る支度をしていると簾先生から呼び出しがかかった。

簾先生はそれだけ言つとさつと教室から出て行つてしまつたので要件を聞くこともできなかつた。

まあ智花と一緒に呼び出されたなら女バス関連だとは思つけど、なにかしたかなと不安にもなつてしまつ。

「美星先生なんだろ？」

智花も俺と同じく浮び出されたことに心当たりがないらしく頭をひねつている。

「まあ行けばわかるか。とりあえず、どんだけかかるかわからんから真帆たちは先にランニング行つてくれん？」

「オッケー。河川敷まで行つてくれればいいんだよね」

「そんでいいよ。ただ、自分がどんだけ走れるか自覚するためにや

ることから無理なペースで走らなくていいから、そこだけ気をつけてな

「おー、わかったー。無理しないでがんばる

「ひなちゃん、それなんか変だよ」

真帆たちに先に行くようになんて、帰り仕度ができたので智花の方を見ると智花も準備が終わつたようだつた。

「じゃあ行つてみるから無理はせんようになんて気をつけな

「またあとでね

真帆たちと別れ、智花と職員室に向かう。

智花と一緒に職員室に行くと待つっていたのは篠先生だけではなかつた。

「おーきたか、ひなちゃん

呼ばれて行くと会議室みたいなところ連れて行かれ、そこには知らない先生と竹中君がいた。

どうやら試合関連で呼ばれたのは間違いないようだ。

「なんで湊はともかく園田が一緒なんだ？」

「ちひの事情を知らない竹中（向こう）が呼び捨てだからちひも呼び捨てに変えてやる）が睨みつけるような眼をして問いかけてくる。

「園田は女バスの臨時コーチになつたんだ。だから今日もあせつた

「なつ！ 本当か

篁先生が説明をしてくれるけども信じられないじへ驚いた顔でこちらを見てくる。

「まあ、成り行きでね

「お前、男子のへせに女子のへせのかー

「確かにコーチになつたのは成り行きやつたけど、今はもう本気で女バスを勝たしてやりたいって思つる

俺が竹中に睨み返すよつて言つて、隣の智花の顔が驚きに変わり、そしてうれしそうに笑顔になつた。

まだ睨んでくる竹中を制したのは意外にも見知らぬ先生だった。あとで聞いたところの人は小笠原先生と言つて男バスの顧問をしている人らしい。

「まあいいじゃないか竹中。女バスにだつてコーチくらい必要だろう。たとえ無駄なことだとしてもな」

言い方に力チンときたけど俺がなにか言つよつ先に篁先生が口を開く方が早かった。
ちなみに篁先生もこめかみがピクピクッと動いていたけど我慢したらしい。

「小笠原先生、メンツもそろつたことですし今度の試合のルールを決めてしまいましょう」

「やつですね。やつやと決めてしまいしょうか」

今回、俺と智花が呼ばれた訳はバスケのルールを知らない篁先生の代わりに今度の試合のルールを決めるためだった、というのは後から聞いた話だ。

「まず、こつちは5人しかいないんで交代要員がいない訳だから、そつとも交代はなしにしてもらわないと困ります」

「それでは5ファアルで退場になつたらどうするので?」

篁先生が5ファアルの意味がわからないらしいので助け舟を出す。

「退場にしないでフリースローなんかにすればいいんじゃないですか？」

「……まあそれでいいでしょう。それではフリースロー2本とそのあと のボール権も移るところになりますか。あとは普通のルールでいいんじゃないですか？」

あと何があるかなと考えていたら智花に服を引っ張られる。

「時間を短くできないかな？ やっぱり長こと実力の差がでできちゃうから」

「確かにやつやな

智花は自分では言こ出しづらっこりして俺に頼みにまわして頼んでもきた。

「試合時間なんですが前半後半6分の計12分にしてもうえませんか？」

「なつ、それは無茶だろー！」

竹中が反対していくけど篁先生がすかさずフォローしてくれる。

「まあ負けるのが怖いなら無理に短くしてくれ、なんていませんけどね」「

「……ふんつ、いいでしょう。無駄な試合が早く終わるなりすうどいいですね」

竹中はまだ何か言いたそうにしていたけども小笠原先生が了承してしまったので何も言えずにいた。

「じゃあ後は普通のルールでいいですね」

小笠原先生がそう言つてくるけども、俺も智花も何も思いつかなかつたので黙つて頷く。

俺達2人が頷いたので篁先生がこれで終わりとばかりに席を立つた。それに続いて俺と智花も会議室を出ていくと、篁先生がついてこいと手振りで示したので一緒に職員室を出る。

近くにある自販機まで行き、ジュースを齧つてもらこ一息つくことになつた。

「ふー、助かつたよ2人とも。なんせルールなんてさっぱりだから私だけじゃ危なかつたよ」

「なら先に言つておいてくれればもう少しどういう考へておけたのに」

文句を言つ俺に「いやーめん。」と全然反省していない感じで謝つてくれる。

「いやーなんせカマキリの野郎、いきなり今度の試合のルールを決めるやつなんて言つて出すからやー」

「カマキリ?」

「竹中君と一緒にいた先生のことだよ。小笠原先生つていつて男バスの顧問をしてる人」

確かにカマキリっぽい顔だつたな、なんて思ひだしていると、いちいち棘のあるしゃべり方も思い出してしまってイラつとする。

「篁先生、俺はこれから男バスの練習を見てこようかと想つんですけど、試合のビデオとか持つてないですか?」

「んー、持つてないな。まあ後でけりと探してみるよ」

そうしてしばらく休憩した後、篁先生は職員室に戻つて行つたので俺は体育館に、智花はみんなに合流するために2人で昇降口に向かう。

「もしかして、昼休みに真帆と女バスができるまでの話をしたんじ

やない？」

「な、なんでそれを」

昼休みに話した内容は、真帆があれだけ紗季達に聞かれても言わなかつたから知らないはずなのに。

「さつき竹中君に言い返した時の態度で気付いたやつだ。あー知つちやつたんだつて、そのうえで勝たしてやりたいくて思つてくれたんだつて」

「態度だけで？ そんなにわかりやすいかなー俺？」

「本気なんだつていうのはわかつたよ。昨日転校してきたばかりなのに、そこまで私たちのこと考えてくれる理由なんてそれしか思いつかないよ。それで真帆はどんなことを話したの？」

ここまでバレたら仕方ないので真帆に聞いたことをかいつまんで説明することにした。

「やつかーやつぱりみんなにはバレちゃつてるんだ」

「バスケが好きすぎておかしくなつたやつだー。」

「それもだけど、この試合で負けたらバスケを辞めよつて思つてゐること」

やつぱりか。

昼休みの真帆の話で薄々はそうなのかもと思つていたけど、本人から聞くと重さが違う。

「確かにバスケは性格が変わっちゃうくらい好きだけどそれ以上に好きなものができたから、もし負けても笑顔で『次はなにしようか?』って聞いてみせるんだ」

「そんなことにはさせない。俺にできることは全部して女バスを勝たせる。真帆とも約束したしな」

「ありがとう。頼もしいね」

そのままひじいていたうちに昇降口についたので体育館に向かつたために智花と別れた。

体育館に着くと田舎での男バスはひょいと練習を始めるとひりしかつた。

俺は体育館の隅に座り、敵情視察を始める。

基本的なドリブルの練習から始り、バスの練習、シュートの練習と順番にこなしていく。

「やつぱり全体的にうまいな。さすが地区大会優勝校やな

実力の高さに感心すると同時に、女バスとの差を改めて認識し顔が引きつてしまつた。

そうしてこるとレイアップのショート練習が終わって休憩になった。すると、竹中が後ろに4人引き連れて俺のところへやってきた。

「おい、お前本気で女バスのコーチやるのかよ」

「せつかも言つたけど俺は本気やよ」

男バスの練習内容をメモしながら答える。

「素人同然の女バスがたつた2週間の練習で俺たちに勝てるようになるわけないだろ」

「それはやつてみやなわからんやうやつへ。 真帆たちの場所は渡さへんよ」

さすがにここまでバカにされたら我慢できないので、メモをとるのを止め竹中と睨むように向かい合つ。

「俺たちだつて女バスが憎くてつぶそつとしてるんじゃない。ただ、真面目にやうじずに遊んでるなら余所でやればいいだろ」

「真帆たちにとつては、ここでみんなでやるバスケに意味があるんや」

昼休みに真帆から聞いて、わざと智花と話して、俺の感じたことをぶつけた。

「俺たちだつてもつと練習したいんだ。お前、俺たちが去年地区大会優勝したのは知ってるか？」

「ああ、知つとるよ。なにか？ そつちには実績があるから女バスの方がなくなればいいとでもいつんか？」

「違う。じゃあどうして去年の成績を『地区大会優勝』って言つたは知らないだろ？ それは県大会が1回戦でボロ負けだつたからだ。それが死ぬほど悔しかつたし、もっと練習しないといけないって思つたけどもう場所がなかつた。あとからできた女バスのせいだな。それでもちゃんと練習してるんなら俺たちも我慢するけど、あいつら遊んでばかりじゃないか。なら俺たちに渡してくれてもいいじゃないか！！」

竹中の言つ分もわからなくもないけど、それでも引くわけにはいかない。

「そつちのこともわかるけど、そつとも言つたけどじいじみんなでやることが重要なんや。だから絶対真帆たちの場所は守つたる」

「ふん、もつこ。でも、湊のワンマンチームでじいじができるけど俺たちは弱くはないぞ」

「そんなんわかつとる。まあ試合を楽しみにしようとやな。ギャフ

「おとづらわしたるからな」

お互にほんと掴みかかりそつた剣幕で言いつぶやく、「言いたいことは言つたのでズンズンと音がしそうな歩き方で体育館を後にした。昇降口まで戻ってきたところで、男バスの練習を半分しか見ていいことに気付いたけども今更戻れないでの仕方なしに真帆たちに合流することにした。

真帆たちはランニングから戻つてきていて筋トレをしていたので、それに一緒に参加しそれで今日の練習はおしまいになつた。

俺は胸にモヤモヤしたものを持ったまま家路についたのだった。

05・男バスの理由（後書き）

なぜか歩が熱血キャラになってしまいました……
次でやつと昴が登場する予定です。
誤字・脱字があれば指摘してください。

06・嶮登場（繪書き）

ひとつずつ手を繰り鳴らせるところができた。
今までで一番の長文ですかのであります。つづいて読んでください。
それでは……どうぞ。

—— 交換日記（ひづり） ——

まほまほ「みーたんからメールきた!! とりあえずいっしゅうかんかくほ。あとはわたしたちしだいだつて」

湊 智花「1週間だけなんだ……。なんとか試合までやつてもうやるよつにできればいいんだけど」

紗季 「才能を認めてもうひとつと指導してみたいって思わせるつてこと? 正直むずかしくない?」

まほまほ「わたしにまかせなさい。あしたくわいへ」

紗季 「真帆の考えることなんぞ、さくでもなことになつそつね」

あいり 「男の人なんだよね? 怖い人じゃなければいいな……」

ひなた 「いわい人はくる?」

竹中と言つあいをした次の日、金曜なので体育館は使えたけど体力つくりを行う方針はくすり、シャトルリンや筋トレをして練習を終えた。

土日の週末は自主練として、体力つくりをそれぞれでやつもらつ。

そして週明けの月曜日、登校してきた俺は真帆の隣にある大きな鞄を見つけ、あっけにとられつつも鞄の持ち主であろう真帆に聞いてみる。

「これ、なにが入つとるん?」

「こしこし。今日の秘密兵器

今日に秘密兵器がいるようなことがあつたかなと疑問に思い、真帆の良き理解者へ、である紗季に疑問の視線を向けてみる。

「金曜にみーたんからメールがきて、例のもう1人の「一チが今日から来ることになつたのよ。連絡なかつた?」

「うん、初耳やね。そつか今日からなんや」

それがどうして秘密兵器につながるのかまだわからなかつたけど、

その答えは浮かない顔をした智花が教えてくれた。

「けどその人は1週間しかコーチをやってくれないらしいし、試合までやつてもうられるように私たちを気に入つてもうれる作戦がそれなんだつて。私たちもまだ中身は教えてもらつてないんだけど」

「1週間つーのはこいつなんでも短すぎやろ。練習田代も書いたら実質3日やん」

「やつぱつやつだよね。じゃあせめてもう1週間やつてもうれるように頼んでみるしかないね」

そのための秘密兵器なんだつたけど、真帆の「ヤーヤ」した顔をみると激しく不安になつてしまつ。

「はーい。授業始めるよ」

真帆の秘密兵器の内容は分からずじまいだったけど、先生が入つてきたので仕方なく話を切り上げることになつた。

休み時間の度に内容を聞いてみたけどもはぐらかされてしまい、結局わからないまま放課後になつてしまつた。

もう一人のコーチを迎えるために体育館に向かい、すぐ練習できる
ように着替えることになった。

真帆は体育館に持ってきた秘密兵器の入ったカバン（運ばされたのは俺で意外と重かった）を抱えてみんなと一緒に体育倉庫に入つて
いった。

俺もすでに定番になつてあるトイレで着替えを済ませ戻つてくる
と、体育倉庫から悲鳴が聞こえた。

「絶対無理だよ」

「いんなの着れないよー」

一体何事かと思つたけど、まさか扉を開けて確かめる訳にもいかず、
なにがあつたのかとソワソワしながら待つことになつてしまつた。
しばらくするとなにか言いあいをしていたのも静かになり、扉が開
いた。

「なつーーー！」

出てきたのは真帆だつた。……だつたけども服装がおかしい。

体操服に着替えているはずが体育倉庫からでてきた真帆は、頭に白
いカチューシャとヒラヒラのエプロンを装備し、黒のロングスカー
トのドレスを着ていた。

いわゆるメイドの格好だつたのだ。

驚きで固まつていると他のみんなも体育倉庫からでてきた。

しかし、みんなも真帆と同じようなメイド服をきていたので再度固

まるはめになつた。

紗季と智花は真帆と同じロングスカート、愛莉とひなたはミニスカートの格好だった。

「つ、恥ずかしいよ……」

「スカート短すぎるよ……」

「全く、真帆はろくなこと考えないんだから」

「ひなは結構好きだよ ？」

みんなの文句（ひなただけは大丈夫らしい）を聞いていると、一番最初に出てきた真帆が田の前にきてクルリと一回転した。

「ど、あゆむん？ 似合つ？」

「あ、ああ。ち、よく似合つたるよ。かわいい」

「えへへへ」

戸惑いを隠せないままそつ返事を返すとポツと頬を赤く染め、みんなのところへ戻つて行つた。

しかし、これが真帆の秘密兵器の内容なんだろうな。幾分冷静さを取り戻した頭で考える。

けど、とてもこんなことで真帆たちのことを気に入つてもらえると

は思えない。

むしろこれで気に入つてもらいたら今から来る「一チはかなりやばい感じの人になつてしまつんじやないか？」

そんなことを考えてみると、なにやら真帆がみんなに向かつて言つているのが聞こえてきた。

「だ～か～ら～、もう一人のゴーチが入つてきたらみんなで『お歸りなさいませ、『じ主入をも』 つて言つの…。』

それを聞いた瞬間、ガクッと体の力が抜けたような感じがした。正直、メイド服を見た時からこのセリフは言つだらうと思つていたけども、実際聞いてみると恥ずかしいセリフにしか聞こえない。

「もー、こんなの私の家じや普通だよ？」

「あんたのことは普通じやないの」

紗季が至極もつともな反論をしているけど効果はなく、しぶしぶみんなセリフを言つことに賛成した。

みんながそんな言い争いをしている間、俺はみんなから少し離れたところに傍観者を決め込んでいたら、ふいに紗季と田が合つてしまつた。

やばい、と思つたのも遅かつた。

「そついえば、歩のはないの？ 真帆」

「余計なこと言わんでいいって」

「フフフ、もちろんそんなことはないよ。ちゃんと用意してあるよ。
……ジヤジヤーン」

そう言って取り出したのは、メイド服と対をなす服装で黒を基調としたスーツ、赤い蝶ネクタイ、どこからどう見ても執事服だった。こんな服を着るのは御免被りたいけども、真帆のワクワクした眼、紗季のあんたも道連れよ的な眼、ひなたの純粋な着ないの？的な眼にさらされ、しぶしぶ着ることにした。

ちなみに愛莉と智花は俺の執事服を気にする余裕はないらしい。

「はあ、わかつたよ。着てくれればいいんだろ」

「ちなみにいつもあるナビ、ビブ。」

再び鞄から取り出したのは真帆と同じロングスカートのメイド服だった。

「アホか！！ そんなん着るわけないや！」

「二二二二二二、やっぱ無理かー。じゃあそれに早く着替えてきてよ
ね」

無駄なやりとりをしてしまい、ドックと疲れた感じになってしまつた。でも仕方なしに着替えにトイレに向かつた。

着替えをしていて気付いたことが一つ。この執事服は俺の体のサイズを測つて作ったんじゃないだろ？ と思つてからピッタリだった。一体真帆はどうやってこの執事服を作ったのか、もとでどうやって俺の体のサイズを調べたのかすごく気になるところだ。まあ気にして仕方がないと割り切つて着替えを済ませ体育館に戻ると、若干落ち着きを取り戻した愛莉と智花を含めてみんなが寄つてきた。

「あゆむん、なんか『ぽい』な」

「おー。あゆむーかッ『イイイイ』

「確かに似合つてゐるわね」

「うそ、似合つてゐるよ」

「ちよ、ちよっとカッコイイかも」

口々に褒め言葉をもらつたので調子に乗つてしまつ。

「お褒めいただきありがとうございます。お嬢様方」

右腕を90°。曲げておなかのところへ持つていき、左手はまっすぐ脇にたらじてお辞儀をする。

「おー、あゆむんやるじやん！」

そんなこんなでメイド5人、執事1人でもう1人のコーチを待つ。体育館の入口に6人で並んで待つていると、ついに扉が開いた。

「「「「お帰りなさいませ、ご主人様」」」」

扉が開いた瞬間、みんなで一斉に例のセリフを言つてお出迎えをした。しかし、開いた扉は開けた張本人の顔もよく見えないうち閉じられてしまった。そして、少し間をあけてもう一度開いた。

「「「「お帰りなさいませ、ご主人様」」」」

さつきと寸分違わず同じセリフで迎えるけど今度は扉は閉じられず、代わりに呆気にとられた顔をして順番に俺らを見回している。

(あれ？ この人？)

顔に見覚えがあつたので思い出そうとしていると、正気に戻つたらしくハツとした表情をした後、急に腰を90°。曲げて頭を下げた。

「ミホね……簾先生が無茶を言つたんだね。申し訳ない」

「なんのことですか？」主人様

突然謝られ、なんのことだかわからない俺達を代表して真帆が聞き返した。

「え、その服装は簾先生が無理やり着せたんじゃないの？」

「どうやら」のメイド（+執事）でのお出迎えを簾先生の仕業だと思つたらしい。

いきなりそんな発想になるなんてこの人も簾先生の破天荒な性格のおかげで苦労してゐんだろうな。

「違いますよー。」これはご主人様をお迎えするために自主的に着たんですよ。ねえ、もつかん？」

「…………はい」

蚊の泣くような小さな声で智花が返事をする。
そりゃあ素直に「はい」とは言えないよな、とさざん泣つてたし。

「あの『い』主人様、初対面ですしあい紹介とかしませんか？」

見かねた紗季が話題を変えようと紹介を提案する。

「そ、そうだね。じゃあみんなの名前を教えてください。」

それを聞いた真帆がみんなにアイコンタクトを送る。

「「「「「かしこまりました、『主人様』」「」「」「」」

若干疲れた顔をしてみんなを見渡すもつー人のコーチ。

「その『い』主人様って言つの止めもらえないかな？」

再びアイコンタクトが送られ、真帆を中心に円陣を組む。

「じゃあ・・・」

「いや、でも……」

そうして、なかばヤケクソ（2人はノリノリ）で相談の結果を発表する。

「…………わかりました。お兄ちゃん…………」

それを聞いた瞬間、目の前にいる人が膝をついてガックシとうなだれた。

気を取り直してみんなの自己紹介を済ませ、次はいよいよもう1人のコーチの番になった。

「えー、長谷川昂、15歳です。バスケ歴は6年くらいでポジションはガードです。篁先生とは親戚で、今日は篁先生の紹介できました。1週間よろしくお願ひします」

自己紹介を聞き、長谷川さんをどこで見たかを思い出した。

「あつ、もしかして君は園田君？」

「どうやつも俺のことを思い出したりしく、少し驚いた顔をしてくる。

「え、なに？ あゆむん知り合いで？」

「知り合いでいうか、まあお隣さん」

長谷川さんの顔を知っていたのは、引っ越ししてきた時にお隣さんに挨拶をした時に会っていたからだつた。

「それにしても奇遇ですね。まさかお隣さんの長谷川さんが篁先生の親戚だったなんて」

「やうだね。けど、これは『女子』バスケ部なんだよね？ なんで男の園田君がいるの？」

至極当然なことを質問されてしまい、どう答えたものかと考える。

「俺も基本的には長谷川さんと同じ理由ですよ。篁先生からコーチをするように頼まれたんです。だからこれからよろしくお願ひします」

「なるほど、篁先生から……。男がもう1人いるつていうのは心強

「へこむね。」

2人で話していくと突然真帆が長谷川さんの腕に抱きついた。

「お兄ちゃん……」

「ま、真帆さん。どうしたの？」

「『真帆さん』なんて呼び方ダメ！ さん付禁止。あと敬語も禁止」

「わ、わかつたから離れて『真帆』」

きちんと呼び捨てで呼んでもらえて満足したのか案外素直に腕から離れた。

「じゃあお言葉に甘えてみんなのことも呼び捨てにさせてもいいわ。そのかわり、俺のことを『お兄ちゃん』って呼ぶのを止めてくれると嬉しいんだけど」

「えーこれもダメなの。『妹系メイド』って最強じゃない？ じやあ、すばるんのツボってなに？」

「うん？…………え？」

真帆に詰め寄られ、かなり困惑している長谷川さんを助けるために

2人の間に入る。

「真帆、ちょっと落ち着けって。すいません長谷川さん。真帆のやつ、張り切りすぎちゃってるんです。この服も長谷川さんを歓迎するために真帆が全員分用意したんです」

「べつに謝らなくともいいよ。ちょっと驚いただけだから」

興奮気味の真帆をなだめていると、オズオズと智花が口を開いた。

「……長谷川さん。早速ですけど、今日から「指導をお願いしてもよろしいでしょうか?」

「そ、そうだね。じゃあみんな着替えてきてくれる?」

それを聞いた真帆は不服そうに頬をふくらました。

「えー、なんでー?」

「なんでって、そりゃあそんな格好じゃ…………ねえ

「ん? パンツなら大丈夫だよ。ほら」

「「なつー。」「

そう言いながら真帆はいきなりおへそが見えるくらいまでスカートを捲りあげた。

完全に不意をつかれた俺と長谷川さんは田をそらす」ともどきずに真帆のスカートの中を見てしまう。

結果的に『大丈夫』の意味を知ることになった。

「……………スペツツ？」

俺は見てしまったものの正体をつぶやく。

「や、もつかんと紗季もはいてるよ。ちなみに!!」のしたばブルマ
……………だよつと」

「さやあつ……」

そしてミニスカートの下も大丈夫なのを見せるために、よりにもよつて一番恥ずかしがつている愛莉のスカートをめくつたのだった。話している間もずっと短いスカートを必死に下げようとしていたので、いくらブルマといえども見てしまった罪悪感は真帆の時より断然大きい。

「いら、真帆。愛莉に謝れ」

「おー。ひなのブルマも見る？」

「ひなた、そんなことしちゃダメ」

紗季が真帆をしかり、ひなたが自分のスカートをめぐり、智花がそれをたしなめている間、俺も長谷川さんも見てしまった罪悪感に打ちひしがれていたのだった。

結局、服装は体操服に着替えることになり、俺もみんなも着替えていくことになった。

着替えて再度集合した俺たちに向かって、長谷川さんがこれからやることを告げる。

「えーと、まずはみんなの実力が知りたいから紅白戦をしようか。智花と歩は経験者なんだよね？ ならチームは智花・紗季・ひなたと歩・真帆・愛莉に分けようか。歩はコーチだけど悪いが人数合わせに参加してもらつよ」

「わかりました」

俺もみんなと一緒に着替えに行かされた時から「いつなる」と予想していたので、特に不満に思わずには賛成する。

「なら始めようか。と、その前に愛莉ちょっとといい？」

「は、はい。な、なんでしよう？」

突然話しかけられて驚いたりじく、かなりあたふたしながら返事をする。

「愛莉は背が高いからじつかりとホールドを……」

ピジッ

そんな音が聞こえそうなほど、一瞬でこの場が凍りついた。
俺を除く5人の顔を見ればそれは一目瞭然だった。

そして静寂は突然破られる。

「うわあああああああん、やつぱり私はでか女なんだあああああ

愛莉がまるで赤ちゃんのように泣き始め、俺と長谷川さんは突然の事態に訳もわからず困惑してしまった。

それにもいち早く対応したのは真帆と智花だった。

「アイリーン、ダメじゃないか。すばるんに説明しつかないから勘違こわれちゃうんだぞ」

「やつだよ、愛莉は4月生まれだから他のみんなよりひょりと早熟なだけだつて」

まだ、なにがなんだかわからない俺達2人のそばをティッシュを持ったひなたが愛莉にトコトコと駆け寄つていた。

「おー、あいり。ティッシュあるよ」

成り行きを見守るしかない俺たちに紗季が説明をしてくれる。

「愛莉は高身長がひどいコンプレックスなんです。ちょっとでも髪のことを言わるとこもひつで」

「やつたんや」

バスケをしている人にとっては身長が高いことはアドバンテージになるけども、確かに女の子であんなに背が高いといろいろからかれたりしたんだろうな。

俺も愛莉がバスケをしているとわかつた時は、背が高いことからす

“ここ有利だなと思ったけどそれを口に出さなくて正解だったわけだ。今後は愛莉の背について触れないでおこうと決めたのだった。

みんなの説得のおかげで愛莉がよつよつ落ち着いたのは、もう6時を過ぎてから片付けをしなければならない時間だった。

「「」「めんなさー」。せつかー、き、来てもらつたのになにもできなくて。『めんなさー、『めんなさー』

「ここんだよ。今日はみんなとおしゃべりして仲良くなれただけでも十分だよ。じゃあみんなでチャチャつと片付けしちゃおうか

長谷川さんがそう言つたのでみんなで片付けを始める。

と言つても、もとからボールが2、3個こながつていいだけなので後はモップをかけねば終わつてしまつ。

そんな中智花がフリースローラインに近寄り、近くにあつたボールを拾い上げそのままジャンプショートを決めた。

俺はその時モップがけをしていて気付かなかつたけど、長谷川さんの目が驚きで開かれてしばらく動かなかつたらしい。

そうして掃除を終えた俺たちは、簞先生の車で帰る長谷川さんに別れを告げ、家路についたのだった。

06・昇登場（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
男バスとの試合はまだ先になりそうです。
次回更新がちょっと遅くなるかもしれません
が気長に待ってもらいたいです。
感想など書いていただければ幸いです。

いつもよつ少し更新が遅れました。
もうすぐ資格の試験があつて勉強しないといけないのに、この小説
を考えるのが楽しくて勉強していません。
本気でやばいなーと思つて いる今日この頃。
内容はまだ暗い感じで進みますが書き方をちょっと変えてみました。
それでは……どうぞ。

（ ） 交換日記（ひづみ）

紗季 「真帆のバカ…！ バカのところサーモン… 長谷川さん、アントラギだつたじやないの」

まほまほ 「おかしいなー。メイドとこわいはやくやだつてパパがいつてたんだけどなー」

紗季 「じつすのよ、」のままじやあと2回で絶対終わるわうわよ「」

あいり 「うへ、私が取り乱しちやつたから……」めぐなせこ

湊 智花「愛莉のせいじやないよ。でも、最終回に続けてもらえないか頼んでみてダメなら諦めよう。あとは歩と一緒になんとかしよう」

まほまほ「いや、まだあきらめのまではこいつ」

紗季 「うひよ、最後まであがこてみよ」

ひなた 「おー、お兄ちゃんぐる。ひなもがんばる」

湊 智花「みんな…………あいがと」

次の田嶋校じてゐる歴史はまだ暗い顔をしていた。

「やつぱつ私、人より體が高くなるかな？」

「そんなことないでしょ。あんまつしつことまた揃ねよ。」

「真帆の體の運つよ。あんまつしつことまた揃ねよ。」

「朝つぱりからなんて余話をしてるんだよ。」

席に着くと紗季がねつて歴史にセクハラ発言をしてるやうだつた。

「ひなもあこつねつて揉みた。『持ちこ』」

「あら。わの胸せ.....許して」

「だから、なんて余話をしてるやつよ。あいつのせやの俺がおらそじでやつても」

呆れないと先生が入ってきたので話は終了になつた。

今日はいつもより教室に来るのが遅かったから結構ギリギリになつてしまつた。その理由は職員室に寄つて簗先生と話していたからだつた。ついでつき話した内容を授業をBGMにして思い出す。

「簗先生、ちょっといいですか？」

「なんだ、園田か。びっくりした？」

ちよつと職員室に入ろうとしていた簗先生を見つけ呼びとめた。

「昨日の練習のこと、聞きました？」

「ああ、昂を送つて行つたときに聞いたよ。愛莉を泣かしちやつたんだつて？」

「そうです。それで練習は全然できなかつたです」

簗先生を朝から探して聞きたい」とはその時思つた疑問だつた。

「前に先生は長谷川さんことを四六時中バスケのことを考へてゐるよつた人だつて言つてましたけど、昨日の様子からするとなんかそこまでバスケに夢中じやないといつたか冷めてるつて感じだつたんですけど……」

「あーそれはね、いろいろ事情があつてね。まあ園田には話しておいた方がいいかな。ついておいで」

「そう言つて、職員室に入ると来客用のイスに座り、俺に対面に座るよつに促すので大人しく従う。

「結論から言つとあいつは今、バスケが嫌になつてゐる。理由は至つて単純で、憧れの先輩が不祥事を起こしてバスケ部が1年間活動停止になつたからだ。その先輩を追つて高校を決めたくらいに憧れてたのに勝負する時間も、一緒に練習する時間すら奪われた。だから、あいつはやる気をなくしてゐる」

「その不祥事つてなんだつたんですか？ 1年間の活動停止つて結構重いですね。暴力ですか？」

予想以上に深刻な話になつて焦つたけど、とりあえず疑問に思つたことを聞いてみる。

「顧問の娘と駆け落ちしたんだと。しかも相手は小学6年生。そりや怒るわつて感じだけどね」

「え？ ここ小学校ですよ？ それならここで「一チしてるってバ
レたらややこしいことになりません？」

小学生と問題を起こして活動停止になつた部活の部員が小学校に
出入りしているとなつたら、長谷川さんにあらぬ噂がたつてしまつ
んじやないか？

「大丈夫だろ、昂にそっちの気がなければやましいことはしてない
んだし。それに正直見てられないんだよね、今のあいつ。これをき
つかにして元に戻らないかなつて思つんだ」

心配そうな顔をしている篁先生を初めて見る。普段が笑顔が多い
人だけにたまに真剣な顔をすると本氣で想つてるんだなと感じる。

「それでも、よく女バスの「一チなんて引き受けてくれましたね？
長谷川さん的に一番来たくないところだつたんじゃないですか？」

「や！」は……ほう……ねえ？」（ニヤリ）

絶対なんかしたよこの人……

「まあ長谷川さんのことはわかりました。あと、先週頼んだ男バス
の資料つてなにがありました？」

「ああ、あれね、ちょっと待って……たしかこの辺に

自分の机に戻ってゴンゴソとあわててなにかを探し始めたのと
なしく待つ。

そうしてしばらく待つとDVDを一枚出してきた。ちなみにDVD
が入っていた引き出しにPSPやDSが一緒に入っていたのは教
師としていいんだろうか。

「DVDですか？」

「そ、中身は紅白戦が2本と練習試合が1本、それと1回の練習風
景が入ってるよ。練習試合のメンバーがたぶん今回のメンバーで
てぐると思つよ」

「すごい貴重な資料じゃないですか。こんなのがいつやつて手に入れ
たんですか？」

予想外にいい資料が出てきたのでびっくりしてしまう。

「あのカマキリの野郎がムカついたからウイルスをついついやつた
らネット経由で流れてきた」

「いやいや、なんだとじてるんですか」

と、こんな感じで話をしていたら時間がやばくなってしまったといつ訳だ。

それにしても長谷川さんの件は結構深刻だな。あんな理由があつたんじやそりやコーチするのにやる気がでないのも仕方がないな。真剣に長谷川さんが今週で終わってしまった時のことを考えなきやいけないかな。

そんなことを考えていたらいつまにか授業が終わっていた。休み時間になつても俺たちはどこかしんみりとした空気になつていたのは今後のいくつへの不安からだった。

「どうした? 暗い顔して。自分たちの実力によつやく気付いて落ち込んでるのか」

やつへ竹中がやつてきて嫌味を垂つてくる。それに一番に反応したのはやはり真帆だった。

「そんなことないよーだ。夏陽なんて楽勝だな」

しかし、どことなくこつもの元気がなつよい気がある。

「ふん、1、2週間真面目に練習したくじでつまへなれるほビバ
スケは甘くないぜ」

「すばるんつてこつす」こ「コーチが教えてくれるから大丈夫だもん
ねー。あと、あむむんもいる」

なんかおまけみたいに言われて少しショックだ。まあ実際、補佐
みたいなものだからおまけと言えばおまけなんだけど……

「すばるん？ 園田とせ別にコーチがくるのか？」

「やつだわ。すばるんはす」こんだわ。えーと、えーと……」

「やつだわ。すばるんはす」こんだわ。えーと、えーと……」

「本名は長谷川鼎さん。算先生の甥ついで高校一年生でバスケット部。
中学の時に弱小校を県大会準優勝まで持つて行つた司令塔つてど
ろかな？」

「そうそれ、それが言いたかつたんだよ。どつだすじこだわ」

真帆が薄い胸をはつて、まるで自分のことのよつて血騒ぐ。

「ふ、ふん。どんなやつが教えたって一週間くらいの練習でやつれ
「つまくなれるわけないじゃん。じゃあな」

捨て台詞を残して去っていく竹中を真帆は、穴が開けとばかりに睨んでいた。

「なんだよ、夏陽のくせに生意氣な」

「まあ竹中のやつともやつともやうじな。けどあいつがムカツク
ことには同感や」

「や、やつぱり難しいのかな?」

真帆と竹中の悪口を言こ合っていたら愛莉がオズオズと話しかけてきた。

「ぶつちやナ一週間かそこいらの練習じや全然足りやんよ。でも、『
勝てる作戦』があつて、それに向けての練習をそれこそ死ぬ気でや
ればなんとかできるんじやないかと思つとる。その『勝てる作戦』
を考えるのに長谷川さんみたいな人がいないと困るんやよ」

「歩じや無理なの?」

そんなことを紗季が聞いてくるけど、正直俺には荷が重いことだ。

「みんなを教えるのはできると思つたが、作戦を考えるのは俺には厳しいな。智花はどう？」

「わ、わたし？ 私には全然無理だよ」

自分で振られるとは思つてもみなかつたらしく、智花は体の前で両手をブンブンさせて否定してくれる。

「じゃあやつぱり長谷川さんには続けてもらわなかんな。なんかいい方法ないんかなー」

「試合の理由を話して同情を誘つのはダメ？」

「それは俺も考えたけど、簞先生がそれを話す時はタイミングをしつかり考へろつた。こきなりやと逆効果になつやつてやれ」

結局いい案が浮かばないまま放課後になり、今田は体育館が使えないのでもたランニングをみんなでやって家路につく。

その間も、みんなの顔にはいつもの元気さがなく暗い雰囲気が漂つていた。

そして次の日。

放課後になり、長谷川さんを迎えての練習2日目が始まった。今日のお出迎えは普通だったので、入ってきた時の長谷川さんはホッとしたような顔をしていた。

「じゃあ準備運動はこれくらいにして、この前できなかつた模擬戦をやひづか」

事前に俺も着替えていたので、この前言われたチームに分かれてゲームを始める。一応みんなの実力を長谷川さんが見るための模擬戦なので、俺は智花の相手とアシストに回ることにする。

智花もそれはわかっているらしく、前回ほど俺との勝負にこだわらずに紗季達にパスをだしている。しばらく模擬戦を続けて休憩になつた。

「智花、ちょっとといい？」

「は、はい。なんでしょう？」

「普段の練習でどんなことをしてるのが教えてもらえないかな？」

それを聞いた智花は体育倉庫になにかを取りに行つた。

すぐ戻ってきた智花の手には水色の小さなメモ帳が握られていた。

今まで普通の練習をしたことがないから俺もまだ知らないので、長谷川さんの隣から智花の持つてきたメモ帳を覗き込む。

「へえー、ちやんとしたメモーじゃないか」

確かにメモに書かれていたメモーは基礎練習を中心バランス良く組まれていた。けどそれならおかしなことが一つでてくる。

「なにしてんの?」

「うわー。」

真帆の声が聞こえたと思つたら、長谷川さんの驚いた声も聞こえた。

なにがあつたか見てみると真帆が長谷川さんの背中におぶせついたので、さつきので真帆が背中に飛び乗つたりしこ。

「せひ、真帆。長谷川さんの迷惑やから降つとこで」

「はーー」

案外素直に降つてきて俺の隣にやつしてくれる。

「で、何見てたの？」

「普段の練習メニューを教えてもらひうる」といふやう

真帆も一緒にメモ帳を見ていたけども、小さなメモ帳を4人で見ているので当然お互いの顔がすごく近い。少し動いただけで致命的な部分が接触事故を起こしそうなくらいだ。かと云つて、メモ帳を見ないといつ選択肢はないのでこのままの体勢でいることにする。

「やつにえぱこんなのだつたつけ。懐かしいなー」

「懐かしい？ これ、今のメニューじゃないの？」

長谷川さんは疑問に思つたようで智花に聞いているけども、俺はそりじやないかなと思っていた。もし、このメモの練習をちゃんとやついたら未だにみんなが初心者レベルなのはおかしいからだ。

「初めはこれでやつてたんだけど、だんだんめんどつちくなつてきだから最近は試合しかしてないよ」

「じめんなさい。いけないつて思つたんですけど、みんなが楽しいと思える方がいいのかなつて考えてしまつて……」

それで竹中は「女バスは遊んでばっかりだ」なんて言つてるんだな。けどそれだつて、バスケのことになると極度の負けず嫌いにな

る智花が練習よつみんなの樂しかったのかでできた結果なんだか
うれしかったんだよな。

「えりと……じゃあ練習メニューは考えなくていいのかな？」

やつぱつやうなるよな……。

「え、 われじやあ困るのダメーノーを考えてもらひやんとつに頼んでみる。

「こえ、 ゼひもつとこメーノーを考えてほしこです」

「エリだよ、 あははん。 私たちにもノーリジョーシンつやはつがでて
きしや。 だから、 ピシバシやつてくれたまえ」

やつぱつと真帆は『ピシバシ』のじりりで両手を右の方にあげて
戦隊もののポーズらしきものをとつた。 わりと『ピシッ』つてこつ
感じに反応したんだね! はづきのセンスはいかがなものかと思ひ。

「エ、 そつか。 ならみんなの意見も聞いて考えてみよつか」

長谷川さんも若干引いている感じだつた。 けど、 メーノーを考え
てもりう時に男バスとの試合のことを聞えれば、 それ用の練習を考
えてもらへるかな。

「すっごーの作ってよな。一時間でレベルが3上がるやつよつなかつ」

「レベル?」

真帆がよくわからないことを言つてくる。長谷川さんや俺はもうろん、智花さんもわかつてこなさそうだ。

「そつ。一時間で3上がるから1週間だと、2時間が3日あるから……18だね。レベル18だとどれくらい? 地区大会優勝は楽勝だよね?」

「バツ、真帆それじゃあ……」

真帆が核心じゃないけど男バスのことに触れる。けど、その言つ方じゃあ……。

「うーん。よく意味がわからないけど、とりあえず1週間で地区大会優勝は無理じゃないかな。そんな練習メニューはどんなに頑張つても作れないよ」

「そりゃ普通はこいつなるよな。だからこいつ、長谷川さんの力がいるつてことをつまく伝えないといけないんだよな。」

そんなことを思つてゐると、やけに真帆が静かなのに気がつく。

「おい、真帆。どうし……」

真帆の顔を見て驚く。いつも元気いっぱいな笑顔はそこにはなく、ただ感情のない顔が浮かんでいた。

「……んで……無……の」

弱々しい声でなにか言つたけどどうまく聞き取れなかつた。真帆の異変に長谷川さんも気付き、戸惑つてゐるときなり真帆は大声をあげて長谷川さんに詰め寄つた。

「無理とか困るよー。なんで無理なの? ゲームなら一晩やればレベル10くらい余裕じゃん! だつたら1時間で3は楽勝でしょ!」

真帆の声は隣のバー部がびっくりしてこちらを見ゆくくらい大きく、みんなが異変に気付いて近くに寄つてくる。

「……それは無理だよ。そんな急にうまくなるものじゃないし、最初は体力をつけなきゃいけない。でも、真帆なら1ヶ月ちゃんと

練習すればすぐ』…………』

「1ヶ月も待てないよ！ 体力ならあゆむんに言われて走ってるよ？ それじゃダメなの？ じゃあ必殺技教えてよ。打つたら絶対きまるショートとか！」

レベル云々の話はかなり真面目な話だつたらしく、本氣で『1時間でレベルが3上がる練習』を長谷川さんが作つてくれると思つていたようだ。とりあえず、真帆を落ち着かせることが先決だな。

「真帆、落ち着けつて。そんなに長谷川さんを責めるなよ」

「でもつー…………わかつた」

近くにきたみんなも真帆をなだめるのに協力してくれ、なんとか落ち着かせることができた。けど機嫌までは直らず、落ち込んだままだつた。

それでも一応、みんなで新しい練習メニューを考えてみたけどもハーデメーカーの真帆が暗いままでの、いい意見ができるはずもなくこの日の練習は終わりとなつてしまつた。

そうして、結局なにも進展がないまま2日目の練習は終わつたのだった。

07・迷へる羊たち（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

原作を読んだ時も思いましたけどバカのトロサーモンとかどんな罵倒の仕方なんでしょうね？あまりバカにされていいように感じるのは私だけでしょうか？

次回も少し更新は遅れると思います。

誤字・脱字・感想があれば、特に変えた書き方についてあればよろしくお願いします。

08 · 決意新たに（前書き）

最近はちょっと長文気味になってしまってます。
長く読んでもらえるとうれしいです。
それでは……どうぞ。

（ ） 交換日記（ひづき）

「やー、すばるに」はがっかりだよ

湊 智花「残念だけじ、やつぱり懲りつかなれる方法なんてない
んだと思う。長谷川や

こはざたつ前のじとを直つてゐだけなんだよ、やつと

紗季 「やうかもね。けど私たちや歩だけじやどひつともない
し、やつぱり「一チは続
けてもらわないとなあ」

あこつ 「じやあ、やつぱり今度の練習の時に試合のじと話すの？」

紗季 「そうね、なるべく練習中に好感度あげて、最後に続けて
くれるやつに頼んでみ

ましょ。ひな、頼つにしてるわよ

ひなた 「おー。おまかせー？」

そして、長谷川さんとの練習最終日。

長谷川さんを説得するこい案もないまま、俺たちは着替えて長谷川さんを待っていた。けど、いつもの時間になつても長谷川さんは現れなかつた。

「じつしたのかじり、こつもならもつ来てくれてる時間なの？」

「も、もしかして、今日はきてくれないのかな？」

「そんなことはないはずやけど……」

もし本当に今日来てくれなかつたら最悪だ。説得の機会すらないことになる。そうなつたら、最後の手段で篠先生に頼むしかない。先生ならせつとえげつない手段で長谷川さんを連れてきてくれることはできるはずだ。でも、なるべくならそれはしたくないな。やっぱり自分の意思でやりたいと思つてほしにし、無理やりしてもらつてもきっとこいつの結果にはならないだろ？ それとも、長谷川さんは諦めて俺が作戦から考えてみるか……。

そんなことを考えていたら体育館の扉を開いて長谷川さんが入ってきた。来てくれたことに安心してみんなで長谷川さんに駆け寄る。

「良かった、きてもらえないと思つました。じゃあ早速練習を……

…

やつ言いに話しかけてみるけども、長谷川さんの顔がすぐくつら
そつだつたので途中で言い淀んでしまつ。

「やつも、男バスの子と話をしていた。試合のこと聞いたよ

じつやう遅かった理由は竹中たちと話していたからだつたらしい。
竹中たちに先を越された形になつてしまつた。こんなことなら、も
つと早く試合のことをいつべきだつたかも。

「じめん。男バスの味方をするわけじゃないけど、君たちを
勝たせてあげられるような指導は無理だよ。勝ちたいならもっと違
う方法を考えてほしー」

つらやうな顔をして俺たちにやつぱる長谷川さん。それに真つ
先に反応したのは真帆だつた。

「他に方法なんてないよー すばるんが必要なんだよ、あたしたち
にはーー！」

「……真帆」

真帆の真剣な訴えを聞いても長谷川さんの顔は曇つたままだつた。

「「めん、真帆。俺には無理だ。それに真帆たちがかわいそつだと
も思つけど、男バスの気持けもけよつとわかるんだ」

「 つ、すばるんのバカ！…」

「おい、真帆。待てつて」

長谷川さんに怒鳴つて走り去つていく真帆を、急いで追いかける。
後ろでは、智花が帰ろうとする長谷川さんを引きとめて、少しでも
練習を見てほしいと頼んでいふといふひだつた。

そんなやり取りをあとにして真帆を追いかけることに集中する。
まだ背中は見えていたけど、それもすぐ角を曲がつて見えなくなつ
てしまつた。

「くつそー、やつぱり真帆のやつ、足速いなー」

ただでさえ真帆は運動神経がいいので足が速いのに、さらに今は
がむしゃらに走つてるので余計速くなつていて。なかなか追いつ
けずにはいるど、ついに見失つてしまつた。

それでも、見つけずに戻るなんることはありえないで決して狭
くない校舎を真帆を探して走り回つた。

ようやく見つけた真帆は中庭にいた。真帆が俯いて座っているのは、何日か前に俺と真帆が話したベンチだった。

「ひとなどこでいたんか。探したよ」

声をかけて隣に座るも反応らしい反応もなかつた。かわりに、ぐすつぐすつという弱々しい嗚咽が聞こえてきた。それには気付かなければフリをして話を続ける。

「こきなり怒鳴つて走りだすからびっくりしたで。あとで長谷川さんに謝らんといかんな」

「ぐすつ……。だつて、すばるんが無理だつて。男バスの気持ちもわかるつて」

なんとか話せるくらいまで落ち着いてきたじへ、俺もゆづくつと話しかける。

「今の状態じや、長谷川さんが男バスの気持ちもわかるつていうのも無理ない。現に俺だつて、もし真帆たちより先に男バスと関わつとつたら向こうの味方をしてたやうしな」

「つ。そんな」

真帆がショックを受けた顔をしているが、かまわずに続ける。

「でも、ここで話を聞いて、まだ2週間くらいこやけど一緒にあって、みんなの気持ちもわかつたつもりや。長谷川さんもきっと、もつとこつけの事情を知つたらコーチをやつてくれるはずや」

そして、次に言つことを意識して頬がちよつと赤くなる。

「そ、それに俺もあるしな。たとえ長谷川さんがダメでも俺がなんとかする。ここで約束したことは守るよ」

「あゆむん……」

言つてからさうに恥ずかしくなり、照れ隠しに真帆の頭に手を置め、少し乱暴に撫でる。

「ま、まあ長谷川さんの説得は最悪、笠先生に頼めば脅迫まがいのことをしても説得するやううから大丈夫やろ」

「ふふ、そうだよね。頼りにしてるぞ、あゆむん」

まだ瞳に涙を残したまま、さつ言つて真帆はこいつと笑つただつた。

2人で体育館に戻ると、長谷川さんはもひ見当たらず最後の練習が終わった後だった。それが次につながるよつた感じではなかつたことは4人の顔を見ればすぐにわかつた。俺たちが戻ってきたのを見て紗季が口を開く。

「最後の練習終わっちゃつた。どうしようかこれから……」

「長谷川さんが作つてくださつたメニューでがんばつてみるしかないね。せめてもう少し時間があればいいの?」

「試合の延期つてできないのかな?」

智花の「時間があれば……」といふのを聞いて愛莉が質問していく。

「まあ無理でしょうね。絶対勝てるつていう自信があるから試合取けたんだりつし。くそ、ムカつくなーあのカマキリ」

紗季がバツサツと切り捨て愛莉が少し落ち込んでしまつ。

「おー? おにこねやんもういなー?」

「ぐるよ。絶対すばるんは助けにきてくれるよー。」

元気を取り戻した真帆が、ひなたの発言を否定する。

「なんだ、『絶対』なんて言こときれるほど信じられるのよ？　『バカ！』　なんじやないの？」

「ムカついたけどみーたんが連れてきた人だから信じじゅ」と云った。それにあゆむんがなんとかしてくれたって言つたもん」

「へー、歩がねー。これはわざと、なにがあったか詳しく話してもらわないといけないわね」

「ヤーヤしながらそんなことをいう紗季から逃げるため、俺は慌てて着替えにトイレに向かうのだった。

そして、日曜日。俺は朝起きてからずっと頭を悩ませていた。

「うがー！ わからん…どうすればいいんやー」

もしも長谷川さんの説得が失敗した場合のことを考えて作戦を考えていたのだが、わかつていたがこれがなかなか難しい。机の上にボツになつた作戦を書いた紙がところ狭しと置いてあるけども、これだという作戦は思いつかないでいた。作戦を考えるにはまずは相手の実力を知ることから、ということでお朝から篠先生からもらったDVDを見ていたけど、思ったことは一つ。

男バスは強い。

俺も練習を見に行つたけど、あの時は途中で帰つてしまつたし、見れたのは前半の基礎的な練習の部分だけだったのであまり参考にならない。実際に試合の映像を見てみると、ディフェンスはマンツーマンが多く、しつかりとそれぞれが役割をこなしている。特別うまい選手はいないが粗もないチームだという印象だ。さすがは地区大会優勝校という感じだ。

そして問題が竹中のオフェンス力だ。さすがに自慢するだけあつて、あいつは智花ほどの実力はないけど結構な点取り屋らしい。今女バスでは止められるのは智花だけだろう。けど、智花にはオフェンスでも頼らざるを得ないから竹中までまかせたら負担が大きすぎる。智花を軸にして、オフェンスとディフェンスの負担を軽くしてあげられるような作戦がいいんだろうけど…………。

やつこちゃんのやつこに戻るとこつ記だ。

「しつかし、ほんとびりすかなかー長谷川さんの説得。まあ、ちやんと女バスのことを話せばわかつてくれそななんだけどな。ヒツカ、それしか方法が思いつかん」

かなり悩んでみたものの、結局は直接会つて話すしかないといつ結論になり、少し早めに昼食を食べて隣の家を訪ねる」とした。

呼び鈴を押してしばりへみると、長谷川さんのお母さんの七夕さんななななが出てきてくれた。

「あら? 邻はたしかお隣の……」

「はい、隣に越してきた園田歩です。今日せ戻さんになつこにきました」

「まあ、今日はかわいこお姫さんがたぐわらね。おばるくんなら庭にこむと悪ひからじうど」

そう言つてもいたので遠慮なく庭の方へ行かせてもらひ。角を曲がれば庭に着くといつといひで話声が聞こえ、思わず立ち止まつてしまつた。話し声から、わっせの七夕さんがあつていていたかわいいお姫さんが誰なのかがわかつた。

「 私、バスケのことになるとすぐ負けず嫌いになっちゃうんです。 」

先客は智花だった。なんで智花がここにいるかはわからないけど、女バスのこと、自分のことを話しているようだった。とても入っていける雰囲気ではないので、壁にもたれて俺も智花の話を聞くことにした。

智花は、前の学校で負けず嫌いの性格のせいで居づらくなり慧心に転校してきたこと。体育の授業でバスケをして真帆に気に入られしたこと。紗季とあいり、ひなたを誘つて女バスを作ったこと。そして智花がどんな風に慧心女子バスケットボール部のことを想つているかを話していった。俺が真帆から聞いたことを、智花の言葉で、智花の想いを話し続けた。長谷川さんからこの試合に負けたらどうするかを聞かれ、もう2度とバスケはしないと答えた智花はこう続けた。

「 もし負けても、私きっとみんなに笑いながら聞いてみせますよ。 』
『 さあ、次はなにしようか? 』 つて 」

それを聞いた瞬間、長谷川さんが息をのんだのがわかつた。とても切なくて、そして覚悟をきめたような声だった。俺からは智花の顔は見えなかつたけど、きっと清々しい顔をしていたんだと思う。

しばらく無言ままが続いたが、飲み物を渡すためにやつてきた七夕さんが2人の沈黙を破つた。

「あら？ 歩君がこいつできてない？」

「え？ 来てないけど。歩が来てるの？」

長谷川さんが逆に七夕さんに聞き返してくる。そのまま隠れているのもおかしいので出て行くことにした。

「すいません。お邪魔します」

「い、いつから?」

俺の登場に智花が慌てだした。きっと話を聞かれていたのが恥ずかしいのだろう。それとも長谷川さんと2人で居たことを知られたくないのか。

「智花が話し始めたところからやな。」めぐ、盗み聞きする形になつてもうて

「うう……」

智花はよほど恥ずかしいみたいで赤くなつて小さくなつてしまつた。

「……、歩も俺の説得にきたのかな？」

長谷川さんが俺の方を向いて核心を突いてきた。

「そのつもりだったんですけど、今の智花の話を聞いても無理なら俺にできるはことないですね。それで、どうです？ 考えなおしてくれますか？」

俺はなるべく真剣な顔をして長谷川さんに尋ねてみる。これには智花も顔をあげ、長谷川さんをじっと見つめていた。

そして、少し長い沈黙を経て長谷川さんが口を開いた。

「…………」めん

返事はなんとなく予想していた。たぶん断られるんじゃないかと。長谷川さんの隣に座っている智花はやつぱり残念そうに顔を俯かせてくる。しかししばらくして顔を上げた時には、もう覚悟を決めたような顔になっていた。

「それじゃあ、厚かましいですけどメールを使わせてもらひつてかまわないですか？」

「智花、練習していくん？ なら、ボールだしやらこしよか？」長谷川さん、かまいませんか？」

「あ、ああ。かまわないよ」

長谷川さんからも許可がでたので、ボールだしをしに、ゴール下に移動する。そして智花はシュート練習を黙々とし始めた。途中に智花の休憩を兼ねて俺もシュート練習をしたり、2人で10対1をやつたりして練習をしていった。その間、長谷川さんはずっと俺たちの練習を見つめていて黙つたままだつた……。

そうして俺たちが練習を終えたのは、もう太陽が傾き、空が夕焼けに染まるころだった。俺と智花はシャワーをお借りし、長谷川さん親子に玄関の前で見送られる。

ちなみに俺もシャワーを借りたのは、俺は家に帰つてから浴びるからと断つたら、智花も「それなら、私も」と断り、長谷川さんに説得され俺が使うならとことことで決着したので俺もシャワーを使わせてもらつことになつたのだった。

「こんなに長く、申し訳ございませんでした。ありがとうございました。それでは」

そう言つて智花は長谷川さんの家を後にした。俺は長谷川さんが智花の後ろ姿をじっと見ているので、無言のままその場に立つていた。そして智花の姿が見えなくなつたこと、智花のいなくなつた方を向きながら長谷川さんに話しかける。

「長谷川さん、俺、今からかなり生意気なことを言います。ムカつくなら怒ってくれてかまいません。……俺、長谷川さんが今どんな立場なのか篠先生から聞きました。憧れの先輩のせいにバスケ部が1年間の活動停止になつてバスケが嫌になつたつて。確かに目標にしていた人が突然いなくなつて腐つてしまふのはわかります。けど、そんなことで冷めてしまつほど長谷川さんの中でバスケつてそんなに軽いものですか？」

長谷川さんの方に向かって、長谷川さんも俺の方を向いたので、眼を見て話を続ける。

「それに、やつきまでの練習でも智花のことを気にしてましたよね？　あれは智花のショートフォームに惹かれていたんじゃないですか？　このままなら来週の試合は負けてしまつでしょうね。もちろん最後まであがいてみせますけど、きっとそれが現実です。そうしたら、智花はバスケを辞めてしましますよ？　あんなにバスケのことが好きで、あんなに綺麗なショートが打てる智花が。もし長谷川さんが助けてくれたら守れるかもしれないのに、です」

「…………」

長谷川さんは自分を責めるよつに話す俺を、怒るでもなく黙つて見つめていた。そして突然、今まで抑えられていたものが溢れ出できたような、そんな声を出した。

「あーー！もーー！ そ、うだよ。俺には無理だつづーの。このままバスケに背を向けるのも、智花を見捨てるのも……母さん、晩御飯の準備4人分な！ 歩、お前はここにいろ！」

「ふふ、わかったわ」

「わかりました」

そう言い残して長谷川さんは智花の帰つて行つた方へ全速力で走つて行つた。その後ろ姿を見送りながらいと、晩御飯の準備をするために家に戻ろうとしている七夕さんがポツリとつぶやいた。

「おかえり、すばるくん。ありがと、歩君」

ちょうど玄関が閉まるタイミングだったので、うまく聞き取れなかつたけど、どこか嬉しそうな感じの声だった。

しばらくすると、少し眼を赤く腫らした智花を連れて長谷川さんが戻ってきた。

「じゃあこれから作戦会議だ。男バスのこと、教えてくれ」

「「はい。」」

俺と智花はそれから再度、長谷川さんの家にお邪魔し、男バスのことや明日からの練習について話し合つた。それは夕食を「ごちそう（ホテル顔負けの料理がでてきてすごく驚いた）」になつても続き、智花の門限が迫ってきたのでお開きになつた。

智花を駅まで送つていいくといつ長谷川さんと玄関のところで別れ、俺は隣の自分の家に着くまでにふと夜空を見上げた。そして、「よしつ」とガツッポーズをとつて明日から始まる忙しくも楽しいであろう日々を想うのだった。

08・決意新たに（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
感想等書いていただければうれしいです。

やつとりおれでこねたなつて感じです。
けじ試合おではあと三話へりい先なのでもだまだがんばりなこと…
…ですね。
それでは……えいわい。

（ ） 交換口語（ひなごとく）（ ）

湊 智花「やつたよー。みんな。歸さん、また明日からも来てくれるつて」

まほまほ「でかしたー。もっかん」

あいり 「本当に。良かつたー」

ひなた 「ねー？ おひこさん、おかえりー」

紗季 智花「よへやつたわよ、アホ。それにして、ビリで渕谷三さんと会つたの。」

明日学校で話すね
湊 智花「練習して学校に行つたら偶然。それで、歸さんのお家にお邪魔したら歩君もきて、それどころか、おもむろに話せないから

まほまほ「あゆむんもこつたのか。あたしもこけばよかつた

この面白くないひなたわね
紗季 「なこじこくのよ。やれこしても、『歸さん』ね。いろ

そして週が明けて月曜日。

俺が登校してくるとテンションMAXの真帆が、席につくなり話しかけてきた。

「おはよう、あゆむん！ もつかんから話は聞いたよ。昨日はよくやつてくれた、褒めてつかわす」

一体いつの時代の人だよ、というツッコミはせず軽く流す。

「俺はなんもしとらんよ。智花ががんばったから長谷川さんは来てくれることになつたようなもんやよ」

「ほんとー?」

妙にニヤニヤした紗季が聞いてくる。智花を見てみると顔を赤くして俯いているので、俺が来る前に昨日のことを根掘り葉掘り聞かれていたんだろう。

「智花がどう話したかわからんけど、俺は確かに煽りはしたけど、長谷川さんは結局は智花のために『一チをする』ことを決めてくれたから、やっぱり智花のおかげやよ」

「もつかんのためかー、胸でももませたとか?」

「そ、そんなわけないでしょ?ー」

またもや真帆がセクハラ発言をして智花がかなり慌てていい。そんなことより俺は、一つの懸念材料が真帆の足もとにあるのでそれについて訊ねてみるとした。

「真帆、その足元にあるカバンやナビ覗た」とあるような気がするよやナビ……」

「うそ、前持つてきたのと同じだよー。中身もね」

俺は前回と同じく「紗季」「マジで?」とマイコンタクトを送ると「マジ?」と返ってきた。うつな気がする。

「それを着るのはここナビ、トコすぐ練習できんよ!とにかく練習はすぐ始めると思つか?」

「オッケー、オッケー。練習どうぞ」とこつて感じ

「着るのはいいんだ……」

愛莉がなにやら「ツツツツ」言つていたけど無視した。そこはもひ、真帆がこの状態なら言つだけ時間の無駄なのであきらめる。

そして放課後になり、またもやメイド+執事で長谷川さんを迎える。扉が開いた瞬間、前回と同じくお決まりのセリフを言つ。

「「「「「お帰りなさいませ、『主人様!』」「」「」「」」

今度は扉を閉めるのではなく、かなり肩を落として困ったような顔をしていた。

「「「めん、みんな。着替えてきてください」」

そう苦笑とともに言つ長谷川さん。もちろん、俺たちも想定内なのですぐに着替える。下に着ているのでその場で脱いでしまう。みんなの着替えが終わつてのを見て、改めて長谷川さんが口を開いた。

「 やつ智花や歩から聞いてると毎ひたゞ、また「一チキをやらせても
ひつ」とになりました。けど、めずせりの前ひどこじとを聞いたの
を許してもいいえるといつれしこ」

アツヒテ、長谷川さんは頭を下げる。

「 おー、おここちやん、ゆるゆー」

一番最初にひなたが答え、顔をあげた長谷川さんと、わかつん俺
たちもひなたと同じ気持ちなので笑顔で答える。

「 あつがと。じゃあ早速だけど始めよつか。打倒男バスへの特訓
を」

長谷川さんの宣言を聞いてみんなの顔が真剣なものに変わる。

「 じゃあまずはチームを2つに分けます。Aチームは真帆と紗季で
歩の指導でショート練習をしてもらつ。Bチームは愛莉とひなたち
やんと智花でまずはティフォンスの練習だ」

昨日話しえつた通りにチーム分けがされる。とりあえず俺の仕事
は、真帆と紗季を試合で使えるほどシートーにすることだ。

「じゃあ、歩みつけは頼んだよ。昨日決めた通りにやつてみてくれ。Bチームは、まずはランニングだから外に行こつか」

「「「はーっー。」」」

智花たちBチームが元気よく返事し、ランニングの為に外に出て行き長谷川さんもそれについて行つた。

「それで？ 私たちはなにをすればいいのかしら？」

「やつだぞ、あたしたちはどさんとあんの？」

2人ともやる気は十分なようで早速、練習内容を聞いてくる。もちろん俺もやる気十分なので、2人にボールを持つて「ゴールの近くまでくるように指示を出す。そして、真帆を右斜め45度で、ゴールから3mくらいのところに立たせ、紗季を真帆と反対の左斜め45度の位置に立たせる。

「じゃあ2人には試合まで、徹底的にここからのショート練習をしてもらうよ。この位置をしつかり覚えといてな」

「でも、少し遠くない？」

距離が少し遠いのを心配している紗季に試しにショートを打つてもう1つ。放ったショートは、バックボードの方に当たつてリン

グにかすりもしなかつた。続いて真帆にも打つてもらつたけど、真帆はリングには当たつたけどショートは決まらなかつた。

けど今はこれで十分だ。紗季の心配した通り、この距離は少し遠いので真帆たちの力で届くかが心配だつたけども2人ともリングに届いたので一安心だ。

「じゃあフォームを教えるからよくきてな。まず、ショートは腕の力だけじゃなくて、膝のバネを使って……」

基本的なショートフォームを教えていく。真帆も紗季も初心者なので両手打ちのやり方を教えていたら、真帆がそれに文句を言つてきた。

「えー、もつかんやあぬむんとおんなじやつがいい！ 片手でビュツつて打つやつ」

「ワンハンド・ショートは、もひとつフォームがしつかりしてからじやないと難しいで？」

そう言つて説得するも聞いてもらえず、結局ワンハンドショートを教えていく。紗季は両手打ちの方でいいと言つてくれた。説明も終わり、2人にさつきの位置で早速練習をしてもらつ。

しばらく交互にショートを打つて、フォームが崩れたりしたら指摘し、相手の方へもどじが悪かったのか考えてもらひ注意するべき

ことを確認していく。ついで、何回かやつてこなしつルートが決まりはじめる。

「よつしゃー、入った。見たか紗季ー。」

「なによ、私だつて」

真帆が決めれば、すかさず紗季も決め、そんな風に次第に成功する時が増えていった。

「大丈夫か！ ひなたちゃん？！」

練習していると外から長谷川さんの慌てたような声が聞こえてきた。なにかあつたようなので練習を止めて様子を見に行く。すると、愛莉に膝枕をしてもらい大粒の汗を書いて横たわるひなたがいた。そばには青い顔をした智花と慌てている長谷川さんもいた。

「苦しいかい？ 僕の声、聞こえてる？」

長谷川さんに話しかけられたひなたは苦しかつて眼を開き、弱々しい声で答える。

「だい……じょうぶ、だよ？ おにこちゃん」

すみと長谷川さんが俯き、急にプルプル震えだした。

「やうだ、保健室に……いやそれじゃだめだ。救急車を呼ばな
いとー」

「は、長谷川さん。ひなちゃんは疲れてるだけですかからここまでし
なくとも大丈夫ですよ」

愛莉にたしなめられて長谷川さんは落ち着いたようだった。

「すばるもわいわくヒナの無垢なる魔性の餌食かー」
イノセントチャーム

「俺もあんなつてたんやな」

長谷川さんの取り乱しつづりを見て、俺も傍から見たらあんなん
だつたのかと反省する。

とりあえず、安全をとつてひなたを長谷川さんが保健室へ連れて
行くことになつた。その間、長谷川さんが一時不在になるのでAチ
ームも俺が見ることになつた。とりあえず真帆と紗季には、引き続
き同じよつにシユートを練習するよつて云々、Aチームの練習を伝
えに行く。ヒ、言つても智花は昨日の話しあいにいたので内容を知
つてゐるから、主に愛莉に説明をする。

「まあは愛莉、セヒルくんに立つて。そりガールの近く。それから両手をあげて腰を落として。それで今から智花が全力で突っ込んでくるけど、とりあえずなにもしなくていいから。ちゃんと、そのままこるのが今日の練習」

「う、うん。」のままの格好でいればいいんだよね

愛莉はすでに若干怯えていた。大丈夫かなと思いつつも追い打ちをかける。

「知つての通り智花のドライブは相当速い。それが体スレスレまでもくるけど、ちゃんと田を開けてその体勢でいること。それで智花も覚えてると思うけど愛莉を気遣わずに全力でいくこと、毎回なにか一つフロイントをくれること」

「大丈夫、ちゃんと覚えてる」

智花から力強い言葉が返つてくる。愛莉はひどく怯えていたけども、ここは心を鬼にして智花を促した。

「じゃあ愛莉、行くよ」

「……う、うん」

そうして智花がボールを構え、愛莉に向かっていく。『全力を出す』といったのをしっかりと守り、相変わらずのドライブのキレだった。

「わやあー。」

案の定、愛莉は智花が田前まで来たときに、田をギュウッと閉じて尻もちをついてしまった。智花はそのままレイアップを決め、愛莉を心配そうに見ていた。

「愛莉、がんばれ。智花は絶対ぶつかってこやんから大丈夫。もう1回やつてみよ。」

「ひやー。」

それから何回かやつてみるけども、肩を抱いて座り込んだり、尻もちをついたりと、なかなか慣れることができないでいた。そうしていると長谷川さんが保健室から戻ってきた。早速、AチームBチームの練習をやつと見て俺の方へやつてきた。

「歩、ありがとうございました。やつぱり愛莉は難しいかな。……それじゃあこつちは俺が見るからBチームの方を見てやつてくれ。あれなら第2段階にあげてもいいよ。」

「わかりました。」

長谷川さんから指示を受け真帆たちの方へ戻ると、俺と長谷川さんの会話を聞いていたのか真帆が質問してくる。

「第2段階つてなんのこと?」

「練習がレベルアップすることやよ。それより休憩せんて大丈夫? 少し休んでもいいよ?」

「全然大丈夫! それよりレベルアップした練習つてなにするの?」

「どうやら真帆はまだ体力的には余裕がありそうだな。紗季にも聞いてみると、まだ大丈夫という返事が返ってきたので次の練習に移ることにした。」

「基本的には今までと同じなんやけど、まず、真帆がそこからショートを打つたらすぐにゴール下まで走つてボールをひらう。それを紗季にバスをして元の位置に戻る。紗季はバスをもらつたら、ショートを打つ。この時になるべくはやく打つことを心がけるけど、フオームはしつかりとしたままにすること。ショートを打つたら、すぐ拾いに行って真帆にバスして戻つてくる。真帆はバスをもらつたらすぐショートを打つ。あとはこれの繰り返し。どう? わかつた?」

説明が長くなってしまったけど、なんとか2人は理解してくれたようだ。

「うへー、大変そう」

「そうね、難しそうね」

「そう言いながらも2人とも、やる気十分な感じで自分のポジションについて。」

「あと、最初は難しいかもしれないけど、なるべく相手のショートを見て悪いところがあれば言つてあげてほしい。もちろん俺も言つけど、2人で気付いたところを指摘し合って」

2人から了解の返事をもらつたので練習を開始する。これはさすがにずっと続けるのはきついので、10分やつて3分休む、を1サイクルにして練習を行つ。

最初の方は2人ともまだ元気なので、戻つてくるのが速いのでフォームの指摘もできていた。けど段々とその余裕もなくなつてきたらしく、自分のショートを打つのが精一杯になつてくる。

「ほら、真帆。完全に手打ちになつてるぞー、紗季は右手が上がりすぎ」

「ハアハア。く、くそー」

「つよ、了解」

結局これをずっと続け、練習終了の声がかかったのは6時半ギリギリだった。終わるや否や、2人はひどく疲れた様子でへたり込んでしまった。

「ふいー、つーかーれーたー」

いつも元気一杯の真帆ですら大の字になつて寝転がっている。紗季に至つては、タオルを顔にかぶせてしゃべる元気も残つてなさそうだ。

「お疲れ様、よく頑張ったな」

がんばった2人に労いの言葉をかけに行く。その途中にBチームの方を見てみるけども、愛莉にはあまり進展がなかつたようだつた。

「ねーあゆむん、レベルどれくらい上がつた?」

「めっちゃ頑張ったから5は上がつたんとちやうかな」

それを聞いた真帆はパアと笑顔になった。

「なんだよー。あるんじやん、一気にレベル上げる方法」

まあシユートに限つて、それも同じ位置からつていう条件がつくけど、とは嬉しそうな顔をしている真帆に言つ必要はないな。真帆のレベルを聞いていたらしに紗季が、疲れきつているであろう体を起して自分のレベルはどれくらいか聞いてきた。

「うーんと、紗季は6くらいいやな

「えー、紗季の方が上なのー？」

紗季のレベルを聞いた途端、真帆の顔が不満そうになる。反対に紗季の顔は得意げだ。

「紗季の方がフォームの乱れが少なかつたし、シユートが決まった数も多いからな」

俺が紗季の方がレベルが高い理由を言つと、

「くそー、紗季なんかには負けないんだからな

「ふふ、追いつかせないわよ」

前から思つていたけども、2人はお互にライバル視してゐるよな。この2人なら抜きつ抜かれつで、すぐうまくなりそうだな。

そうしてゐる間にスクールバスの時間が迫つてゐたので、すぐに片づけを済ませみんなで家路についたのだった。

読んでいただきありがとうございました。
この小説も書き始めて早1ヶ月が過ぎ、PV3万超え、お気に入り
も60件とたくさんの方に読んでいただきて嬉しい限りです。
これからもがんばって書いていきたいと思いますのでよろしくお願
いします。

10・豪邸探見（前書き）

早くも10話になつてしましました。まだ男バス戦すら終わらないとは……。

内容的にはいろいろかなつて思いましたけどなんとなく書きたかったので書いてみた的な第10話です。
それでは……どうぞ。

（） 交換日記（スケジュール）（）

まほまほ「うー、からだがおもこー。うーけなーーー

紗季 「私もさつあ、お風呂で溺れかけたわよ」

ひなた 「おー？ そんな練習、さつこ？」

湊 智花「ひなたは今日みたいにあんまり無理しないでね」

ひなた 「おー、大丈夫。気をつける」

まほまほ「さうこや、アイリーンは？」

湊 智花「……今日のこい、だいぶ『氣』にしてたからまだ落ち込んでるのかも。ちょっと電話してみるね」

次の日の朝、教室に入るとすぐ「ジニアーン」と愛莉が落ち込んでいるのがわかった。

「おはよ。愛莉はどうしたん？」

真帆や智花が慰めていたけど状況がよくわからなかつたので紗季に聞いてみる。

「昨日の練習で全然できなかつたのを気にしてるので歩からもなにか言ってあげてよ」

確かに昨日の練習では、結局最後まで田を開けていくことができなかつたようなので落ち込むのも無理はないな。けど、あんなに怖がつていたのにギブアップせずに最後までやつていたのは胸を張つてもいいことなんだけどな。

それを伝えてあげるべく愛莉に話しかけた。

「愛莉、まだ時間はあるから段々慣れていけば大丈夫やよ」

「うう、頑張りたいのに……」

まだ元気がでない様子の愛莉に続けて話しかける。

「昨日は、あんなに怖がってたのに最後までやれたんやから大したものやよ。それに本気の智花は鬼気迫る感じが怖すぎるから仕方ないよ。俺もあんなのが迫ってきたら田へりこむつてしまつかもしれやんしな」

「あーひどい。私そんなに怖くないもん」

俺が智花が怖すぎるヒオローを入れると、当の智花が頬をブクーとふくらまして抗議してきた。それを見た愛莉が、まだ陰が少しあるもの「ふふ」と笑ってくれた。

愛莉の件が1段落したので、みんなに今日の予定を聞くことにした。

「といひで、今日はみんなはどうするん?」

今日は火曜なので体育館は使えないけど、試合まで日がないので遊んでる訳にはいかない。

「おー、ひなは走る。おにこちゃんが、がんばって走れって言ったから」

「私もひなちゃんと一緒に走るよ。長谷川さんから言われてるの」

「私は櫻さんとの会議で作戦会議なの。試合のルールとか教えたり、当日の作戦を考えたり」

「あれ、やうなん？ なら、俺も行くよ」

智花が長谷川さんの会議に行くところの、コーチ補佐としては行くべきかと思つたけども思わぬところから反対意見ができた。

「なに言つてんの、あゆむん。あゆむんはあたしん家に集合すんの！」

「やうよ、歩には私たちの練習を見てもらわないと」

真帆と紗季がそう言つてくるけど、俺は初耳だつたはずだ。けど、そういうことなら喜んで真帆たちに付き合つことにする。決まった内容はまた明日にでも聞けば大丈夫だろうしな。

「ふふ。それにせつかく、トモと長谷川さんが2人つきりなのに邪魔しちゃ悪いでしょ」

「な、なに言つてるの紗季。そそ、そんなんじゃないんだから

紗季にからかわれて必死に弁解している智花は真っ赤な顔をしていた。それをみんなで笑って、俺はオールコートがあつたり、メイドがいたりする真帆の家がどれだけすゞいのか、を考えて始まった授業を過ごしていった。

そして放課後となり、朝に話していた通り、紗季と一緒に真帆の家に向かうことになった。他のみんなとは一緒にスクールバスで駅まで行き、そこでそれぞれの行き先へと別れた。なので今は、真帆と紗季の3人で真帆の家に向かっている最中という訳だ。

「それにしても真帆ん家つてすつゞいんやろ？　俺なんかが行つてもいいんやろか？　紗季は行つたことあるん？」

「そりや、あるわよ。まあ、私も久しぶりなんだけどね。別にそんなに緊張しなくてもいいんじやない？　廊下の壺とか割つたら知らないけど」

せりふと怖いことを言つ紗季を置いといて、真帆にも話しかける。

「なー真帆、まだつかんの？」

最寄駅だという駅を降りてから、それなりに歩いているので周りを見渡しつつ聞いてみる。周りは一軒一軒の敷地が広く、道路から見える車は外車ばかりだ。俺ん家の周りと比べるまでもなく高級住宅地という雰囲気がしている。

「んー、家は見えてるんだけどな。歩くとやっぱ結構かかるなー。ほら、あれが家だよ」

そういうて真帆が指差した方を見て、俺の想像はまだまだ甘かつたことを思い知らされる。真帆が指差した家は小高い丘の中ほどにあり、リゾートホテルかなにかかと想つてもおかしくないような大きな家だった。

「あ、あれなん?」

驚き半分、呆れ半分になつて呆然と立ちつくす。しかし真帆はもちろん、紗季も俺みたいな反応に慣れているのかスタスタ歩いて行つてしまつ。置いて行かれないように走つて追いつく。しばらくして、丘の麓にある薔薇の模様の門までたどり着いた。そこで1人のメイドさんが俺らを出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ、真帆さま」

そう言つてお辞儀をしてくるメイドさんは、以前真帆たちが着ていたのと同じデザインの服を着ていた。真帆が用意したメイド服は自分の家のメイド服をモテルにしたようだ。

なんて思つてゐると真帆がメイドさんと話始める。

「おー、やさます。出迎え」

「いや、むしろ駄までも迎えに行けず申し訳ございません。それで、そちらが？」

「や、今日来るつて言つてあつた友達のあゆむん！ と紗季」

紗季がまるで俺のおまけのように言われている。まあ紗季は初めてではないから仕方ないのかな。けど、隣の紗季を見てみるとムスつとした顔をしていた。

「はじめまして、あゆむんさま。私、真帆さまの専属メイドを務めさせていただいております、久井奈聖^{ひづ}と申します。本宅において御用の際は私にお申し付けください」

「はー、いらっしゃる、はじめまして。園田歩です。今日はお邪魔させてもりこます」

本物のメイドさんを田の当たりにして、たじろいでしまつ。自己紹介をしてくれた久井奈さんは真帆の専属ということだけ、真帆の

世話を見るならかなりの重労働なんじゃないんだらつか？ 凜とした併まいからは真面目そつた印象を受ける。

けど俺の聞き間違いかもしけないけど、さっきの自己紹介でおかしなところがあつたので改めて聞いてみる。

「あ、あのー、俺のことなんて呼びました？『あゆむん』もって言いました？」

「それでいいじゃん。あゆむんはあゆむんなんだから」

久井奈さんに聞いたのに答えたのは隣の真帆だった。

「はー、あゆむんをまとお呼びせていただいておりまーす」

わつわつて、わつわつと笑う久井奈さん。

前言撤回。このひとなら真帆の世話もできるかもしね。むしろ一緒に遊んでやうなイメージに変わった。

「ふふ、久井奈さんは真帆の付けたあだ名でみんなを呼ぶのよ。トモも『もつかんわ』だしね」

そんなやり取りをして、門のそばに停めてあつたリムジンに乗つ

て家の方に向かうことになつた。ちなみに運転は久井奈さんがやつてくれている。普段も真帆の送り迎えは久井奈さんがやつてくれているそうだ。俺はと言えば、リムジンという高級車に緊張してしまい、真帆たちとの会話でも生返事しか返せなかつた。

実際には数分なのだろうけど、俺には1時間にも感じた道のりを過ぎて本館に到着した。さつそく1階の部屋に案内され、そこで着替えるように言われた。真帆と紗季は別の部屋に案内されていった。着替えはすぐに済んで部屋の前で待つていると、着替えを済ませた真帆と紗季がやつてきた。

「じゃあコートこいつか。」ひちだよ

真帆の案内でコートに向かう。本館をでて、庭とはいえない森を歩くこと数分、開けた視界の向こうにテニスコートに隣接してバスケットコートが見えた。すでに久井奈さんがいて、タオルやスポーツリンクの準備をしてくれていた。

「じゃあ、わっそく練習しようよー。」

「いやいや、ちゃんとストレッチしてからや

真帆が「えー」と不満そうな顔をしてくるけどこれは譲れない。ケガをしたら元も子もないだろ、と真帆を説得しストレッチを始める。確かに真帆も紗季も結構、体が柔らかいけれどしっかりと体をほぐしておくのは大切なことだ。

ストレッチを1通り終え、いよいよ練習を始める。

「じゃあ、まずは定位位置から打つやつで昨日のねらいからやな。
ちゃんとフォームを覚えてるか確認や」

「「まーこ」」

2人は元気に返事をして、きちんと昨日と同じ場所に立つてショートを打ち始める。さすがに昨日の今日なので、2人とも重要なところは忘れておらず、しっかりとフォームを自分で確認しながらシートを打つしていく。

「真帆も紗季も直接「ゴールを狙つんやなくて、バックボードの四角の枠の中を狙う感じで」

「「解ー」」「わかったわ」

何回かショートを打つて感覚を思い出したよつなので、早速第2段階の練習に切り替える。

「じゃあ、走るやつをやるか。今更やけど筋肉痛とか平気?」

朝から普段通りだったのであまり気にならなかつたけど、昨日の

練習が終わった時のことを考えれば十分なつていてもおかしくない。けど、そこは若さの勝利か、ケアがよかつたのか、若干足に違和感があるくらいで済んでいるらしいので練習を続ける。昨日と同じよう10分やつて3分休憩を繰り返す。

1時間ほどそれを続け、2人がかなりバテてきたので一旦休憩にする。すると待機していた久井奈さんが、全員分のタオルとドリンクを持ってくれた。

「真帆さまも紗季さまも、たいへんお上手なんですね」

久井奈さんはタオルを渡しながら、みんなに話しかける。褒められた2人はうれしそうにしている。確かにショートが決まる数も増えてきて、うまくなつていく実感があるんだろう。

「それにしても、真帆さまがこんなに真剣になられるのはネトゲ以来ですか？」このパートを買つてもうつために旦那様に頼んでいた時も

「も、もう、やんばるひるわー、ほら、あゆむん休憩終わり！」

正直、まだあまり休んでいないのできついんじゃないかと思つけど、真帆があまりに必死に久井奈さんに続きをしゃべらさないようにするので練習を再開することにした。紗季も呆れながらも、再開することに頷いてくれた。それにしても、あんなに必死に隠そされると逆に知りたくなるのが本音なので、あとで聞けそなうなら久

井奈さんにも聞いてみるかな。

「じゃあ始めよっか。次はわらにレベルをあげて、俺がティフェンスに立つわ。まあティフェンスと言つても、ただ前で両手をあげて突つ立つてるだけやけどな。だから、ショートを打つたら俺を避けてボールを拾つてバスをする。バスを受けたらすぐショートを打つけど、その間に俺がティフェンスにつくから」

2人から了解の返事があつたので、早速練習を再開させる。やはりただ立つてているだけのティフェンスでもやりづらいらしく、さつきまで入つていたシユートがあきらかに入らなくなつっていた。

「くつそー、やりづらー」

「ただ立つてるだけなのに」

真帆も紗季も苦戦している。けど、試合ではフリーで打てる」との方が少ないのだからこれに慣れておかないと話にならない。

「ほら、フォームが崩れてるぞ。俺を意識しそぎや」

それからしばらくして、慣れてきたのか2人ともショートが決まり始める。しかし、もうそろそろ時間も遅くなつてきて辺りが夕方とこには暗くなりすぎてきていた。まだまだ練習を続けたそうな

2人だけ、さすがにナイター設備はなく、2人の疲労もかなりあるようなので今日の練習はここまでにすることにした。

そう告げると、2人は若干不満そうにしたけどもやはり疲れが相当あるらしく大人しく片づけを始めた。もちろん、俺も片づけを手伝っていると途中からどこかへ行っていた久井奈さんが戻ってきた。片づけが終わり、一息ついていると久井奈さんが近くまでやってきた。

「では、お風呂の準備ができていますので、どうぞいらっしゃく。そのあと、ご夕食の準備もしておきますので食堂の方へご案内します」

今日は俺も動いたので汗だくだつたし、真帆たちは言わずもがなで久井奈さんと俺を置いて先に行ってしまっている始末だ。俺も遠慮なくお風呂を使わせてもらうため、久井奈さんに浴場に案内してもらつた。

着いたところは案の定、銭湯くらいの広さのお風呂で思わず泳ぎたくなつてしまつほど広かつた。ともあれ、広いお風呂を満喫し楽しんで食堂に案内してもらつ。

食堂も予想通りに広く、結構この「ゴージャス」ぶりに慣れてくる自分がいた。案内されたテーブルに所在無げに座つていると、風呂上がりでさつぱりした感じの真帆たちが食堂に入つてきてテーブルについた。2人が座ると料理が運ばれてくる。料理はフランス料理のフルコース……などではなく見た目は普通のハンバーグが出てきた。味は母さんが作ってくれるものより断然おいしく、きっと材料の差なんだろうなと思った。

デザートまで食べ終え、しばらく真帆たちと今田の練習のことなど話をしているとトライレに行きたくなつたので席をたつた。

「トライレは部屋を出て、左にひって、つきあたりを右に」

トライレまでの行き方を真帆に聞いてみると、説明が長かつた。なんとか覚えて部屋を後にする。

「あー、どうしたもんやろ」

トライレにはなんとか着いたものの戻る時に迷つてしまつた。

家の中で迷子になるなんて、なんてマンガ的お約束をやつてるんだ……。

落ち込んでいても仕方ないので、ひとまずうつる覚えながらも歩き始める。しばらく歩いていると扉が半開きになつた部屋があつた。悪いことをしているとわかつていたけど気になつたので覗いてみると、そこには、PS3をはじめ各種TVゲーム、将棋やオセロなどのボードゲーム、さらにはバランスボールや縄跳びなど雑多なものが部屋に散らかつていた。

なんか「ちや」「ひや」した部屋だな……と黙つてこると背後に人の気配を感じた。

「「」の部屋は真帆さまのおもひや部屋です」

思わず、「ひ」、「ひ」と小さく悲鳴をあげ振り向くと、そこには久井奈さんがいた。

「「」においででしたか、探しましたよ」

帰りが遅い俺を心配して探していくくれていたらしい。「ありがと「」や「」めす」とお礼をいい、「」の部屋について聞いてみる。

「「」は真帆の部屋なんですか？ 結構いろんなものが置いてありますね」

「は」。真帆さまは飲み込みが早くなんでも器用にこなしますのが、その半面すぐに次の「」とに興味を示されるの「」のようにならうなものがある状態になつておつまます」

なるほど、なんでもある程度はすぐでできるようになつてしまつから飽きっぽいんだな。たしかにこのショート練習もすでに形になつてきてるもんな。

と、思つてゐると微笑み付きで久井奈さんが続けた。

「しかし、バスケは特別らしいです。先程は止められましたがお話ししまいしょ」

そう言つて、「秘密ですよ」と人差し指を口の前に立ててから話し始める。

「真帆さまがゴールを買ってほしいと旦那様に頼んでいた時です。旦那様から、どうせまたすぐ飽きるんだろうから勿体ないと言われた真帆さまは真剣な顔でテーブルを叩き、こう言いました。

バスケは今までと違う。絶対あきたりしないってそう言ふ。それにこれは大事な友達を助けるために必要なんだ。

今まで見たことがないようなほどの真剣な顔でした。それを聞いて、旦那様は「ゴールを買つことを認めました」

それを聞いて俺は、ニヤつく顔を抑えられなかつた。真帆がそれほど真剣にバスケが好きだとわかつて嬉しかつたし、やつぱり友達思いのいいやつだと思つたからだ。

「それに最近は別の楽しみもできたみたいですし……」

久井奈さんがそう小声で付け足したのを、すっかり自分の世界に入っていた俺は気付かなかつた。

「」のことは秘密ですからね、と再度念押しされ、食堂へと戻つた。戻ると真帆から「遅い」と叱られ、紗季からは「仕方ないわね」と呆れられた。そして少しおしゃべりをしてから、久井奈さんの運転するリムジンで紗季と一緒に送つてもらつて家に帰つたのだった。

10・豪邸拝見（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想等書いていただければ嬉しいです。

11・決戦前夜（前書き）

今日は試合当日まで駆け足でいく感じになつております。
それでは……どうも。

11・決戦前夜

（） 交換日記（）（）

紗季 「やー、今日も練習をつかつたわ」

まほまほ「あゆむんもけつじへ、スバルタだよな」

あいり 「そんなに練習したの？」

まほまほ「ひがくれるまでやつたよ。それよりもつかんはすばるん
ヒイチヤイチヤした？」

湊 智花「してません！ ただルールの確認と作戦を話してただけ」

ひなた 「おこづかさんち、いいな。ひなもいきたい」

次の日は朝からみんな「」となく疲れてくる感じで、いつもなら

元気にはこいつをしておしゃべりを始めるところだがあまり会話が進まなかつた。そういう俺も、昨日そんなに激しく動いていないのに疲れが残つていて、かなり眠たい。その日の授業はほとんど睡眠学習状態になつてしまい、結果一日の授業がものすごく早く終わつたように感じた。

そうして放課後になり体育館に向かつ。朝は疲れたようにしていたみんなも現金なもので、練習の時間になると元気になつて体育館に走つて行つた。

長谷川さんも時間通りにやつてきたので練習を始める。

みんなでストレッチをしていると長谷川さんが話しかけてきた。

「やー愛莉、なんか背が縮んだんじゃない?」

「ちよ、長谷川さん。それは……」

いきなり愛莉にとつて禁句である背のことを話し始める。それを聞いた愛莉以外のメンバーも息を飲んで驚いていた。また泣き始めるんじゃないかと恐る恐る愛莉の方をみると、

「ほ、本当ですか!-!」

「は?」

愛莉の反応が予想外だったので、思わず間抜けな声を出してしま

つた。いやいや愛莉さん、そう簡単にこの成長期に背が縮む」とはないですよ、ヒツツノミたいのを手でのところで抑えた。

「あ、ああ。なんか気持ち田線が下がった気がするよ」

言つた張本人の長谷川さんも驚きを隠せずにいた。しかも、ウンをついているという罪悪感からか田が若干泳いでいる。

「えへへ、嬉しい。もひあのベットの効果がでてきたんだ。よーし、今日も頑張るぞー」

こつもはどちらかと言つと大人しい愛莉がハイテンションになるところは、なかなかレアなんじゃないだろうか。みんなもまだ戸惑いが残つてゐる感じだが、それは置いといて残りのストレッチを終わらした。練習の準備をしてゐる間に、俺はさつきのことを長谷川さんに聞きにいった。

「なんでもさつきは愛莉にあんな見え透いたウソをついたんですか?」

「いや昨日さ、智花から愛莉は背が縮むつていう話には疑いもなく飛びつくつていう話をきいてホントなのかなつて試したんだ。結果は予想以上だつたけどね」

確かにあれなら悪徳商法にだつて引っかかりそうな雰囲気だつた

な。

そうしていようと準備が終わつたようなので、月曜と同じ2チームに分かれて練習を始める。

「おっしゃー、今日もやせねー！」

「今日」やは成功率7割を達成するんだから」

2人ともやる気は十分みたいたつた。真帆と紗季のショート練習はフォームのおさらいから始め、俺のティフェンス付きの練習に切り替える。

休憩の合間にAチームの方の練習に田をやると、今日の愛莉はへたり込むことはなくなり、田もまだ多少びくつきながらも田はしつかり開けていられるようだつた。月曜からしたら格段にマシになつていた。2回目といつことで慣れたのか、それともテンションの高さゆえかわからないけど、もし後者ならあともうひと押しがあればボストンプレーもこなしてくれるようになるかもしけない。これは長谷川さんと要相談だな。そんなことを考えつつも、真帆たちの練習に集中する。

結局、今日もひたすらショート練習をしていった。けど、真帆も紗季も飽きたの一言も言わずしつかりとお互に問題点を指摘し合い、確実にうまくなつていた。練習が終わり、片づけをしているときに少し離れたところでモップをかけていた紗季がポツリとつぶやいたのを聞いてしまつた。

「はあー。今日も5割くらいだったな。しかも真帆の方がよく入つてたわよね」

そんなことをつぶやきながら少し落ち込んでこるようだった。B
チームマーチとしては、ほつとけないので励ましに行く。

「紗季」

「な、なに、歩。もしかして紗季の聞いてた？」

びっくりせめりもつはなかつたけど、ちょっとボーとしていた
のか話しかけた途端に驚かれてしまった。

「じめん、聞こえてしまつたわ。それより、そんなに気にせんでいいよ？ まだ本格的に始めて3日やのに成功率5割もあるなんてむしろ胸を張つていいことやよ」

「わつかしら？ でも真帆の方がよく入るよね？」

やせぱり真帆の「」とが気になる「」とを聞いてくる。

「まあ、たしかに今日は真帆の方がよく決めてたかな」

「やつぱつ……」

こつもなり「いや」「明日は負けない」みたいになるの」「意外と深く気にしているようなので周りに聞こえないように手を添えて耳の近くで小声で付け足した。

「……でも、真帆はフォームが崩れる時が多いからまぐれなどころもあるよ。その点紗季は安定したフォームやから、入るフォームを覚えたら真帆よりもすぐに上手になるよ」

「……本当に……」

やつと元気になつてくれた紗季に笑顔で答える。すると、俺たちが話してくるのに気付いた真帆が近づいてきた。

「なにやつてんの……」

「うわい

「やつぱつ」

真帆が「つの」のところで軽くジャンプし、俺と紗季の肩に腕を回す格好で飛び込んできた。なんとか踏ん張ると真帆は素直に離してくれた。

「セ、紗季にワンポイントアドバイスをやつしたといひやよ」

「えー、するー！ あたしにも教えてよ」

真帆のことを若干でも懸念していたので、本筋のことを詮議す
困ってしまった。

「おーい、みんなちょっと集まってくれ

するとタイミング良く長谷川さんが集合をかけたので、真帆を促
して長谷川さんのところへ向かう。真帆は少し納得していない感じ
だけど大人しくついてきてくれた。みんなが集まつたのを確認して
長谷川さんが話し始める。

「実は明日のことなんだけど……」

「ねつしゃー、決まった」

日付が変わつて木曜日のお放課後。俺たちはみんなで長谷川さんの家に来ていた。昨日の練習後に長谷川さんから提案があつたからだ。明日（金曜日）が祝日で休みなので、今日の放課後は長谷川さん家で夜まで練習する計画に真帆を始め、みんなすうじい乗り気だったのを速攻で了解の返事をして、今に至るという訳だ。

それで今は、長谷川さん家で練習中で、バスをみんなで回してから真帆がシートを決めたところだ。

「じゃあもつ一回ね。……智花

もつ言つて智花にボールを渡す長谷川さん。

「はー。……愛莉」

バスを受けた智花はふわりとした感じで両手を挙げたくらいの高さにバスを出す。

「……と、とと。……ひなちゃん」

危うく落としかつになつた愛莉だけど無事バスを受け取り、ワン

パンをせてひなたに渡す。

「おー、よーしょ。……真帆」

しつかりとボールを抱えたひなたは真帆にバスを出す。

「オッケー！ 紗季、決めろよ」

ひなたからバスをもらつた真帆は、シュートを打つために例のポジションに走りこんでいる紗季にハッパ付きでバスを出す。

「言わねなくても！」

紗季の放つたシュートはしつかりと決まった。

「紗季も真帆す」いね。ほとんど入るようになつたんじゃない？

「へへーん。楽勝だね」

「なに言つてんの。まだまだ練習しなきや」

智花が2人の練習成果を見て驚いていた。実際はまだ五分五分く

らいなんだけば、2人が褒められるとなんか俺まで鼻が高い気分になってしまう。

「でもホント、小学生って最高だな」

俺の隣で、一緒に真帆たちのやり取りをみていた長谷川さんがポツリとつぶやいたのが聞こえた。

「ハハ、長谷川さん。今のセリフだけ聞いたらヤバイ人に聞こえますよ」

「な、なに言つて？！ そんな意味じゃないからな」

「わかつてますよ。言つてみただけです」

そうして、バス回しからのショートや昨日から始めたティーフォンの練習、さらには愛莉の特訓など田が暮れるまでいろいろなことをやつていった。そんな感じで練習を続けていると、窓から2人の女性が顔を出した。

「みんな、お風呂の準備ができたわよ」

「わっぱりした！ 飯にしまじょうね。今、特製グラタンを焼いてるところだから」

グラタンを焼いていると言つた方は言わすとしれた七夕さんで、もう一人はと言つと今日俺が長谷川さん家でお世話になると言つたらつこてきた俺の母さんだつたりする。

「なゆっち、マイマイ、サンキュー！ もうあたしあ腹ペコペコ」

「ひら真帆、失礼でしょっが！」

真帆が「ご飯ですよ」発言にバンザイのよつに両手をあげて答えると、紗季からお叱りを受けていた。真帆にかかれば大人も関係なくあだ名で呼ぶらしい。なゆっちというのは長谷川七夕さんのことで、マイマイというのが俺の母さんの方のあだ名みたいだ。本名が『園田舞』なのでマイマイ何だらうけど自分の親があだ名で呼ばれるのはかなり恥ずかしい。しかも、2人とも「あらー若いころみたいね」なんて満更でもなさそうだから余計困る。長谷川さんの方を見ると、長谷川さんも微妙な顔をしていた。

「ま、まあそろそろ暗くなつてきたしこれで練習は終わるつか。順番にお風呂に入つてご飯にしよっか」

長谷川さんが俺たちの方を向いて聞いてきたので、みんなで「はーい」と返事をした。

「じゃあせ、じゃあや。みんなでいつくんに入らうよ」

真帆がそんなことをいこだし、女性陣はお風呂の広さに若干の不安を抱えつつ全員で入ることになった。俺たち男性陣は隣の俺の家の風呂を使い、シャワーでさつと汗を流した。長谷川さん家に戻ってきても当然女性陣はまだ入浴中だったので、長谷川さんとリビングでくつりぐことになった。

「歩、明後日の土曜はタガたくらヒマ? 当日の作戦の最終確認でもしたいだけ」

キッチンの方から漂ってくる匂いにまつたりしてくる長谷川さんが話しかけてきた。

「それで、どうせなら男バスのローリーとかも見て確認したいから泊つていかないか?」

「俺は全然大丈夫ですよ。いこよね、母さん?」

すると、キッチンの方で「かまいませんか?」「ぜひ、泊つて行ってください」というようなやり取りが聞こえた後、母さんからのお許しがでた。

「…………真帆、…………恥ず…………服…………」

後は他愛ないことを話しているとバタバタと廊下を走る音が聞こえてきた。

「あゆむん、すばるん！　あたしとまっかんの胸どっちがあつきい？」

「なつ……！」

「うわああーー！」

いきなり扉を開けて入ってきた真帆はなんとバスタオルを1枚体に巻いただけの格好だった。そんな真帆を止めようと追ってきた智花も同様の格好だった。思わず2人のすらりと伸びる細い手足、それに風呂上がりで少し上気した肌に目を向けそうになるのを必死でこらえる。

「あらあら、湯冷めしちゃうから早く服を着ましちゃうね」

「まだ見てもうつてないよー！」

かなり混乱している男性陣を置いて、七夕さんが2人をお風呂場に連れて行ってくれた。

……ナイスです、七夕さん。真帆はもっと羞恥心を持つてくれださい。

そして祝日の金曜日。

今日は篁先生の計らいで1日体育館を使えることになった。午前中は今まで通り2チームに分かれての練習をやつた。もちろん俺は真帆たちBチームの指導にまわる。とはいっても、もう2人ともかなりフォームも安定してきたので後は体が覚えるまで練習を繰り返すしかないの俺の仕事はディフェンスとして立つていてことくらいしかなかつた。

昼休みを挟んで午後からは、五人での攻撃練習とディフェンスの練習をやつた。ディフェンスは時間がなかつたのでかなり歪なものになつてしまつたけど、現状でできる最善だと思つ。やっぱりこの辺は長谷川さんのコーチとしての力がでていて、とても俺だけでは思いつかない陣形だつた。ディフェンスが弱い分点は取られるだろうけど、その分取り返せばいい。そのための2つの砲台であり、今回指すバスケはそういうバスケだつた。

そして、試合前日の土曜日。

この日は昨日の内に長谷川さんから休んで明日に体調を整えるようになつて言われていたので練習はなかつた。夕がたに長谷川さん家に泊りに行く予定だつたので準備をしていると、昼過ぎに真帆から電話があつた。やっぱりじつとなんてしていられないから練習したいの

で家にきてほしい」という連絡だった。紗季にもすでに連絡済みで紗季も来るということで俺が断る理由もないのでもう一つ返事で了解して、真帆の家に向かった。家を出るときこ長谷川さん家に向かつて、う智花とすれ違った。

「あれ？ 智花も練習？」

「も？ こことは歩君も？」

「そ、今から真帆ん家に行くと」

お互いがんばろ、と励ましあい別れた。

真帆の家に着くと紗季はすでにについており、2人とも体操服に着替えて準備万端だった。とはいえた日に疲れが残つたら意味がないので軽めに練習をすることにする。フォームの確認やティフーンスの時の役割なんかを確認していると気付けばもう夕がたにならうかとこづ時間だつた。

「じゃあ今日はこれくらいにしていいか。今日はあとはゆっくり休むんやよ。そんで明日は2人のシコートで男バスに勝とうな

「あつたまえだ！」

「絶対勝つわ」

それから約束通り長谷川さん家にお邪魔し、夕ご飯と一緒に食べ（メニューは明日のJとを思つてかとんかつだった）お風呂に入つてから長谷川さんの部屋で作戦会議をはじめた。

「 と、まあ明日の作戦はこんな感じかな。なにかおかしなところはあるかな？」

DVDを見てから、明日の具体的な作戦を話し終わつたあとに長谷川さんが聞いてきた。

「問題ないと思こま。とこうか、これしかなつてへりこのここ作戦だと思います」

「ハハ、ありがと。ただ心配なのは愛莉のJとだね」

Jの作戦の最大の不安要素は、試合前に愛莉のJとを躊躇なこといかないことにJとだつた。これに失敗すると勝ち皿はなくなつてしまふ。

「それに関してはもう出たとこ勝負しかないですよ。でも、Jの前の反応を見る限り成功する方が高いんじゃないですか？」

「Jとでこいんだけどね。でも、終わつたらちゃんと謝らなことな」

「その時は俺も一緒に謝りますよ」

そのあともいろいろ明日のことを確認して、時間も遅くなつてきたので寝ることになった。そのまま、長谷川さんの部屋に布団を敷いてもらい一緒に寝る。

電気を消して1時間後、俺はまだ寝つけずにいた。明日のことを思つと、もつとできることがあつたんじやないかとか考えてしまい、不安でなかなか寝れないものであつた。やれるだけはやつたつもりだし、真帆たちもすごくがんばつた。けれどもそれでももし届かなかつたら……なんてループする思考が余計に不安を駆り立てる。

「歩、眠れないのか？」

俺が寝ていのを気配で気付かれたのか長谷川さんが話しかけてきた。

「はい。情けないですけど明日のことが不安でなかなか……」

「俺も歩も教えることは全部教えた。あとはあの子たちを、あの子たちの努力と想いを信じよう。大丈夫、きっと勝てるよ。そのために俺と歩がコーチをしたんだから」

そうだ、みんなを信じよう。愛莉を、ひなたを、紗季を、智花を、そして普段は無茶ばかりするけど元気いっぱいの、本当は友達思

いの真帆を。

やつしていると次第に不安はなくなつていき、眠くなつてきた。

「……勝とうな。絶対」

「つらつらとしていて意識が途切れがちだつた俺は、長谷川さん
がそう呟いたのに気付かなかつた。

11・決戦前夜（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

次回はいよいよ男バス戦です。オリジナル分は少ないかもしませんが勘弁してください。

感想お待ちしております。

12・v/s男バス（前半）（前書き）

更新が遅くなつてしましました。

今回は長くなつたので2つに分けました。
まずは男バス戦前半をお楽しみください。

それでは……どうぞ。

（） 交換日記（ひづけ）（）

湊 智花「いよいよ明日だね。もうみんな寝ちゃったかな？ なんか寝付けないから日記を最初から

「 読んでたけどこいつはあるね、みんなとの思い出」

まほまほ「あほ、なんじだとおもってんだ！ もっかんがちゅうしわるかつたらゼッティーかでない

「んだからな」

紗季 「 そうよ、トモ。いくら私たちが少ししゃべりつまくなつたからつて最後はやつぱりトモが

「 賴りなんだから体調不良なんて許さないんだからね」

あいり 「えへへ、寝れないのはわたしだけじゃないんだね」

ひなた 「ともか、寝れないならミルクのめばいい。ひなものんだ」

湊 智花「みんな、返事早すぎだよ………… ありがと」

そしてこよこの朝。
いつの間にか眠っていた俺が田を覚ますと、もひ長谷川さんの姿
はベットになかった。若干重いまぶたをこすり、いこむのするリ
ビングに降りて行く。

「おはよう、歩君。あらあら眠ね。あっちで顔を洗つてらっし
やー。もひすぐじ飯ができるから」

おはよー、と挨拶をして言われた通り洗面所に顔を洗
いに行く。顔を洗ったおかげで幾分田が覚めて戻つてくると、朝ご
はんの準備ができていた。

「悪いんだけど、ばるくんを呼んでもらえないかな？ 庭にい
ると思つかり」

「わかりました」

ダダダ ダン パス 「ふー……」

庭に行くと長谷川さんがレイアップを決めたところだった。けど、
朝練にしてはなんか汗をかきすぎているように思つただけど……。

「こつもせんなに朝から練習してるんですか？」

「ハハ、そんなことないよ。……今日はただ早くに田が覚めちゃってじつとしてられなかつたから、かな」

「うつ言つて苦笑いをする長谷川せんに朝じはんができたことを云え、一緒にリビングに戻る。朝じはんを食べ終え、しづめらへすると簾先生が迎えに来てくれたので学校まで送つてもらつた。

集合時間である9時より15分も早く着いたのにもうすでにみんな集合していた。

「遅いぞ、あゆむん、すばるん」

「「」あん、「」あん。でもみんなが早いんやよ？」

余つなりダメ出しを真帆からもらつてしまご、謝りつつも他のみんなにあこがれをしつこく。一通りあいさつをすますと向こうからカマキリがやつてくるのが見えた。

「簾先生、やつと到着ですか。私たちは8時半には集まつていたのに女バスは余裕ですね」

カマキリに話しかけられた当の本人は一瞥もくれることなく真帆たちと話していた。完全無視とは朝から絶好調だな。

「ふん、まあいいでしょ。今日は機嫌がいいですから。なんたつて、明日からどこかのお遊びを見ることなく練習できるんですからね」

憎たらしに捨て台詞を残してカマキリは去つて行った。その後ろ姿に真帆、紗季、さつきまで無視を決め込んでいた篁先生が親指を下に向けるポーズをやっていたけど自業自得だ。むしろ俺も一緒にやってやりたい気分だった。

「さて、今日の作戦を伝えたいから体育倉庫に集まつてもらえるかな」

みんなが一気に顔を真剣なものに変え、額き体育倉庫に集合する。篁先生は作戦を知つたら面白くないと言つてついてこなかつた。そうして倉庫に集まり、いよいよ長谷川さんから今日の作戦が伝えられる。

……わて、今日の最初にして最大の難関が突破できるか試してみようか。

そして、今日の作戦のすべてを伝えコートに戻ると竹中と田中が合

つた。

「むざむざ負けにくるなんてな。逃げりやあよかつたの」

「勝てる相手に逃げる理由なんてないわな」

しばらぐ2人でにらみ合つてると先に折れたのは竹中だった。

「ふん、どんな練習してたかしらねーけど品あつぶしてやる」

「やつちかじか俺らの力をみせてやるよ、覚悟ひとつくせやな」

最後にやつてそれぞれのベンチに向かう。ベンチに着くとこれからウォームアップを始めるところだった。10分くらいウォームアップを行い、10時になつたので審判から集合がかかつた。センターラインに選手が集合し、礼と握手をかわしいよによ試合が始ま。

審判からジャンプボールの指示があり、ジャンパーとして立つたのは打ち合わせ通り智花だった。

「ふつ」

そんな呆れ笑いが相手チームから聞こえた。あきらかに愛莉じゃなくて安心した声だつた。安心するのは早いんじゃないかな、カマキリさんよー。そしてボールが高く上げられ、最高点を超え少し落ちてきたところで先にボールに触れたのは智花だつた。

「フユーズー」

智花がはじいたボールはまっすぐ真帆のところにわたつた。

「真帆つ」

「あいよつ」

すかさず智花にリターンする。そのままドリブルで敵陣まで乗り込んでいく。フリースロー・ライン付近まで一気に踏破しストップする。

「こくよつー」

そして放たれたのはショートではなく、ふわりとしたパスだつた。しかし、普通にジャンプしたんじや届かない高さの、だ。そしてこのコート内にただ一人だけ、このパスに対応できる選手がいる。

「は、はー」

そう、愛莉だ。練習通り、ゴール下まで走りこんでいた愛莉が高く上げた両手にバスがすんなり通る。そのままショートし、無事に初得点は女バスが先制した。

「よし、予定通り！」

思わず、ガツツポーズをとる「一チ2人だつた。隣を見るとカマキリは口をあんぐり開けていて、かなり驚いているようだつた。驚いているのは男バス選手も同じらしく試合を再開させるも動きがぎこちなかつた。当然、そんな隙を智花が見逃すはずもなくあつさりパスカットに成功し、さつきと同じように高いバスを愛莉に通し、またもやショートを決める。

これで 4 対 0 になつた。

「くそつ、1本だ。1本集中！！」

まだ驚きから回復していないだるうに、そこはさすがにキャプテンらしくチームを鼓舞する竹中。さて、今度はディフェンスだ。

「」の2日で教えたのはゾーンディフェンス『みたいな』ものだつ

た。真帆、紗季、ひなたで「ゴール下に△角形をつくり、フリースローラインとセンターラインの中間に愛莉が立つ。そして残った智花はと皿」つと……。

「4番OK」

「湊」

そう竹中のマッチアップだ。一番やつかいな竹中だけは智花が責任もつて抑え込む。そういうティフェンスだ。

無理に抜こうとして竹中がファウルをとられて、攻守交替。さつきとまつたく同じことが繰り返されて、これで 6 対 0 になる。

「うしゃーー やるなアイリーン」

「う」こじやない、愛莉」

白陣に戻る途中で真帆と紗季から賞賛の言葉をもらつた愛莉は今まで見た中で一番いい笑顔だつた。そしてここでタイムアウトを知らせるブザーが鳴つた。もちろん男バス側のタイムアウトだ。それぞの選手がベンチに戻つてくる。

「みんないい感じやで。次はさつき長谷川さんがあつてたよつに男

バスが動いたらフローズンやからな

「了解。にひひ、ナツヒの驚く顔が楽しみだ」

戻ってきたみんなに長谷川さんの作戦の確認をすると、各自頷いてくれて真帆だけは悪戯っ子みたいな笑いをしていた。

「あ、あの長谷川さん。わたし、ちゃんとできてますか？ まだスマーリルフォワードでいらっしゃますか？」

「あ、ああ。よくがんばってるよ。その調子で頼むよ、愛莉」

若干バツが悪そうにした長谷川さんに気付かずに愛莉は嬉しそうな笑顔になつた。愛莉が絶好調な理由、それがこれだつた。

つまり俺たちは、試合前のミーティングでそれぞれのポジションを発表した時に愛莉にスマーリルフォワードと伝えたのだ。そう、愛莉にとつて魅惑の言葉である『スマーリル』が含まれているポジションを。当然、愛莉はポジションの役割なんて知らないのでどんなことをすればいいのか聞いてきた。そこで本当のスマーリルフォワードの仕事を教えずにセンターの仕事を教えた。しかも、無理そつだつたらセンターに返るという忠告付きだつた。背が一番高い人がセンターをやるというのは、今まで何回も言われてきてそれだけは知つていた愛莉はすごい食い付きでスマーリルフォワードの仕事を聞いていたときの働きぶりという訳だつた。

作戦は予想以上の成果を見せたけども、やっぱりウソをついてい

るといつ罪悪感が消えない。試合が終わったらひやんと謝ることを贖罪にして無理矢理納得する。

そうしてタイムアウトも終わり、男バスの攻撃から試合が再開になった。今度はあっさりとゴール下まで切り込まれ、そのままショートを決められ4点差になる。そして、こっちの攻撃になり今まで通り愛莉がゴール下に走る。

「ひやうーー！」

すると、さつきのタイムアウトで指示があったのだ。智花と愛莉にダブルチームでマークがついた。よし、長谷川さんの読み通りだ。なら作戦を次に移行させる。ボールを持つている智花にアイコンタクトを送ると智花も頷いてくれた。

◀ フェーズ2 ▶

「いくよ、真帆」

「よつしゃー、まかせうーー！」

今までと違つて鋭いチエストパスが真帆に通つた。パスを受けるなり、練習通りにショートを打つ真帆。ショートはゴールに吸い込まれるよつて入つた。

「うーしー、あゆむん、やつたぜー」

そう言つて、右手を突きだして喜ぶ真帆に、俺も右手を突きだして答える。教え子が活躍するのを見るのはやっぱり嬉しいものだ。そして再び男バスの攻撃になり、またショートを決められすぐに点差を縮められた。

「マークは三沢につけ。あれはマグレじゃないー！」

こつちの攻撃になるやカマキリから指示がとぶ。確かにマグレじやない、この日の為に必死に練習したんだから。でも、必死に練習したのは1人じゃない。

「紗季ー！」

「はー……よつと」

マークが真帆についてフリーになつた紗季に智花からパスが通り、紗季もきちんとショートを決めた。

「そりゃ、真帆が1発でショート決めたんやから外すわけにはいかんよな、紗季」

まるで「当り前よ」とでも言いたげな感じで自陣に戻つてくる紗季を見てポツリとつぶやく。

智花と愛莉にダブルチームをつけるのだから必然的に真帆か紗季のマークはいなくなる。そのスキをついて智花がバスを出す。もしシビレを切らして2人にマークがつけば、ダブルチームから解放されたどちらかがショートを決める。そつとしてこのまま得点を重ねて行く。

逆に男バス側は、格下だと侮っていた女バスに劣勢なこと、バスの竹中が完全に抑えこまれていて戸惑い、度々ショートを外していった。

そうして前半終了の合図があつた時、女バスは 16 対 10 と6点のリードだった。

12・v/s男バス（前半）（後書き）

ところ」と前半終了です。
引き続き後半も読んでいただけるとうれしいです。

13・v.s男バス（後半）（前書き）

連続投稿です。

ほぼ原作通りの展開なのは勘弁してください。
それでは……どうぞ。

13・vs男バス（後半）

「にゅはは、みんな絶好調じゃん！ いけるいける」

「みんな、やるやん。」のまま男バスなんてやつちまえ

「おう、まかせろー。あたしのシューートがあれば余裕だね」

ハーフタイムになりベンチに戻ってきたみんなを、篁先生と一緒にになって出迎える。みんなも6点差で勝っていることがよほど嬉しい様子で、あたしのシューートがよかつたとか、トモのバスがいいのよとか、愛莉が頑張つてるとか、ワイワイと話していた。

そんな輪の中にいた俺はすっかり忘れてしまっていた。昨日の夜、長谷川さんが前半で10点差は欲しいと言つていたことを……。

俺は気付くべきだった。今、みんなの息が異様に粗いことを……。

俺は気付くべきだった。今、みんなの息が異様に粗いことを……。

そして、後半戦がスタートした。

最初の1分程は前半と同じ展開になつた。真帆、紗季、愛莉の3人で男バスのマークを翻弄し得点を重ねていった。点差は最大8点もついた。

……そして、それはやつてきた。

まずは、愛莉に異変が現れた。オフェンス時にゴール下まで行くのが間に合わなくなつてきたのだ。ロープストから締め出され、愛莉のショートは打てなくなつてしまつことが多くなる。

「長谷川さん…………」

その時になつて、俺はやつと長谷川さんが言つていたもう一つの不安要素を思い出した。

それは『スタミナ切れ』だ。1週間の練習ではどうすることもできない問題だつた。俺がコーチを引き受けたからランニングはやつていたけど、それでも足りない。しかも、みんなは真剣勝負の試合はこれが初めてだらう。そんな試合は練習と比べても消耗具合は段違いなはずだ。いくら普通より短い試合時間だからって、スタミナ切れを起こすのは必然だつた。……くそつ、俺が忘れてなかつたらハーフタイムにあんなに騒いだりせずにみんなを休憩に専念させてあげられたのにつ。

愛莉が激しく肩で息をするようになり、ゴール下で仕事ができなくなるとダブルチームはすぐ解除された。そうして空いたマークは

当然、2つの砲台に使われた。まだ執拗につくマークを振り切つてまで打てる技術がない2人のショートは田に見えて入らなくなつた。マークを振り切ろうと無理に動き回つたせいだろう、ついに紗季も動きが鈍くなる。2人目のスタミナ切れだ。

「ひちらが1点も入れれないうちに、相手は得点を重ね、ついには同点とされる。と、ここで長谷川さんがタイムアウトをとつた。

「智花、フエーズ3だ。なるべくバスで時間を稼ぐんだ。30秒をもううくらいいの感じで」

「でも、それだけじゃ……せめて」

「……智花」

長谷川さんが戻つてきたみんなに指示を出していく。俺も長谷川さんが用意していた酸素ボンベをみんなに配りながら、励ましていく。

「大丈夫か真帆？ まだいけるか？」

「へへ、あたしを誰だと思つてんの。まだまだ楽勝だね」

「そんだけ威勢が良ければまだいけるな」

一田見て空元氣だとわかる真帆の軽口に付き合つて頭をなでてや

ると嬉しそうにするも、すぐに苦悶の表情に戻つてしまつ。

……あと少し頑張つてくれ。それまでの辛抱だ。

〈フローズ3〉

タイム明けからは悲惨な状態だった。完全にバテてしまつた真帆たちは、男バスが4本のショートを決める間に一度もネットを揺らすことができなかつた。

そして、男バスの5本目のショートはリングにはじかれた。そのリバウンドをとつたのは必死に走つた愛莉だつた。

「……とつた」

目に涙を浮かべながらもリバウンドに成功した愛莉は最後の期待を込めてバスを出す。……我らがエース、湊智花に。

後半残り3分。この時間までは智花の個人技は封印し、バスやボール運びに専念すること。試合前に長谷川さんが智花に出した指示がこれだつた。智花しかできる人がいないから仕方ないとは言え、本来は攻撃専門と言つてもいいくらいの勝ち気の強い智花がよくここまで我慢できたもんだ。でも、もういいんだ。ここからは思う存分見せつけてやれ！

愛莉からボールをもらつた智花は、一瞬だけ時計を見て、長谷川さんが頷くのを確認すると、キッと視線を鋭くした。

「ここからは智花の全力を解放。エースの時間だ。

「フェーズ4」

コート内に一陣の風が吹いた。1人、2人とディフェンスをものともせず抜き去り、あつという間にシュート決める。今までアシストに徹していて温存されていた智花のスピードに、疲れの見えてきている男バスはなすすべもなかつた。

あまりのスピードに呆気にとられていたのだろう、再開されてだされたバスは必要以上にゆるぐ、そして長くだされた。今の智花はそれすら見逃さず、すぐさまバスカットし攻めに回る。男バスもさすがに地区大会優勝だけあつて戻りが速い。しかし、本気の智花はそのさらに上を行く。

「……マジかよ」

その光景を目の当たりにし、思わずそう呟いてしまつた。智花のスリーポイントかという位置から放つたシュートはとても高く、とても柔らかい軌道で垂直にネットを揺らした。……おいおい俺ですらあんなところからあんな軌道で打つのは難しいんじゃないかな？智花のショートレンジはどれほどなんだ？

「おい、マーク外れたぞ。俺によじか

そう、智花が攻撃に専念するために竹中のマークが空いてしまうのがこの作戦の弱点。なら、その穴を埋めるのはこの子の仕事だ。

「おー、竹中にかせない」

ひなたが小さな体を精いっぱい広げて竹中の前に立ちはだかる。竹中は予想通り躊躇するそぶりを見せる。

「タケ、いそげ！」

見かねたチームメイトからの声でドリブルでひなたを抜くべく脇を通じ過ぎてしまう竹中。

「あう

「……あ」

抜かれる瞬間、ひなたが倒れ、それを見て竹中が立ち止まる。そしてホイッスルが鳴らされた。竹中のファウルだ。

「ホントにひつかつたよ、あいつ」

もちろん本当にひなたがファウルをされたわけではない。わざと倒れこんでファウルに見せかけただけだ。これは対竹中専用ファウルトラップで、長谷川さんがこの1週間でひなたに教えたのはこの『敵の前で尻もちをつくこと』だけだった。俺は全然気付かなかつたけど、竹中はひなたのことが好きらしく、そこを突いた作戦だった。

こちらのオフェンスになるが、男バス側はエースの失態に動搖していくスキだらけだったので、またもや一陣の風が吹きシューートを決める。これで2点差まで縮めたことになる。

パン

すると大きな音が体育館に響いた。竹中が自分の頬を勢いよく叩いた音だった。

「わりい。」の借りは点をとつて返す

「頼んだぜ、エース」

……くそ、ひなたのファウルトラップはもう使えないか。竹中の目がそう言つていた。

それからは点を取つて取られてのシーソーゲームだった。智花が

ダブルチームをものともせずにシュートを決めれば、竹中がこちらのゾーンもどきのティフェンスを容易く突破し点を取る。点差が縮まらず時間だけが過ぎて行った。そうして我慢が出来なくなつた智花が無茶を始める。オフェンスの手を緩めることなく、竹中のマッチアップもこなそつとしたのだ。つまりオールコートで竹中と1対1を仕掛けたのだ。

それが功を奏し、シーソーゲームが崩れたのは残り1分を切つたあたりだつた。竹中からステイバーを決めた智花がファウルをもらいつつもシュートを決め、バスケットカウントワンスローをもらう。氣力でフリースローを決め、これで逆転に成功する。

女バス 31 対 30 男バス

しかし、智花もここまでだつた。オールコートのせいで体力が底をつき、竹中についていけなくなつたのだ。ただでさえこの試合での智花の負担は、想像を絶するほどに重かつたに違いない。それに加え、最後にあのオールコートをやつたのだから仕方のないことだつた。

智花のマークも外れ、フリー同然になつた竹中は、必死に追いすがるこちらのディフェンスをものともせずシュートを決め、再逆転される。

残り25秒。

最後のチャンス、と疲れ切った智花が攻撃を仕掛けた。智花も激しく肩で息をしているような状態だったが、他のみんなはもつと疲れているのだから智花にまかせるしかない。男バスもこれが最後の攻撃だと確信し、容赦なく智花を止めるべく手を打つてくる。すなわち、智花に対してトリプルチームを仕掛けてきたのだ。いかな智花とて、バテた今の状態ではボールをキープすることが精いっぱいでった。ゴール下はおろかスリーポイントラインより遠くに離された智花はなすすべもなく時間だけが過ぎて行った。

残り5秒。

「俺たちの勝ちだ。……湊！」

「私が負けるなんて……！」

竹中がトリプルチームの真ん中で勝ち誇った顔で智花に告げる。対する智花は最後の抵抗として、マークを外せていないままジャンプしボールを手放した。それはショートと呼べないような軌跡を描き、宙を舞つて……。

13・vs男バス（後半）（後書き）

途中で終わつてしまつた感じですが原作を読んでる方はここで終わる意味をわかつてくれるでしょつか？
感想をお待ちしております。

14・決着、そして……（前書き）

原作9巻を読んでいたら更新が遅くなってしまった。
いやはや原作を読んでいても、ここに恭が……とか考へてしまいま
すね（笑）

まあ、あそこまで行くとなるとこつまでかかるかわかりませんが…
…。

とりあえず男バス編最後をお楽しみください。
それでは……どうぞ。

14・決着、そして……

—— 交換日記（ひこうじ） ——

まほまほ「できたーー！」がきょーからあたしたちの立派なやつだ

紗季 「読みづらいからちやんと交換しや」

湊 智花「この度は」のよつな場所にお誘いいただきあつがといひござこめす

紗季 「智かやん硬いって。こんなの普段と回りよつて書かばい
いよ」

まほまほ「アイリーン、ヒナもなんかかけー」

ひなた 「ひなもいるよー」

紗季 「その返しは変じやない？ それと愛莉はもう少し待つて
あげな。今、電話でやり方教えて
ねとにかくだから」

まほまほ「なんだアイリーン、バスケだけじゃなくてキカイもよわ
いのか」

紗季 「真帆、いい気になるなよ。今日の試合でやつちのチーム
が勝つたのは智ちゃんがいた

からりで、別に真帆の手柄じゃないからな

まほまほ「そんなことねーよ。ショートもきめたもんね。ピンチのときば、あたしにくれたらぜつてーきめてやるからまかせりー。」

湊 智花「ふふ、わかったわ。じゃあ私がピンチの時は絶対真帆にバスするからお願ひね」

あいり 「かけてますか?」

紗季 「いれで全員そろったね。まあこれからこの5人で仲良くやつてこましょ。みんなよろしくね

まほまほ「おー! つて、わざがしきんな

湊 智花「おー! うらやましいへ

あいり 「お、おー! ……これでいいのかな?」

まほまほ「ヒナ、ヒナもおーつていれー やればなんかたのしくなるから」

ひなた 「おー? おー。おー。」

残り25秒

「私が負けるなんて…………！」

智花が放ったのはショートだと誰もが思っていた。俺はもちろん、長谷川さんや男バスのやつらでさえもそう思っていたはずだ。なぜならボールを放った時の智花はしつかりとゴールを見据えていたのだから。しかもトリプルチームのせいだ味方の位置なんてろくにつかめない様な状態なら、なおさらショートしか選択肢がない。

「そんなの些細なことつ。だつて今は、1人なんかじゃない！――」

そう言って智花は、やりきった表情をして自分の放ったボールを見ていた。智花が放ったボールはショートと呼ぶにはおかしい軌跡を描いていた。

それは当然だらう、それはショートではなかつたのだから。

それはブロックをかわすためにショートに見せかけたバスだつたのだから。

智花にはわかつたいたのだ。自分がピンチの時は助けてくれる人がいることを。

その子は必ずここにいることを。なぜならその子はそこからしかシートを決めることができないのだから。

距離、3m。角度、リングから右に45度。その位置に智花は何も確認せずにバスを出したのだった。

絶対ここにあの子がいると信じて……。

「ハアハア、っしゃーまかせろーー！」

疲れ切った体を無理やり動かし、バスが届くと同時にその場所にたどり着く。そしてラストシュートが 真帆の手から放たれた。ここまで来る時には足をもつれさせたりと、あんなに大変そうにしていたのにバスを受け取り、シュートを打つ時には疲れを感じさせない練習と全く同じフォームになっていた。まるで、5人……いや、俺や長谷川さん、笠先生を含めて8人の祈りを力に変えたみたいに。まるで、俺との練習を体が覚えていたみたいに……。

ボールは往生際悪くリングで2回跳ねた後、ネットを揺らした。そして試合終了の笛が響きわたったのだった。

女バス 33 対 32 男バス

しばらくの間体育館は静寂に包まれた。誰もが状況を把握するのに時間を要したためだ。

「やつったーーーーー！」

「真帆ーーーーー！」

「ふう、勝ったのね」

「や、やつたーーーーー！」

「おー。ひなたちのかちーーーー！」

智花、紗季、愛莉、ひなたと続いて、喜びをそれぞれコート上で抱き合つたりしながら囁みしめていく。俺はと言うと、もちろん嬉しいで今にも真帆たちのところに、つて一緒に喜びを分かち合いたいと思っていたけど、ふと男バスが気になつてそちらに目を向けてみた。すると、「ふう、やれやれ」といつた感じで呆れ気味の竹中と目が合つた。目が合つたのに気付くとプレイとそっぽを向いてベンチの方へ行つてしまつた。……どうだ、すこかつたやろ真帆たちは。なんて竹中に届くはずもないのに心中でつぶやいていたので『それ』が近づいてくるのに気付かなかつた。

「あゆむーん…… やつたよー…….」

「うわー.」

興奮冷めやらぬ真帆が抱きついてきたのだった。

「あたしす」かつたよねー！ あゆむんのおかげだよー.」

腕を首にまわしたままで、顔を「から」に向けた状態で真帆がそう言つてくる。そんな状態なので必然的に真帆の顔がものすく近くで顔が赤くなつてしまつ。

「めひやめひやカツ「良かつたで。真帆のガンバリの成果やな」

赤くなる顔はとりあえずほつとおこで、そう答えつつ真帆の頭をなでる。すると真帆は、ヒヤワコのよつな眩しこくらの笑顔を見せてくれた。

「おほん、そしてそのまま2人はキスでもするのかしら?」

紗季が突然話しかけてきて、反射的にお互い体を離す。

「そそそ、そんなことあるわけないだろ。」「これはあれだ。あたしたちの勝利をあゆむんといっしょにだな……」

顔を真っ赤にした真帆が紗季に弁解？をしていた。そういう俺は今更さっきまでの体勢を思い出し、恥ずかしさでたまらなくなつていたので弁解すらできずにいた。

「はいはい、わかつたから。それはそうと最後の整列があるから行くわよ、真帆」

まだあれこれと紗季に言つてゐる真帆を連れて2人でセンターラインに向かっていく。後ろの長谷川さんと篁先生がやけにニヤニヤしているのは無視を決め込む。

そして、最後に一礼をして女バスの勝利で試合は終わったのだった。

「 「 「 「 「 「 かんぱーこー」 」 」 」 」 」 」

試合が終わってから祝勝会を開け、「う」と「う」となり、そのまま長谷川さん家に集合することになった。篠先生だけはまだ仕事が残つているということで、後から参加することになった。祝勝会は七夕さんもかなり乗り気で準備してくれ、これを話した母さんも駆けつけこの前の再現のようになってしまった。そして、飾り付けもないうなさやかな祝勝会が始まった。料理だけは相変わらず七夕さんがホテル顔負けのものを作ってくれているのです」「く豪華だった。

「それにしても、あたしの最後のビザーブーターは天才的だったな

乾杯を終え、みんな席に着いたところで真帆が腕だけでシュートのフリをしてしゃべりだした。

「それを言つならブザーブーターやな」

なんとも真帆らしい間違いをしていたのでしつかりとシッハリを入れておく。ついでに不思議に思つていてことを聞いておこう。

「ところでなんで真帆は最後の時、智花がバスをくれるつてわかつたん？ 智花はノールックバスやつたし、わかつて全力疾走しないと間に合わへんかったもんな？」

「なんでもって言われてもなー。あそこは絶対あたしにバスがくるってわかつてたとしか言えないと？」首をかしげてしまつ真帆は、みんなにも聞いてみた。

「確かにあそこは真帆にバスだと思つたわね」

「私も真帆ちゃんにバスだつて思つてた」

「おー、ひなもわかつた」

「なんと、みんな真帆にバスするのがわかつてたと言い始める。最後に智花の方に視線を向けると、

「シユートはトリップルチームのせいだとしても無理だつたし、なら真帆にバスするのが当然かなつて。だからあそこへバスをだしたし、確認する必要もなかつたかな」

「まだなんとなく腑に落ちないけども、これが真帆たちの絆の強さなんだと思つ」として納得する。

「は、長谷川さん、私はちゃんとスマーリフオーワードできました

か？」

愛莉がオズオズとしながら長谷川さんに今日の仕事ぶりを聞いてきた。それを聞いた長谷川さんは俺の方に視線を向け、俺も頷き返す。そしておもむろに2人して席を立ち、愛莉のそばにいく。突然の行動に愛莉をはじめ、他のみんなも呆気にとられていた。愛莉の目の前まで行くと最後に2人で頷き合い、そして……。

「「「めんなさい」」

2人同時に土下座した。

いきなり男2人に土下座され、アタフタする愛莉に本当のことを話していく。話していくにつれ、愛莉の目に涙がたまっていくのがわかつた。

「やっぱり私にはヤ、センターしか、デカ女専用のポジションしかできないんだー！」

いつかの時みたいに泣きじゃくる愛莉を長谷川さんがなだめにかかる。

「騙したことは悪かった。ごめん。でも背の高さは愛莉の素晴らしい魅力の一つなんだ。俺はわかってるから。愛莉が外見だけじゃな

く内面も纖細で可愛い女の子なんだって」

「は……長谷川さん……」

それを聞き、愛莉が頬を赤く染め、もじもじじだした。

「うー、これは急展開だわ」

「おにいちゃん、ひなはー？」

長谷川さんが愛莉を口説き文句ストレスで慰めているのを、俺はまだ土下座しがら聞いていた。なぜなら俺はその時真帆に「ウソツキ禁止ー」といわれながらボカボカと殴られている最中だったからだ。俺が殴られていることに紗季が気付いてくれ、真帆を止めてくれた。すると、ちょいちょい匂いをさせる土鍋を持って七夕さんがやってきた。

「「やかねー。はー、お鍋できたわよー」

「ねーーー。」

真帆はあつさつと鍋の方へ興味をうつしてくれたので、俺もこれ幸いと便乗した。ちらりと長谷川さんの方を確認すると、頬を赤く染めてもじもじしている愛莉と、ほっぺたをブクーとふくらませて不機嫌顔の智花を相手に四苦八苦しているところだった。

お鍋の登場で、雰囲気がよくなつたからみんなでワイワイ騒ぎながら進んでいった。締めの雑炊まで食べ、一息ついていたところで真帆が俺と長谷川さんを見ながら口を開いた。

「ねーねー、明日からまたみんな練習するの？」

「それなんだけど俺はコーチを辞めよ」と囁く

「…………」

突然の長谷川さんの告白に全員が驚きを隠せなかつた。

「すばる君も一緒に守つた場所なんだから最後まで責任とつてコーチしてよー。」

「私がからもお願ひします。まだまだ昴さんからこう教わりたいです」

みんなが長谷川さんの引きとめよつと説得を始める。ナビ、長谷川さんの表情は硬いままだつた。

「やつぱりみんなには俺なんかより、ちゃんととしたコーチから教えてもらつた方がいいと思つ。それに俺も、なんとなくやりたいことが見えてきた気がするんだ。だから…………」「めん

やう言つて謝る長谷川さんこみんなは掛ける言葉を見つけられな
いでいた。

「あゆむんは？！ まさか、あゆむんまで辞めるとかいわなによ
？！」

今まで黙つて聞いていた俺に真帆がすゞい剣幕で聞いてきた。俺
はしばりへ考えた後、出した答えを伝えるべくちくちくと口を開い
た……。

そうして話し終わると、ちゅうビ箆先生がやつてきたのでこの前
と同じようにみんなを送つていつでもらつた。それにしても、箆先
生がリビングに入ってきた時に背筋が凍るような感じがしたのは気
のせいだったかな？

その後、長谷川さんが腹ごなしに10コ1をしないかと言つてくれ
たので、今は喜んで相手をさせてもらつていたところだ。しかし

当然ながら、俺では到底長谷川さんはかなわないで軽くあしらわれているような状態だ。

「ところどきのことだけど、歩までコーチを辞めなくてよかつたんじゃないのか？」

1001の片手間だらう、長谷川さんがそんなことを聞いてきた。そう、俺はコーチの話を断つた。なぜなら……。

「長谷川さんが言つてた通り、真帆たちはちゃんとした人から教えてもらつた方がいいですよ。……それにあんな熱い試合を見せられたら、やつぱりやりたくなっちゃいますよ、バスケ」

「そつか

そう言つて笑いかけてくる長谷川さんに、俺は苦笑で返す。

「まあもつとも、やる場所が問題なんですね。これで男バスには入りづらくなっちゃいましたし、他のチームかなんかを探さないと、です」

「はは、確かに男バスには入りづらいわな

2人で笑いあい、もうしばらく1001を続けて俺も帰ることし

た。結局10回では長谷川さんから一本もこれずに終わった。だから、プレイヤーとして長谷川さんを超えることを目標として頑張つていこうと決めた。智花は目標というよりライバルって感じだからな。

途中、ふと上を見上げるときれいな満月がでていた。いつかの日みたいに手を握り締め、がんばるぞと気合いをいれてみるのだった。

その夜、隣の家から悲鳴が聞こえ続けていたことを、俺は知らなかつた……。

14・決着、そして……（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
感想を頂けたらうれしいです。

15・~~サヨウ~~（前書き）

今回から球技大会編の始まりです。
でも、今回はラブ分多めの展開になつております。
真帆がちゃんととかわいく描けていればいんすけどね
それでは……どうれ。

（ ） 交換日記（ ）

まほまほ「だいーかに「一ノ山」だつだこをへせんのやくせんかい
あきなじめます」

紗季 「強奪つて……あんた」

まほまほ「だいー、やつぱ一ノ山あゆむんたけじこじゅや
やじこじゅじこじゅじこじゅじこじゅじこじゅじこじゅじこじゅ

んー」

あいり 「私も長谷川さんや歩廊で一ノ山続けてもういたい」

ひなた 「おー、ひなもおこひやんたちがこー」

湊 智花「わ、私も長谷川さんと一緒に居たい」

紗季 「なんかトモのは一ノ山アンスが違うよつないわ。じゃあみん

なで2人をどい説得するか考へましょ」

まほまほ「だから、やこしょからやくせんかいがだつてこつてんじ
やん。でも、やつぱりこじゅこじゅじかけしかなこつしょ。とこつりとドア

イリーン、ふたり

にむねをもませるんだー」

あいり 「や、そんなの無理だよ!」
「……」

まほまほ 「じゃあやぐ」、ひんこゅ「つだいひょうのもつかんのむねで！」

湊 智花 「ふえ…… わ、私？ でも私のじゃ2人とも喜んでくれないんじや……」

紗季 「トモ、じうせ[冗談なんだからそんな真剣に悩まなくても大丈夫よ。ていうか、胸の大きさならトモよりあんたの方が小さいんだから貧乳代表はあんたよ、真帆」

まほまほ 「あれはあゆむんたちにみてもうつてないからノーカンだ。とこり」とであたしはもつかんにまけてない」

ひなた 「おー？ ひなのでする？ ひななら2番」

紗季 「ひな、そんなこと簡単に言つちゃダメって前にも言われたでしょ。もう、こいじや埒があかないから畠口校長に説しましょ」

劇的な勝利を収めた次の日、登校してきた俺は教室のドアの前で固まっていた。

「気まぐれ……」

「一チを辞めても当然、席は真帆と紗季の間なのは変わらはずもなく、どんな顔をしてみんなに会えればいいのかわからない。そんなことを考えて、かれこれ5分はドアの前で悩んでいた。

「まあ「一チを辞めても友達まで辞めた訳やないから今までじょりに行ひやー。」

ながば自分に無理やり言い聞かせて教室に突入する。

「 それじゃあ かな？」

「 お、おせよひー」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

ヒンヒンとなにやら固まつて話していた真帆たちの後ろから挨拶

をしただけで、みんなに飛び上がるなどいやなこかと感づへりこ驚かれてしまった。

「歩、お、おせよ。今日せよと遅かったわね」

「ちよ、ちよとヤボ用でね……」

最初に挨拶を返してくれた紗季とお互ににぎりかなを残しつつも話してみると、隣の真帆から落ち込んでくる」とがありありとわかる声で上田づかいで質問が来た。

「ねえ、あやせん。やつぱりコーチ辞めやつの？」

「……。昨日のみんなの試合を見て、やつぱり自分でバスケットをしたいって思つやつたし、それで中途半端になつてしまつなんら辞めてしまつたほうがいいとちやうんかなつて思つから……無理やわ」

真帆の上田づかに攻撃に思いのほか動搖してしまったけど、正直絶対聞かれるだらうと思つていてことだつたので考えていた通りに答えることができた。

「……ちよ。これでもダメか」

すると、後の紗季がなにやらブツブツ言っていたけども、聞こえるかどうかといったすじい小声だったので俺にはなんて言ったのかよくわからなかつた。

「ナウハ、智花にじょと聞きたいんやけど、この辺で俺でも入れそつなクラブって知らんかな？」

「え？ うーんと。……ごめんなさい。私じゃわからんこよ。竹中君ならくわしいんじやないかな？」

智花からアドバイスをもらひお礼を言ひて、早速竹中に聞かれて、ちよつとすると、ちよつて笠原先生が入ってきたので休み時間に聞きた行くことになつた。

授業が終わるとすぐに俺はさつきのことを聞くべく竹中のどこの行へく。

「竹中、ちよつと聞きたいんやけどこの辺で俺にも入れそつなクラブって知らへん？」

「はあ？ む前、女バスのコーチはどじつしたんだよ？」

当然の質問をしてくる竹中で、コーチを辞めた経緯を簡単に話して説明する。

「ふーん、まあ別にどうでもいいにさび。でも、それならクラブじゃなくて男バスに入れよ」

確かに竹中にはあんまり関係ないことだけ言い方がなんかムカつく。なんてことを思つてこると意外なことを言われてしまつて驚いてしまう。

「え？ 僕が入つてもいいん？」

「確かに昨日の試合に負けたのは悔しいけど、それだからって別にお前に恨みを持つ様なやつはいねーよ。……むしろ俺はたつた2週間足らずで真帆たちをあそこまでに仕上げたことこすげーと思うよ。……ま、まあ本気で考へてるなら俺から先生に言つといてやるけど？」

途中声が小さくなりよく聞こえなかつたけど、最後の竹中の申し出はありがたかったので打診をお願いして、ちょうどチャイムが鳴り先生が入ってきたので席に戻ることにした。

あたしは休み時間になるなりナッシヒのところへ行くあゆむんが十分離れたことを確認してから、もつかんを庇るために後ろの席に話しかける。

「わっかん！ なにアドバイスしてるんだよー。あゆむん、ナッシヒのところに行っちゃたじやんか」

「「」、「」めぐなさい。だつて突然だつたから、つこ……」

ナッシヒのところでなにを話しているかす」「こ気になるナビ、リリからじや微妙に距離があつて聞き取れない。

「そんなにトモを責めないの。元はと言えば真帆が一発で説得できてたらよかつたんだし」

「う、うつせいいなー。ああこのはビナの方が得意なのになんであたしなんだよ」

そう、朝の上田づかい作戦はもともとビナが試す作戦だったのに、紗季がいきなりあたしにやれとか言い出して結局あたしがやる羽田になつたのだった。

「だつて、歩にはひなの無垢なる魔性は効いても一時的だらへ」。

それにもし、ずっと効くよつな」ことになつたらまあこじやない、
……ねえ？」

「な、なんでそこであたしを見んだよ。べ、べつにあたしには関係ねーし」

妙に一矢二矢してこる紗季を無視して、次の作戦の相談を始める。

「じゃあれ、次はどんなので行く？　いいアイデアない？」

早く説得しないとあぬむんが本氣でクラブに入つてしまつといつ焦りから、つい急がすよつな口調になつてしまつ。

「おー？　ならひなのコトカラタックでノックアウト？」

「それじゃあ脅迫になつちやうよ」

ヒナがいかにもヒナらしい提案を出すけど、もっかんに却下されてしまつ。あたしはそれもいいかなつて思つたんだけどな……。

「じゃあもつかん、なんかない？」

「つーんと。……やつぱりバスケで勝負、……とか？」

もつかんに聞くと、あたしも考えたバスケ勝負を提案してきた。
けど、それは朝に紗季と話してたときに出でられたんだよね。

「バスケ勝負だと歩は乗つてこなにんじやないかしら。トモ以外に歩に勝てるのはこなにんじ、トモは歩よつづまこんだから歩がコーチをやりたいと思つてない限り難しこと思つわね」

「こんなふうにね。もつかんが「そんなことないよ。歩は上手だよ」なんて言つてゐけど、ありやあケンソンだな。

「じゃあ次、アイリーン」

「え、えーと。プレゼントをあげるにこなのせうかな?」

「なんとこなにこれもアイリーン、うらじこマイティアだな。……プレゼントかーなにがいいかなー?」

「……まじよ、あれなら……でも恥ずかしいな……つまくできるかもわからんないし……でも喜んでくれるかな。

「ううしたのよ真帆。一人百面相して口口口顔えて、おかしくなつた?」

「ふつふー。あたし思つてこなかつたもんね。そりと決まれば準備、

side out

そして放課後になり、俺は帰るために昇降口までやつてきていた。靴箱を開けると、俺の靴の上にちよこんと小さな手紙が乗せてあつた。

「なんや、これ？」

まさかラブレターか？！ なんて甘い幻想を抱くこともせず、差出人を見るために裏返してみる。するとそこには、いかにも急いで書きましたという感じで『三沢 真帆』と書かれていた。

「真帆から？ なんやろ？」

差出人は手紙なんて書くようなイメージが全くない真帆からだつた。真帆からとこうことで、中身はコーチを続けてほしいとか、そういうのだつてと思って手紙を読んでみると、書かれていた内容はもつと簡単なものだつた。

『今日の18時に教室に来てください』

三沢真帆より

「ここにきてようやく、まさかホントに告白なのか、という考えが頭をよぎるが努めて考えないようにした。今それを考えたら、どんな顔をして言えばいいのかわからなくなるし、なんか取り乱してしまいそうになるのが目に見えている。

現在時刻、16：47。

手紙の時間まで約1時間もあるので、時間をつぶすために歩きだす。無意識に体育館の方へ行こうとする自分に気付き、苦笑を浮かべてこのやたら広い学校を探検するべく歩く向きを変えるのだった。

そして約束の18時の5分前。我らが6年C組の教室に、半分開きっぱなしになつていた扉から入る。すると、いつもの窓際の席に腰かけて片肘をついて、哀愁漂う感じで窓の外を見ている真帆の姿があつた。もしかしたら他のみんなもいるかなと思っていたけど、

それらしい姿は見当たらなかつた。

窓際に座つてゐるおかげで、真帆のサラサラした髪のツインテールが夕陽の光をあびてキラキラと輝いていた。普段見せることない落ち着いた雰囲気と相まつて、一瞬ドキッとしてしまつ。

「あゆむん！」

俺が来たことに気が付いて、真帆はパタパタと駆け寄つてくる。俺も真帆の近くに行くために教室を進んでいたので、ちょうど真ん中の教卓の前で向き合つ形になつた。

「で、来たけど、どうしたん？」

「え、えとね……。用事つていつのせ……」

話せる距離に近づいたので呼び出しの理由を訊ねると、真帆はやう言つたきり俯いてしまつた。いつも元気一杯で、はつきりとしゃべる真帆にしては珍しい反応だつた。両手を後ろで組んで妙にモジモジしているし、俯いているせいで顔は見えないけど耳まで真っ赤に見えるのは夕日に照らされているから、だけではないよつだ。

もしかして、もしかするのか……なんて考えが脳裏をよぎり、俺まで緊張してしまつ。

「……やつぱり、あゆむんにコーチを続けてほしいうてお願いしたくて」

「……なんや、やつぱりそれか。何回も誘ってくれるのは嬉しいし、別に「一チするのが嫌になつた訳じゃないけど、今はまだ返事はかわらんよ?」

体感的には1分にも感じた5秒ほどの沈黙の後に俯いたままの真帆が紡いだ言葉は、甘い幻想通りではもちろんなく、やはりというべき「一チ復帰へのお願いだつた。現状、選手としてがんばつてみたい気持ちが強いので、心苦しく感じながらも断ることを告げる。すると、弾かれたように顔をあげた真帆が放つた次の言葉は、俺の思考回路をショートさせるのに十分だった。

「あたしの……女の子にとつて大切なものをあげるつて言つても?」

「…………く?」

なにを言われたか理解するのに一瞬では足りなかつた。音としては脳に届いているけど意味までは認識できていない、そんな感じになつてしまつ。

「……た、大切なものつて?」

ようやく理解が追いついてきたところで新たな疑問がでてくる。それは『大切な物』がなにを指すのか、ということだ。この雰囲気で言つ『大切な物』といえば、……まさかキ。

「あ、あたしも初めて……だし、うまくで、できるか心配だつたけど……うう。そ、それともあたしのじや……いや？」

俺の質問には若干的外れな答えたけど、俺の混乱に拍車をかけるには十分だつた。真帆は、もうこれ以上赤くならないんじやないかといふほど顔を赤くし、最後の方ではうるんだ瞳で見上げてくるし、ほのかに甘い匂いもしてきたので、俺の頭はパニック状態だ。

「お、俺も初めてやからお、お互いまやし。俺は真帆がいいなら、とにかく、真帆がいい、といふか……」

自分でもなにを言つていいのかわからないほど、俺はゆでだこ状態になつてしまつていた。2人でオロオロとしている、真帆がついに俺を見つめる瞳に決意を灯して口を開いた。

「じゃあ、受け取つて……あたしの初めての……手作りチョコ……」

「……………チヨコ?」

そうして真帆が俺の田の前に差し出したのは、手のひらサイズのかわいくラッピングされた袋だった。ポカーンと口を開けて間抜けな顔をしている俺に気付かず、真帆は一人で話続ける。

「お菓子なんて作ったの初めてだし、やんばるに教えてもらひながらだけど一人で作ったから、うまくできないかもだけど……。でも、あたしの好きな味にしたし、おいしいはずだから……もうって……！」

「えっと、女の子にとつて大切なもつて…………これ?」

やつと話せるくらいまで回復した俺は、思わず真帆に聞き返していた。

「ん? そうだよ。だって、お菓子は女の子の必須アイテムだもん」

なにを言つてるの？　的に首を傾げる真帆を見て、俺は一人で盛大に勘違いしていたことにやっと気付いた。膝から崩れ落ちそうになるのをなんとかこらえるけどもさすがまでは違つ意味で、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になってしまつ。

「ちよ…………そんなに押さないでよつ」

ドタタタタ

ドアの方からなにかが倒れた音がして振り返つてみると、他の女バスの面々が折り重なつた状態で倒れていた。

「ハハハ……お邪魔しまーす。で、受け取るの？　受け取らないの？」

1番下の紗季が苦笑しながらも、なにかつっこまれる前にと俺に真帆への返答を迫つてくる。すると、上の他のメンバーも口々にしやべり始めた。

「そうだよ。私たちは歩道にもローチを続けてもらいたいって思つてるんだよ?」

「おー。あゆむー、チヨコはだいじー」

「わ、わたしも長谷川さんと一緒にコーチを続けてくれたらうれしいな」

みんなの声を聞き、改めて真帆の方に視線を戻す。

「あ、それで、もううてくれる?」

改めて心配そうに聞いてくる真帆に、俺はこいつ笑って今決めたことを告げる。

「ああ、もううるさい。ありがとう」

「……じゃあ……」

俺が受け取ることを伝えると、真帆はパターと今までの疊りていた顔を一変させて、いつもの元気な明るい笑顔になった。

「うーーーまでみんなに思つてもらつてるなら、やらんなんて言へんよ。でも、選手としてもがんばつてみたい気持ちは変わらんから、それでもいいかな?」

「それでもいいよー。あつたりまえじゃん!」

「じゅあじゅあじゅあ、これからもよろしくお願ひます」

真帆からチラ口の入った袋を受け取りつつ、「一チを続けさせてもらつことを一礼してお願いした。

「じゅあじゅあくつたみたいだし、私たちもわいわいと帰つましょうか?」

「まあ、待ち一や」

立ち上がった紗季が智花たちを連れて帰ろうとするのを見逃すほど、今の俺はお人好しではない。帰るのを阻止するために紗季の肩をしつかり掴む。

「じゅあじゅあ、ゆくよくなつてもらつか」

「ハハハ、やつぱり?」

低くドスのきいた声を出して迫る俺に、紗季は引きつった顔をした。見ると他の2人も苦笑いしていて、ひなただけはいつも通りのほほんとした顔だった。

入口付近でそんなことをやっている俺たちから離れて、真帆はまだ頬をちょっと赤く染めて教卓の前に立っていた。

「今日はチヨコだったけどいいつか、きつと……」

真帆がポツリとつぶやいた一言は誰にも聞かれることもなく、入口付近の喧騒にまぎれたのだった。

その日の夜、園田家では激辛チヨコとこうせにも不思議なものを食べた俺の絶叫が響き渡ったのだった。

読んでいただきありがとうございました。

早々にコーチに復帰した歩ですけど、男バスにも入部をせよつかなとも考えています。

そこで、選手として頑張る歩を描くためにバスケ初心者の作者にも参考になるようなマンガや小説を教えてもらえないでしょうか？友達からは、言わざもがなの『スラムダンク』、それと『あひるの空』なんかがいいんじゃないかと進められています。

他にも参考にできそうなオススメがあれば教えてもらえたるにありがたいです。

では、感想ともどもお待ちしております。

16・とある休日の週刊方（前編）（前書き）

口うきゅーふのMSR買つてしましました……。

当分更新が遅れてたらすいません……。

まだ合宿にもいかない展開ですけど、本編ではスルーされたGW

中の日常を書いてみました。

それでは……どうぞ。

（） 交換日記（ひかわ）（）

紗季 「歩が「一チ続けてくれる気になつてくれてよかつたわね、
真帆」

まほまほ「ほんと、めちゃくちゃはずかしかつたんだからな」

あいり 「みてただけなのにあたしもすゞぐべドキドキしちゃった」

紗季 「とこりあんた、あのチヨン、自分好みの味にしたって
言つてたけ
ど何味にしたのよ？」

まほまほ「そりやあむちうるー、とうがうしたつぱりのげきからチヨ
ンだつてば」

ひなた 「おー？ チヨンのに辛い？」

湊 智花「ハハハ、…………大丈夫かな、歩君」

真帆からのありがたい贈り物をもらつてから数日が経ち、今日は5月3日すなわちゴールデンウィーク初日である。

俺は朝日と言うには若干高くなりすぎている太陽の光をあびて目を覚ました。半分覚醒した頭で枕元の時計を見てみると10:52を指していた。連休初日とはいえいつもに比べるとかなりの寝坊だ。

「ふあああ。起きるかー」

「メール? 誰からやろ」

まだ重い瞼をこすりながら机の上に置いてある携帯に手を向けるとメール受信のランプが光っていた。

なにげなく見たメールの内容は、昼からの予定を決定づけるものだつた。

「ハ、うーん」

7時にセッショーンの用意まし時計の音で目を覚ます。鹿威しの、カコノ、カコノと一定のリズムで響く音以外聞こえるものはない静寂な朝の庭にて、深呼吸を一つ。そうすることでスッキリと眠気を払うことができる、いつもの日課をこなす。

「おはよハ、智花。今日も朝から練習かしら、なら、『飯はたくさん食べるわね』

「おはよハ、お母さん。うん、今からランニングにいってきます。『飯は帰ってきてから食べるから、たくさんでお願いね』

途中でお母さんに会つて、顔を洗つてジャージに着替え、朝練のランニングをやるために走り出す。

男バスとの試合に勝つたあの日から、私は朝に長谷川さんのお家にお邪魔するのを辞めていた。もちろん、すごく行きたいとは思っているのだけれども、コーチに教えを請うという大義名分をなくした私なんかが行つてもいいのかどうかわからない。けれどみんなと

話した結果、明後日からまた昂さんのお家に朝からお邪魔することを決めていた。……そつ、コーチ復帰をお願いするのに賭けを持ちかけるために。

ショート連続50本成功。

それが昂さんに持ちかける賭けの内容だった。正直、今の私じゃ達成できるかどうか怪しい、という内容だったのだけれど、真帆も頑張つて（？）歩君を説得したんだから私が諦めるわけにはいかないよね。なにより、私自身が昂さんにコーチを続けてもらいたいと強く思つていてるのだから諦めるつもりもないんだけど……。何田かかつても達成をせぬつもりでいる。

「でも、なるべく早く成功しなくちゃ、だからこつぱに練習しなくちゃいけないよね」

やうひゆうのとは裏腹に今口の午前中はお稽古の予定が入つやつてるから、あんまり練習できないんだよね。お父さんの茶道と、お母さんの舞踊があるから練習は頑からになつちやうな。

「智花ー、帰つてきたなら早く飯食べやになさい。お父さんが呼んでたわよ

「はーー」

帰つてくんなつお母さんからやうされ、朝食を素早く済まして

（でも、しつかりと）飯はおかわりした）お父さんの待つ茶室へと急ぐ。それが終わると、次はお母さんの日本舞踊の稽古が始まった。

だから、私が『それ』に気付いたのはお母さんの稽古が終わって一息ついていた時だった。

side 紗季

私の朝は結構早い。たとえ休みの日でも6時には起きる。いえ、休みの日だからこそ6時に起きないと間に合わない。店の、我が家『なが塚』の仕込みはもっぱら私とお父さんでやつてるのはやつなものだもん。

「紗季ー、裏行つてえびといか、5つ持つてきとこてくれ

「わかつたわ」

私はそれまでやつていた山芋の仕込みを中断させて、早速お父さんから頼まれたものを取りに行く。お父さんは相変わらずの手際の良さで次々と仕込みを終わらせていく。

お母さんはと言えばこの時間はひたすらキヤベツの千切りをやってくる。普段は自分の足に躓いて転んじゃうような人だけど、キヤ

ベツの千切りだけはめちゃくちゃ上手なのよね。いつも二斤二斤と笑ってるお母さんが無表情に黙々とキャベツの千切りをやってるのってかなり不気味なんだけどね。

「あーひへー。これじゃキャラベツまだ足りないわね。とつてこなこと」

お母さんがそう言って私の後ろにある冷蔵庫に行こうとする。私は経験からくる直感でサッと体を避ける。

「ふにゃん！」

間髪いれず、お母さんが転んだ。

「四季」

「おゆで……」

お父さんと2人同時にため息をつく。いつものこととはいえ、これをお客さんの前でもやるのだからほんと勘弁してほしい。

「あいたたたた……」

起き上がりつつ、鼻を押えているお母さんを見て私はいつも想つ。このドジっぷりが遺伝しなくてよかつた、と。

『ロコロコーン』

そんないつもやり取りを交えつつ、仕込みも順調に終わつたころ、私の携帯からメールの受信を知らせる着信がなつた。

「メール？ 誰からかしら？」

side ひなた

ロンロン

「姉様？ 起きてください。もう10時ですよー」

「んー？」

なんだか外がさわがしい。でも、ひなはまだねむいのでおやすみなさい。

「姉様？……もひ、入りますからね？」

ガチャビーナスアガヒラハ音がして人が入ってくるかんじがした。

「もひ、やつぱりまだ寝てらしたんですね。そろそろ起きてください」

「サニヤヒタタケレルのとこつしょ」、近くからかげの声がする。

「ふー、ひなはまだねむいのです。なのでまだ起きないです」

「またそんな」と叫んで、姉もひな。あまり私を困らせないでください

れー

かげがあきらめずにひなのことをゆすつけてる。……まだねむいけど、これはこれでできもちいいかも。なんて思つていぬと、ひながいたいさんがブーブーと音をたててふるえはじめた。

「せ、メールきてますよ。起きて、見ないと」

「ふー、かげ、よんで」

ふとんからでるのがいやだから、かげによんでもうひいといふ。

「もう、しかたないです。……えーと、読みますよ。」

side 愛莉

「はーい、みんな。」はんですよー」

一通り掃除の終わった水槽にみんな（私の飼っている熱帯魚）を移して餌をあげる。我先にとあげた餌に飛びつくみんなを見て、思わず笑ってしまう。

私の休日は、まずこの子たちの水槽の掃除から始まることが多い。今日は連休初日といつことでいつもよりも丁寧に掃除をしてあげたので、ピカピカなお家になつてみんな嬉しそうでよかつた。

「ジムが使えるのは夕方くらいだから、ひとまずは走つて」よ

「つかな……」

「」の前の試合でも私が一番最初にバテちゃったから、もつと体力つけなや。早速ジャージに着替え玄関に向かう。

「あ、愛莉？ どうかでかけるのか？」

「あ、お兄ちゃんっ？！」

玄関で靴を履いていると後ろからお兄ちゃんに話しかけられた。思わず体がビクッてなってしまつ。

「い、行つてきます

まだ靴もちゃんと履けてないのに玄関を飛び出す。ドアを後ろ手で乱暴に閉めた私は、ちょっと走つてすぐ立ち止つた。

「ううう。また逃げちゃつた。私つて嫌な子だな……

家の方へ振り返り、あんな態度を見せてしまつて氣にしているだらうお兄ちゃんのことを考えたら、どうして私つてこいつなんだろつと自分が嫌になつてしまつ。

昔みたいに仲良くしたいんだけど……、と落ち込んでくるとポケットに入れている携帯が鳴ったので、とりあえず見てみる。

「メール? 真帆ちゃんから?」

side 真帆

「これで、ラストひとつ」

こつもの朝のショート練習200本を済ませて一息つく。すると、近くで控えてたやんばるが近づいてくる。

「お疲れ様です、真帆様。お水とタオルです。どうぞ」

「お、サンキュー」

やんばるから水とタオルを受け取りながら、ふとホールの方を見上げた。

「じつかし、他のところからも打てるようになんないとなー」

「今日も試しにフリースローのところからもやってみたけど、やっぱりうまくいかなかつたんだよね。今度、あゆむんに教えてもらわないとな。

「だったらまた、あゆむん様をお呼びして『二人つき』で秘密特訓すればよひよひのでは？」

「やんばるがえでこたことをやんばるに言われてしまつ。

「せうだよねー。ちよつちよつすぐ球技大会だし、今年こそこの勝つためにまた特訓しないと」

あたしが、フンッと両手を握りしめて氣合いを入れていると、前に居るやんばるはびこか、期待していた反応を見れなかつたことを残念に思つてこるような顔で落ち込んでいた。

「まあそれはともかく、これからのはじ予定はいかがなさこますか？」

やんばるが落ち込んでいたのも一瞬で、すぐに立ち直つたりして今日の予定を聞いてくる。

「うーん、どうひがつかなー。」

朝練も終わったし、とくにこれとこってやつたことにもないんだよね。みんなはなにしているかなー。と、考へてこむと、彼女はいた。

「やつだー。やさぎる、ぬかはあたし、出かけるかい

「～解しました」

やつと決まれば早速みんなに連絡したこと。やつして携帯を取り出し、メールを一斉送信したのだつた。

『おまー、つてもうひこだちわかな。『ホールデンウェイークしょこち、みんなにしてる。ヒマしてる、ヒマしてるよね？』といふ訳でみんなでやせーよ。えきまえのふんすこだー3じしううね。みんなひくしなこよひーーー。』

読んでいただきありがとうございました。

後編はなるべく早く更新したいと思いますナビゲームの進捗具合によりますね……。

バスケの参考になるマンガもまだまだ募集中ですのでよろしくお願いします。

17・ある休日の過ごし方（後編）（前書き）

やつと後編の更新です。
もつといろいろ遊んでこるとこのを描きたかったですか？
理でしたね……。
それでは……どうぞ。

17・とある休日の週刊の方（後編）

（ガールズトーク（噴水前にて））

まほまほ「おーい、アイリーンー、」

あいり「あ、真帆ちゃん。良かつたすぐ見つかって。私が最後？」

ひなた「おー？ あゆむーがまだだよ」

湊 智花「と、言つてもまだ1時まで10分あるから、もうすぐ来るんじやな

いかな？」

紗季「」のバカがなんにも確認せずに、いきなりあんなメール送つてくる

もんだから多少遅れても仕方ないわよ」

まほまほ「なんだよー。別にいますぐ来いつていうメールじゃなかつたじや

ん。それに結局みんな来れるんだからブシブシ言つなん

ー

あいり「あつ、歩君來たみたい」

約束の5分前に噴水の前に行くと、もう既に他のみんなは揃っていた。

「遅いぞ、あゆむん。罰としてみんなにジゴースを奢るよ!」

「いやいや、1時にもまだなつてへんやん。遅刻じやなにって

「1番遅かつたらダメなの

着いて早々、開口一番に真帆が実に理不尽なことを囁く。「まるで某ラノベの団長みたいだ。

「バカなこと言つてないで行くわよ。歩も真に受けなくていいわよ

紗季がそう囁いてくれると、真帆も遅刻を怒っていた顔を笑顔に変えた。

「あはは、この前見たアニメでやつてたのを書いてみたかったんだ。じゃあ、あたしたちも行く、あゆむん」

そうして俺たちが向かったのは、駅のすぐ隣にあるアリューズメント施設『オールグリーン』。ここはカラオケ、ボーリング、ゲームセンター、その他もうもん、と遊ぶ施設がたくさんあり、このあたりの子が遊ぶといったらここを選ぶ、とは先頭をズンズン歩いている紗季の言葉である。

「今日は屋上で面白そうなイベントをやつてるみたいだから行ってみましょ」

1階の掲示板のところにチラシを見ていた紗季が、みんなを連れてエレベーターへ向かう。俺は屋上で一体なにがあるんだろうと不思議に思い、紗季が見ていたチラシを見ようと掲示板に近づいてみた。すると、ちょうどエレベーターが来たらしく真帆が大きな声で俺を呼ぶ声が聞こえた。急いでエレベーターに向かう時にチラリと見てみるとそこには『バスケ』の3文字があった……ような気がした。

やつして屋上に着いた俺たちを出迎えてくれたのは、やたらと元気な司会の人の声だった。

『あーーー 本日開催のイベント、バスケ企画第2弾『バスケビン

『△』。今回は私たちも頑張りました。特製△ゴールを使ったこの企画。3×3に並んだゴールに4回のショートで縦、横、斜めのいずれか1列に揃えることができれば景品GET!! 今までまだ成功者は高校生1人だけという難しさ。腕に覚えがある方、彼女にいいところを見せたい彼氏など、ふるって△参加ください』

紗季の言っていた面倒そうなイベントつてこれのことかー、と思つて△ゴールの方を見てみると確かに、ゴールが9つ付いていて、3段のうち1番下がミニバスの高さ、1番上が普通の高さ、真ん中がその中間といつた具合だ。ちなみに△ゴールにはそれぞれ上段左から1番、2番、3番、中段に4、5、6番、下段に7、8、9番と番号がふつてある。2番のゴールが高さと位置が普通のゴールと同じになつている。

「おっしゃー、あたしたちもやるつよー。」

「まあ、初めからそのつもりでここに来てるんだし」

「おー、ひなもがんばる」

初めてここにイベントが好きそうな真帆が、続いてチラシでこれを知っていた紗季が、さらに正直ボールが届くかすら怪しいひなたも参加を決める。

「どれを狙えばいいのかな？ やっぱり真ん中？」

「あ、あんまりショートの練習はしてないけど私もやってみようかな」

やる気満々の様子で攻略法を考えている智花に、参加することに意味があると思つていそうな愛莉が続いて参加を決めた。俺も、もちろん面白いもので参加することを決めていたけど、何となく言いそびれて黙つていると紗季が近づいてきた。

「歩も参加しなさいよ。スペック成功させて奥ことじいの見せたらいいじゃない」

「そんなん考えなくとも面白いつやからやるよ」

妙に一矢一矢して叫びつづける紗季に若干やつめに聞こじめよつて返事をする。じじで「誰にだよ」と聞こじめよつむのないうちにめどくれことになるのは田に見えていた。

みんな参加することに決まったドームの入口にある板付に向かう。

『おおっと、じじでなんともかわいい参加者の登場です。なにに、えー六人とも小学6年生のことですが中々悔れません。この子たちは全員バスケ部ということで、もしかするともしかするかもしれません。しかし、女の子5人に囲まれてうらやましい限りの黒一点ですね。両手に花どころかハーレムですね』

受付を済まして「ホールに入ると同僚の人が場を盛り上げるために紹介を始めた。黒一点とかかなり恥ずかしいし、わざと仮にしてるんだからそつとしといて欲しかった……。

「じゃあ誰から行く?」

「はーはー。あたし行きたい」

気を取り直して、順番を決めてなかつたのでみんなを見ながらきいてみると、案の定真帆がピョンピョン跳ねて名乗りでる。

『まずは元気いっぺこの三沢真帆さんの挑戦です。一番手でいきなりの成功なるか!』

この企画はフリースローラインからショートを打つので、真帆が得意とする位置ではないけどフォーム自体は変わらないのだから、位置の違いをうまく補正できるかがカギになる。

「真帆ー、ガンバーー」

「真帆ちゃん、ファイトー」

真帆がショート位置に移動すると、智花や愛莉をはじめ周りのお

客さんからも声援がきた。それに手を振つて応えた後、ボールを2、3回ついて集中する。

そうして放たれた1投目はしっかりと練習通りのフォームで放たれ、1番の「ホールに見事決まった。

「おっしゃー、やつぱあたしつて天才」

狙い通りの位置に決まつたらしく、ガツツポーズをして真帆が喜んでいる。

それにもしても、たぶん真帆にとつていつもと高さも違うし、向きも違つて狙いにくい1番から狙つて決めるなんて、やつぱり勝負強さはすごいな。まあ本人はきっとそんなことは考えてなくて、ただ単に1番だから1番最初に狙つただけなんだろうけど……。

「その調子よー真帆」

「おー、まほ、がんばれー」

紗季やひなた達からの声援を受け、続く2投目は6番のリングに跳ねるもなんとか決まった。

「お、おっしゃー。真ん中狙つたんだけじゃあいいや」

「どうやら5番狙いだつたらしいが右にズレて6番に入ったらしい。
おしゃもコーチにならずで3投目に賭けることになった。

後がなくなつた3投目。これも5番のリングに弾かれるも8番の
ゴールに偶然入つた。けど、この時点でビンゴの可能性はなくなつ
てしまつ。みんなや周囲からため息がこぼれた。チャレンジは失敗
が決まつてしまつたけど、最後まで投げるルールらしく真帆は4投
目を投げるために位置につく。

周囲はすでに興味を失くし、俺しか見ていない中、それでもめげ
ずにやるからには決める、といつ眼でゴールを見つめ、投げた4投
目は見事5番のゴールを揺らすことに成功した。

「ちえー、あとちょっとだつたのに。あそこからも練習してたから
いけると思ったのになー」

真帆は4本全部決めたのに不貞腐れながら戻つてきた。

「でも、4本とも全部決めるなんてす」「よ、真帆」

「や、やつだよ。お疲れさま、真帆ちゃん」

智花と愛莉が真帆を励ましているやばを、次の挑戦者の紗季が通
る。

「まああんたにしてはよくやつたじゃない。私が仇をとってきてあげるわよ」

紗季が褒めてるのか貶してるのかわからない」とを言つて、ボールを持った司会の人のところへ向かう。

威勢よく向かつていった紗季だつたけど結果は、3番と6番、8番に入つただけでチャレンジ失敗に終わった。続いて、愛莉とひなたもチャレンジするけど、この前の練習であまりシュー一ト練習をしていない2人は2本決めて終了となつた。

「ううう、じんなはずじや……」

「ふー、むねん」

「やつぱり、わたしには難しかつたよ」

真帆が自分より成績が悪かつた紗季を指差して笑つてしたり、愛莉やひなたが「惜しかつたねー」と慰めあつてると、いよいよ我らがエースの番になつた。

「じゃあ、私行つてくるね」

「おー、もっかん。あたしたちの仇をとつてきてくれー」

みんなの声援に手を振つて応えてポジションにつく智花は、ボールを受け取る時にはバスケをする時の真剣な顔に変つていた。

「智花ちやん、ガンバレー」

「トモ、決めちやん！」

声援を受けながら放つた1投目は危なげなく2番に決まった。

「よしーー。狙い通り」

2番に無事決めた智花は小さくガツツポーズをして喜んでいる。でもまあ、智花の実力ならこれくらいは簡単なはずだ。それで智花が俺と同じように考えてるなら、次に狙うのは……。

続く2投目は、8番のリングに弾かれ惜しくもリーチにはならなかつた。

「あーあ、やつぱ、もっかんでも無理なのかなー」

「おー？ ともかもむり？」

2投目を外してしまったので真帆がそんなことを言い始める。

けどそれは間違いのはずだ。おそらく、あれで試したんだひつ。いつもと距離が違う5番と8番への力加減を……。俺も全く同じことを考えていたので、そだだという確信がある。

距離をしつかり覚えたであろう3投目は、狙い違わず8番のゴールを射抜いた。

「おっしゃー、これでリーチだ」

真帆の言つとおり、最後の4投目を5番に入れればチャレンジ成功となる。智花の実力なら、ほぼ確実に決めることができるだろう。けど、ボールを受け取った智花は緊張しているのか、なかなかショートを打てないでいた。チラチラと紗季や俺、真帆を見てなにか迷つているせぶりを見せている。

しばらく迷つている様子だつたけども、なにかを決めたのかゴールを見据えて構えをとつた。

そうして放たれた4投目は、いつもより高い弧を描いていた。そ

して、向かつた先は5番…………ではなく6番のゴールに突き刺さつたのだった。

「えへへ、『めんね。失敗しちゃった』

苦笑いをして戻っていく智花は、思いのほか落ち込んでいるようには見えなかつた。

「どんまい、どんまい。じゃあ最後はあゆむんだな」

「ああ、バシッとこことこ見せてきなやこ」

紗季に背中を思いつきつ叩かれ、送り出される。叩かれた背中をさすりながら、ショート位置に立つとみんなの応援や周りの声援が一際大きく聞こえる。ボールをもらい、どれを狙うかを考える。

さつきの智花は失敗したけど方法としては間違つてないはずだから、いつもと左右のズレがない真ん中のラインを狙おう。そうすれば距離の調整だけでいいんだから簡単なはずだ。そうと決まれば、ここは2番を狙つて様子を見てみよう。いくらミニバスより高いといつてもバックボードがある分多少のミスはしても大丈夫なはずだ。

狙うゴールが決まつたので、早速呼吸を整えてショートを打つ。

放ったショートはバックボードに当たって跳ね返って、きちんと2番のゴールに決まった。真帆たちの応援が大きくなるのを聞きながら、次のボールを受け取る。

次は5番を狙おう。それなら、もし距離が足らなくても8番に入るかもしれないし。

そんなことを考えながら放った2投目は、往生際悪くリングで1周回った後5番に決まってくれた。ショートが決まって安心したのか、思わず深いため息をついてしまう。自分が意外と緊張していることに今更気付いた。

一際声援が大きくなるの聞きつつ放った3投目は、しかし観客の声援を祝福の声にすることはできなかつた。8番のリングに弾かれテンテンと転がるボールを見て、もう後がないことを自覚する。

「歩一、外したら承知しないんだからね！」

「歩君ならいけるよー。自信持つてー」

みんなの声援を聞いて、最後のボールを受け取る。

ここまできたら絶対にみんなの期待に応えたい。そのために集中するんだ。周りの声が聞こえなくなるくらいに、8番のゴール以外が見えなくなるくらいに……。

ボールをつきながらリズムをとり、集中力を研ぎ澄ましていく。そつして段々と次第に周りの音が遠ざかり、世界に自分とボールしかない状態になる。やけにゆっくりを感じる時間の中で最後のショートを放つ。

「あゆむん、いっけーーー！」

ショートを放つ直前、真帆の絶叫が響いた。こんな状態でも真帆の声だけは聞こえるんだな……と、驚きよりも安心感を感じて俺はそのままボールを手放した。

綺麗な放物線を描いたショートはそのまま8番のゴールに突き刺さった。

わずかな間、周りは静寂に包まれた。しかしその一瞬後には今までの比じやないほどに割れんばかりの歓声が鳴り響いた。

「いいいittよつしゃーーー！」

「あーこよ、恭君。やつぱり私の思つた通りだつた

みんなのところへ戻ると、真帆や智花をはじめ、みんな大喜びし

てくれた。

『見事本日2人目の成功者となりました園田歩君には、景品として当施設で使える食事券3000円分をプレゼントします。ぜひハーレムの主として女の子たちを喜ばせてあげてください』

くそ、まだそれを言つか……。でもまあ、せつかだし景品が食事券ならこのままなにか食べに行くのも悪くないか。

「じゃあなにか食べに行こか？」

成功させた俺よりも、興奮冷めやらずな女バスメンバーに聞くと一つ返事で行くといつ返事が返ってきたので、下のフードコートに移動することにした。と、その前に智花に聞いておきたいことがあるんだつた。

「智花。智花の最後のショートの時、なにを迷つてたん？ チラチラとこっち見てたよな？ もしかして俺、なんか気になることしつた？ それでショートミスつたとか？ 俺にできて智花にできん、なんておかしいもんな」

「ふえ？ え、えっと……それはね」

少しへつが悪そうにして智花が話してくれたのはお節介極まりな

い紗季のことだった。なんでも、智花がチャレンジする前に紗季に、智花がやつてみて俺にできそつだと思つたらわざと失敗してあげてほしいと頼まれたそうだ。それで実際やつてみて、俺も成功させることができるだと思つて、迷つたけど結局6番を狙つた、ところどころじつ。

「「」「めぐね。なにか騙したみたいで」

「べつに智花は悪くないんやから気にせんでいいよ。むしろ、変な氣を使わせてしまつて」「めぐな。まあ一番悪いのはあいつやけどな

やつに、腰まである青い髪を揺りして前を歩く元凶を睨みつけた。

「あはは、でも紗季もべつに悪気があつてやつたわけじゃないはずだから、あんまり怒らないであげてね」

「まあそれはわかってるんやナビ……」

それがお節介なんだよなー、ところの言わないでおく。実際うまくいったんだし、よかつたと思つことにして少し離れてしまったみんなに追いつくために智花と一緒に小走りで走り始める。けどフレートでちょっとした仕返しつらいいよな……と、なにしてやうかと考えながら追いかけるのだった。

そうして、フードコートでなににしようかと見て回っているときに、残り100円になった食事券を持って悩んでいる長谷川さんとバッタリ出くわしたり、長谷川さんを交えてボーリングをしたりして、日が落ちるまで遊びつくしたのだった。

17・とある休日の過ごし方（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次からは合宿に入つていきますので安心？してください。
せつかくみなさんにはアドバイスをもらつたマンガをまだ読みに行けてないんですね。この週末にいけたらいいなあ。

18・意地つ張りな2人（前書き）

ちょっと短めの更新です。
あの「スプレの回ですね。
それでは……どうぞ。

（） 交換日記（ひづけ）（）

湊 智花「みんなやつたよー。歸れん口ーチ続けてくれるつて」

ひなた 「おー？ おここやけんぐるー。げんきかな？」

あいり 「長谷川さん来てくれるんだ。よかつたー」

まほまほ「でかした、もつかん！…」「れでせんそつのじゅんびはととのつたわけだ」

紗季 「戦争つてあんた……。それにしてやつぱつアモヌー」
わね。それつてつまり

シユート50本連続で決めたつてことよね。」

湊 智花「そんなことなによ。結局10日もかかっちゃたし。それと真帆、じめんね。ま

だ昴さんこそのこと話してなこの」

まほまほ「せんせんだいじゅつぶ。ならじるさビルや、すばるさんをう一いへじて、すんじこさ

くせんをかんがえてもらわなくね」

紗季 「いや、待て。あんたにまかせるとまた口クなことになりそうもないから今度は私が考えるわ」

みんなで遊んだ日から数日が経つた水曜日、登校してきた俺を迎えてくれたみんなは、どこか上機嫌で朝からテンションが高かった。

「おはよー、なんかいいことあった？　なんかみんなうれしそうやな」

「聞いてよ、あゆむん！　それがヤー……」

意氣揚々と話してくれた真帆によると、なんでも今日から長谷川さんがコーチとして復帰してくれることになったそうだ。『ゴールデンウィーク最後の日から始まつた智花の挑戦が成功したらしかった。

「おー、さすが智花やな。こんなに早く成功させるなんて」

「や、そんなことないよ。球技大会まで、ギリギリになつちやつたし

……」

智花はそう言つて少し頬を染めて、俯いてしまつた。

「まったく、俺やつたら球技大会どこか夏休みを使っても無理やつていうのに」「

「ほんとよねー」

さりに追い打ちをかけるように智花と紗季も乗つてきてくれたので、智花はますます照れてしまつた。

「みんな、和み過ぎだ！ これからまた来週ある球技大会に向けて猛特訓なんだからな。またあゆむんにいっぱい教わつて、すばるんを誘惑してすごい作戦考えてもらうんだから！」

今まで上機嫌で話していた真帆が、どこで熱血スイッチが入ったのかいきなりそんなことを言い出した。

「ふふふ、長谷川さんの誘惑ならこれで大丈夫つよ

眼鏡をキラッと光らせて、紗季は一つの鞄を机の上に持ち上げた。なんだかデジヤブを感じるし、正直嫌な予感しかしない。けど、一応聞いておかないといけないよな。

「紗季、こ、これは？」

「長谷川さん誘惑用アイテムよ。あーでも歩の分はないの。悪いわね」

やつぱつか……と思いつと同時に、今回は俺は関係ないらしいのを安心する。

「や、紗季のアイテマなら大丈夫……だよね？」

「うう、一体なんだろ？」「

後ろで、ものすごく不安そうな2人の声が聞こえてきたので、俺は心中で「愁傷様、とつぶやいた。

「「「「お帰りなれど、あなた……」「」「」「

結論から言おひ。紗季はアホなんぢやないだらうか……。

今、みんなは学校指定の紺色の水着の上にエプロンをつける、といつ裸エプロンならぬ水着エプロンと、いつ実に「ラッシュ」とんだ格好で長谷川さんを出迎えているところだ。

「あ、とりあえず座つて、あなた」

「おひー、ポッキー食え！ あなた」

「おー、おにじちゃんもたべる？」

ノリノリの紗季にコロコロと笑つてゐる真帆、それになにげに呼び方を間違つてゐるひなたが、逃げ腰になつてゐる長谷川さんを引きとめるべく近寄つていろいろと接待？ をやつてゐる。愛莉と智花に至つては初めこそ5人で並んでいたけど、すぐさま体育館の隅に隠れて恥ずかしさのあまり小さくなつてしまつてゐる始末である。

俺はと言えば、朝に言われた通りこの件に巻き込まれずに済んだので、コートの真ん中でみんなの様子を見つめている状態だ。まあ紗季のことはアホなんぢやないかと思う反面、Good Jobと言いたい光景ではあるけども、もしこれで長谷川さんがデレデレになつてしまつたら長谷川さんの人生は終わつてしまふことをわかつてないんだらうか……。

「着替えて来てください。お願ひします」

そして、長谷川さんが一度田となる本氣土下座を披露して、Jの騒動はお開きになった。

「球技大会?」

長谷川さんの土下座によつてみんなが着替えている間に、長谷川さんに水着エプロンとごつ暴拳にてまでも頼みたかつたことを簡単に説明しておぐ。

「来週にあるんですけど、なんでもロ組にちょっと因縁があつて、そこには絶対勝つってクラスで盛り上がりちゃつて。主に男子が、なんですか? 真帆もあの性格なんで男子側なんですよ」

5年生の頃からなにかにつけて張り合つていろいろなロ組にはバスのメンバーがいて、そう簡単には勝てないのでまたしても俺と長谷川さんに白羽の矢がたつたというわけだ。

「それにしても、歩はあんまり勝つこりだわつてるよつこは見ないけど?」

「ああ、俺は正直まだ来たばかりなんでピンときてなくて乗り遅れてる感じはありますね。けど、ライバルにみんなで戦つていうのこなやつぱりワクワクしますよ」

そんな風に話していると、着替え終えたみんなが戻ってきた。と思つたら真帆が俺の前まで来て指をビシッと指して「H立ちになつた。

「甘い！ 甘いぞ、あぬむん。そんなことではダメだ！」

こんな感じです、とこう意味を込めた視線を長谷川さんに向けると長谷川さんも苦笑いだった。

「あははは。でも、作戦なんかいの？ 竹中……だつけ？ あいつと回じクラスだったよね？ なら、あいつと協力すれば勝てるんじゃない？」

まあやつぱりやうなりますよね……、と半ば予想していたことを言われてしまつ。そして、気まずい雰囲気が漂つ中でその元凶となる真帆を見てみると、案の定不機嫌そつた顔をしていた。

「竹中はバスケには出ないんですよ。先週の出場種目を決めるときにサッカーにエントリーしてましたから」

「へえー、あいつならバスケに出そつなものなんでまた？」

竹中が無理なことを説明すると、続いて質問が返ってきた。さらに気まずい雰囲気が流れる中、長谷川さんにちゃんと説明するため先週の出場種目を決めたときのことを探し始めるのだった。

「はーい、じゃあ今度の球技大会の種目決めをやるぞー。種目は去年と同じで、ソフト、サッカー、バレーに卓球、それにバスケだ。じゃあ10分したら希望を聞くからそれまでに決めるように」

先週のHRの時間、篁先生からそう言われてクラスが騒がしくなる中で俺たちも集まって（と、言つても初めから席は近いので向きを変えるだけだけど）話し合いを始めた。

「やつぱりあたしたちはバスケで決定つしょー。」

「うん、私もバスケに出たいな」

真帆が最初にしゃべりだし、智花がそれに続いた。周りを見れば他のみんなもバスケに出ることに賛成みたいだ。もちろん、俺もどうせならバスケに出たいと思っているので反対なんかしない。

「じゃあ、メンバーは補欠2人で合わせて7人だから、あと1人どうしようか」

智花が規定人数が書かれている黒板の方を見ながら、みんなに訊ねる。けど、そう言いながらも視線はチラチラと、ある人物の方を見ていた。

このクラスにはバスケ関係者が、それも大のバスケ好きがもう1人いるので当然そいつもバスケ希望のはずなので声をかけてみる。

「おーい、竹中。お前もバスケやよな？」

「.....」

即答で返事が来ると思ったのに、誘われた竹中の反応は俺.....ではなく、その後ろの真帆を睨みつけるというものだった。

「フンフ」

「なんだよつ、その反応は！！」

しばらく真帆とにらみ合っていた竹中はそっぽを向いて立ち去る。それを見て真帆が怒って怒鳴りつけた。すると、竹中は立ち止まり真帆の方を向いてはつきり言つた。

「俺はでない。真帆とバスケするなんて死んでも」めんど

そういう竹中の顔は真帆を睨みつけたままだ。

「なにおー！ じつちだつてあたしに負けた弱つちいやつの力なんて必要ないね、フンフン」

売り言葉に買い言葉で真帆が言い返すから、2人の言いあいが段々とヒートアップしてくる。

「はあ？！ あんなマグレで勝つたくらいでいい気になんな。それに別にお前に負けたわけじゃねーし」

「いーや、あたしの勝ちだね。あたしの方がいっぱいショート決めたし」

2人とも徐々に近寄つていき、ガルルルと唸り声が聞こえてきそうな剣幕で言い争いになってきた。

「ほり、2人ともそこまでにしておけ」

さすがにそろそろ止めないとまずいと思つて席を立つと、同じタイミングで篁先生が2人の仲裁に入った。それでもしばらく睨み合つていた2人だったけど、先に折れたのは竹中の方だった。

「とにかく俺はバスケにはでないからなーー！」

「と、いつ訳です」

「なるほど、そんなことがあつたんだ」

事の顛末を話し終えて、竹中がバスケに参加しないことを説明し終える。

「うがー、思い出したらムカついてきたー。あいつのことなんかどうでもいいでしょ？ それよろまたすこい作戦考えてよ」

「うーん、そう言われてもなー」

話を聞いていてあの時の怒りを思い出したらしい真帆が、長谷川さんに八つ当たり氣味にくつてかかる。当然そう簡単に作戦なんて思い浮かぶ訳はないので長谷川さんも困り顔だ。

「うひ、いぐら長谷川さんだつていきなりじゃビビりよつもないでしょ。それぐらいわかれ！」

長谷川さんに向かって駄々をこね始めた真帆を、紗季が後ろから羽交い絞めにしてなんとか落ち着かせる。

「まあなんとか考えてみるよ。だから今日はもう練習しよ

長谷川さんがそう締めくくり、渋々真帆も頷いたので久しぶりとなる長谷川さんを交えての練習を始める。この話でかなりの時間を使つてしまつたので、今のみんなの実力を見るために残りの時間で俺を入れての30分3をすることになった。

あの試合から大した練習はしていないのでレベルアップはしないけど、大幅なレベルダウンもしていない状態を長谷川さんに見てもうう。前ほど切羽詰まってない中での試合形式なので、みんな

和氣あいあいと楽しそうにしている。真帆も次第に元気になつてきて、最後の方ではすっかりいつも通りに戻つていた。

そうして時間一杯まで試合形式で楽しんで、今日の練習はおしまいになつた。

みんなでワイワイと帰る中、この時はまだ誰一人として週末に大イベントが待ち構えているなんて知る者はいなかつたのだった……。

18・意地つ張りな2人（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
そういえば日曜にあひるの空を読んでみようとマン喫行つたら1～
5巻が持つていかれていたらしく、なくて読めなかつた o_r_z
結構人気マンガなんですね。

19・決闘（前書き）

今週2回目の更新です。
なかなか合宿に突入しないのは「容赦を……。
それでは……どうぞ。」

（） 交換日記（ひかわ）（）

湊 智花「美星先生からメール来た?！」

紗季 「来てるわよ。もうみんなのところも届いてるんじゃない
いかしい」「

まほまほ「あたしのところもきたーーー。わすがすばるんだな。こ
んなおもし

んなことねもこつくなんて」「

あーり 「あたしのところもきたよ。ふふふ、私もすげ楽しみ

ひなた 「おー、ひなはいま見た。ひなは楽しめずさてねむれそつ
にない、ど

「ひなは」「

次の日、昨日ちょっと夜更かししたおかげで寝不足気味な俺は、あぐびを連発しながら登校してきた。

「ふあーー、おせよー！」

あぐびを纏えうともせざずに挨拶をして席に着く。

「おー？ あゆむーも楽しみすぎてねれなかつた？」

「え？ 楽しみつてなんの！」と、

すると、同じくあぐびをした後なのだろう、若干涙目になつて、ひなたが話しかけてきた。

「なに？！ あゆむんこはみーたんからメールいつてないの？！」

真帆がそれはたいへんだ、と言わんばかりに身を乗り出して聞いてくる。けど、俺には心当たりがないので首をひねるしかない。

「昨日の夜にみーたんから、明日から2泊3日で学校で合宿をしつつ、長谷川さんから提案があつたんだけどどうつかつて、メールがきたのよ。歩こなつてない？」

「いや来てなこよ。それにしても長谷川さんが？」

見かねた紗季が説明してくれるが、俺には初耳な上に少しおかしなことがあった。

それは俺は昨日の夜は練習の後、長谷川さんと会っていたからだ。帰る途中にちよつとこれからのことについて話しかけないかと言わ�て、特に断る理由もなかつたので長谷川さん家にお邪魔していた。と言つても、話していた内容は球技大会のことよりも世間話の方が多くて、俺が長谷川さんの普段のトレーニングの内容を聞いていたりしていただけなんだけど。それでそこそこ遅くまで話していたから、もしそんな話があればその時にしてくれてるはずなんだけどな……。

「だつたら、その……歩君は来ないの？」

「え？！ あゆむんもくるよね？ ね？」

愛莉がオズオズと俺に参加するかどうか聞いてくると、それについて真帆がさらに身を乗り出してきて、絶対参加するよねと言つたそうな顔で俺をみてきた。

「おもしろいわつやし、俺も参加したいな。あとで簞先生にきこいくるわ」

俺がそういうと真帆は安心したのか、乗り出していた体を元に戻して改めてしゃべり始めた。

「それにしても楽しみだよねー、合宿。もひ昨日早速、荷物の準備始めたもん」

「あんた、荷物は自分で持てる範囲にしどきなさいよね。メイドさん同伴は禁止だからね」

待ちきれないほど楽しみにしている真帆に、紗季が注意をしていく。紗季の言い方からすれば、メイド同伴になるほど荷物を持つてきただことがあるみたいだから驚きだ。

「おー、ひなも準備してた。けど、カバンに入りきらなかつた。荷物へらさないといけない。パンツ6枚にしたらへらしそう?」

「まだまだ多いよ。上下で3組ぐらうこと予備に1組でいいんじゃない?」

真帆のセリフを聞いて、ひなたが持つていく下着について聞き始める。その手の話は俺のいないところでやつてほしいとつくづく思う。気恥ずかしさに周りを見てみると真帆、紗季、智花の3人はなんだか複雑そうな顔をしていた。

「ねえ愛莉……、自慢?」

「え？？」

なんで真帆達がそんな顔をしているのかわからず不思議に思つて
いると、紗季が苦虫を噛んだような顔をして愛莉に尋ねるが、当の
愛莉も質問の意味がわからないようでキョトンとしてしまつてゐる。

「なあ、もつかん。あたしたちは何枚持つてく？ 主に上の方……」

「0枚でいいんじゃないかな……。必要、ないもの……」

かなり落ち込んで自分の体の一部分を見て話す智花と真帆の話を
聞いて、俺も愛莉も3人の表情の意味を悟つた。

「ち、ちがうの。そういう意味じゃなくつて」

あたふたして愛莉が真帆たちに弁解しているせばで俺は、言葉には
は気をつけようと改めて思ったのだった。

そうして昼休み。

早々にお弁当を片付けて、俺は一人で合宿のことを見事に職員室

に向かつた。

「篁先生、ひょいといいですか？」

「はいよー、どした？」

篁先生を呼んで、合宿のことを見つけてみる。

「あー、わりにわりに。そういうや園田には連絡してなかつたつけ。
まあそりこり」とだから

案の定、俺への連絡は素で忘れていたりしく、あつけらかんと言
われてしまつ。まあそれほど気にしてもいないので連絡の忘れはい
いとして、別の気になつていることを聞いてみることにした。

「ところで、これってホントに長谷川さんが考えました？」

「いやふふふ、バレちゃつた？ ホントは私が思いついたんだけど、
あいつのアイディアにしといた方が都合がよくてね」

そんなに強く聞いたわけでもないのに、あつやつ白状されてしまつ
か小悪魔的な笑顔で言われてしまつ。

「まあ、俺も真帆たちも楽しみなのは変わらないですからいいですけど……」

「『やはは、まあそういうことだから。大変だと思つけど頑張つてな』

これで話は終わり、と簞先生はクルリと回つて職員室に戻つて行つた。

「大変つて練習内容のことかな？」

最後に言われた言葉が妙に引っかかつたけども、考えても答えは出でんにないので俺も教室に戻ることにした。

……この時もつと深くまで聞いておけばよかつたと、放課後に簞先生から爆弾を落とされた時に心底思ったのだった。

「という訳で、すまん。竹中のエントリー間違っちゃったから明日からの合宿に竹中も参加な」

「えー？！ なにそれ…！ なんでコイツも」

帰りのHRの後、女バスメンバーと俺、竹中が前に集められて、篁先生から衝撃的（真帆にとつて）なことを聞かされる。

「だから間違っちゃったんだよね、竹中の競技。サッカーじゃなくてバスケにしちゃってさ。それで明日からの合宿はバスケエントリーオーでやるもんだから、竹中も参加つて」と

真帆は当然、篁先生にくつてかかっているけど、対する竹中は事前に知らされていたのか真帆ほど慌てた様子はなく真帆をケンカ腰に睨んでいるだけだ。

「話はそれで終わり？ なら俺は部活あるから」

そう言つて竹中が帰ろうと踵（きびす）をかえす。当然、怒り心頭の真帆がそれを黙つて見過ぎす訳もなく……

「いり、までナッヒ！ あたしはまだナッヒの参加、認めてないんだからな」

「…………フン」

間髪いれず真帆が竹中に向かつて啖呵を切るけども、竹中の方は真帆を一瞥しただけで相手にせずに部活へ行つてしまつた。

「なんだよつ、あの態度つ……あつたまぐるー」

ダンッダンッと地団駄を踏んで怒りをあらわにする真帆はだんだんと手がつけられなくなつてきた。

「まあ真帆、そう怒るなつて。間違つちやつたのは謝るけど、もうどうしようもないし」

篁先生が全然感情のこもつてない説得をして、そそくせと教室を出て行つた。まさか、この状態の真帆を放置していくとは思わなかつたので、呆気にとられて先生を見ていると教室を出るときに目が合つた。すると、頑張れよ、といつ意味だらうワインクを残して出て行つた。

「もう、間違つたものはしようがないんだし、いい加減あきらめなさい。それに、夏陽が来るくらいで合宿が楽しみじゃなくなる訳でもないでしょ」

「そ、そうだよ。むしろ人数が増えてもっと樂しくなるよ。わ
と」

紗季たちがなんとか落ち着かせようと説得しているけども、なか
なか真帆の怒りは鎮まる気配をみせない。すると、今までワーウー
騒いでいた真帆が急にピタリと動きを止めた。

「おー？ まほ、どうしたの？」

ひなたがいきなり俯いてしまった真帆を、下からのぞきこむよう
にして様子を見る。

「ふ、ふふふふ……」

すばらぐすると真帆が、堪えきれなくなつたかのように肩を震わ
せて小さく笑い出した。なにか不気味な感じがするので真帆を囲ん
でいた俺を含め、みんな一斉にバツと距離をとる。

「……決めた。やつてやる。そして、ひやくぱー楽しい合宿を取り
戻すー！」

突然顔を上げ右手を握りしめて、そういう真帆を見てめんじくさ
いことになりそうだと、まだまだ終わりそうにないこの事態に深い

ため息をつくのだった。

そして次の日の放課後。
帰りのHRが終わるや否や、それまで何事もなく平穏な日常を送っていた俺に物騒なセリフが聞こえてきた。

「ケットーだつ、ナツビー！」

「はあ？」

言つたのは確認するまでもなく真帆で、言われた方も間違えるはずもなく竹中だつた。まあ言われた時の本人は、何言つてんだといつみたいな顔をしているんだけど。

「だから、ケットーだ、ケットーー！ それで負けた方が合宿をあわらめる」

「へー、そりや好都合だ。そつちから出で行くことになるよつなことを言つてくるなんてな」

ギヤーギヤー騒いでいる真帆と不敵に笑う竹中を見て、なんか物騒なことにならうだといつ思つが強くなる。

「あ、あんまり危ない」とはやめた方が……」

「無駄ね、ああなつたら止める方が大変よ。やりたいならやらせた方が無難ね」

愛莉が2人を心配そうに見ていると、紗季が2人の幼馴染としての経験からアドバイスをしている。

「場所は体育館でいいよね？ その方がおもいつきりやれるもんね」「上等だ。自分の負けるといふはあんまり他の奴には見られたくないもんな？」

なにを一、と2人してにらみ合ひ、ロッカーからそれぞれ銃を取り出す。

……いやいや、おかしことがあつたよ？ なんで2人とも当たり前のようにロッカーに銃が入つてて、みんなもそれを当然のようにみてられるのかわからぬ。いや、……違つた。智花だけは驚いている様子で目をまんまるにしているから、智花も知らなかつたんだな。隣で成り行きを見ている紗季にこつそりと聞いてみる。

「なあ、なんであの2人は銃なんてロッカーに入れてんの？」

「え？ 私も持つてるわよ？ そんなに不思議かしら、こいつはあの『みーたん』のクラスなのよ？」

……うーん、なんか納得できてしまつ自分は十分このクラスに馴染んでるつことなんだろうか。

銃を取り出した2人はそのまま体育館に向かうようなので一緒についていった。

「じゃあ、紗季が10数えるまでお互い離れて行って、数え終わったら振り向いて先に当たる方の勝ちってことでいいよね？」

「ああ、それでかまわねーからさつと始めるぞ」

体操服に着替え、背中あわせに立ち、ルールを確認しあう2人。審判を任せられた紗季が、いかにもめんどくさそうに2人の間に立っている。俺を含めて、他のメンバーは壁際に並んで観客状態だ。

もうこの事態を止めるのは諦めたので大人しく観客でいようと思いい、せつかくなので2人の銃を観察してみた。まず真帆の方は、ゴチャゴチャといろんな装備をつけた抱えなければいけないようなアサルトライフル、対して竹中は小さなハンドガン1丁だけという軽装備だ。あきらかに、この対決方法なら竹中に分がある装備の違いだ。

「なに……！ れ？」

するとさすがに長谷川さんが入ってきて、第一声がこれだった。
そりやあ、体育館に入つていきなり銃を構えた2人が険悪な雰囲気
でいたら誰だつてそんな感じになるよねー。

入ってきた長谷川さんに気付いていないようで、困惑している長
谷川さんを置いてけぼりにしたまま紗季がカウントを始めた。

「いーち、二ー、セーん……」

紗季のカウントに合わせて1歩、また1歩と離れていく2人。自
信満々な表情で不敵に笑つてゐる真帆と、やけに落ち着いた表情で
静かに時を待つ竹中の間に緊張が膨らむ。

「なあ、紗季。 といひで今何時？」

「うーく。 ……なに？ 時計みなさいよ

紗季が6を数えたところで真帆が、勝負に全然関係がなさそうな
時間を紗季に聞く。あまりカウントするのを重要に思つてい
季は律義に時計を確認して時間を教えてあげよつとしている。

「えーと、今は4時17分……」

「10だ……」

すると紗季が時間を言い終わる前に真帆が振り返り、フルオートの弾幕を後ろにこるはざの竹中にお見舞いする。

「あれ？」

けれども、真帆の攻撃は竹中に当たらなかった。なぜなら……

「……思った通りだぜ。じつせお前は下うらねー」と考へてるだろー
と思つてたぜ

竹中は真帆が振り向くのと同時に振り向いていて、真帆の振り向く反対側にスライディングしてかわしていたのだった。

「じゃあな、真帆」

真帆の攻撃をかわしきった竹中がハンドガンの照準を真帆に合わせる。絶対絶命のピンチに真帆は、それでも不敵な笑みを崩さなかつた。

それはどうがな？」

「なつ！」

それはどうかな?」

本命は「じだ」という顔をして真帆の2つ目の銃口、つまりアンドーバレルグレネードからピンポン玉くらいの大きさの球が打ち出される。

完全に虚をつかれた竹中は、顔の付近で炸裂するグレネードになすすべもなかつた。炸裂したあとにはモクモクとなにかの粉が2人を包んだ。

「ぐえ。まつ。なんだこれ！？」

「あーははは。どーだ、まほまほ特製きなこ爆弾の威力は!—!」

粉まみれの姿になり盛大に咳き込む竹中を見下ろして、真帆が攻撃のネタばらしをしつつも銃を突きつけトリガーを

……じゃあ、消え失せろ！！」

「いい加減にしろっ。バカ真帆！！！！！」

引く前に紗季に脳天チョップをくらい、頭を押されて悶える」と
になった。

「えーと、ケンカ両成敗……………やな？」

19・決闘（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
次こそ合宿に入るわけですから、あまり内容を考えていいないといった
悲しい現実……。
さて、パンツ事件をどう描くかなー。

20・竹中の思い（前書き）

ちょっと短めの内容となってしまいました。
今回の主役は題名通り竹中です。
それでは……どうぞ。

（――ガールズトーク――）

紗季 「もうホントにうくなことしないんだから、あんたはっ――」

まほまほ「だから、わるかつたって何度も言つてんじやん」

湊 智花「あはは。でも、真帆も竹中君もすくべ戦略つていつのかな？ そんなの

考へてたね。感心しちゃつた」

ひなた 「おー、わなこばくだん、あれはよかつた。いいにおいがした」

あいり 「ひなちゃん、そこはあんまり関係ないと思つな……」

紗季 「それに、今までに掃除つていう後始末が大変だつて思い知らされると

「うなんだから、あきらかにダメダメでしょ」

紗季の一撃により没収試合になつた決闘の後始末として、真帆命名きな粉爆弾の掃除をみんなでやつていいという現状。

始めは紗季が掃除は真帆が1人でするべき、と言つていたが、このあとに控えている練習に早く移りたい俺、持ち前の優しさで手伝おうとする智花と愛莉、さらにおー？おー！ときなこ爆弾の爆心地でクルクル回つて舞い上がるきな粉で遊んでいるひなたの申し出を止めることができず、結局みんなで掃除をすることになつた。

ちなみに竹中はチラチラとこっちを見て気にしているようだけど1人でドリブルの練習をしているし、長谷川さんは決闘が終わつたのを確認してからビニカへ行つたしまつたので今はいない。

「待たせで」あんね。おー、ちゃんと掃除は終わつてるね

「あー、すばるんやつと戻つてきた」

ちょうど掃除が終わつたくらいに長谷川さんが戻つてきて、真帆たちが駆け寄つていぐ。俺は反対に竹中の方に寄つて行つた。

「なあ、長谷川さんも戻つてきたし、練習やのやつから一緒にしよや？」

「フン、ごめんだね。まあ、俺がいねーと〇組に勝てないだらうから帰らひないでいてやるけど真帆のやつだけは、ぜつて一やらねー。

俺は外走つてへる

練習に誘つてみるも相変わらずそつけなく断られてしまつ。そのまま体育館を出て行こうとする竹中へ、真帆がまたしてもケンカをふつかけようと口を開いた。

「待て、ナツヒツー。今度はバスケで勝負だ。これなら文句ねーだろ?ー。」

しかし、言われた竹中は振り向きもせずに絶縁を示すのみで、

「やつの価値ねーよ、お前となんて」

やう言つて体育館を出て行つた。ふーん、やる価値……ね。

「長谷川さん、俺も外走つてきていですか?」

みんなが飛びかかるとする真帆を抑えていた間に、長谷川さんにやう提案した。

「ああ、いこよ。じつせ今日ましつかりとした練習はしないつもりだから、こつとこで」

長谷川さんから許しをもらつたので、竹中に追いつくために急いで体育館を飛び出した。

「わああんなところいるんか、なかなか早いなー」

体育館を出てキヨロキヨロと竹中を探すと、姿が小さく見えるくらいに向こうを走っているのを見つけた。なんとか追いつくと俺も速度を上げたのだった。

「なんだよ、ついてくんなよ。練習はいいのかよ?」

「まあそんなつれなこと言つないで。少ない男同士一緒に走りつ

「や」

わざりよりも幾分かやわらかくなつた言葉に、こちらも少し碎けた感じで答える。じぱりく無言で走りつづけ、先に口を開いたのは俺の方だった。

「ところで昨日、放課後に真先生から合宿の話があった時、あんまり驚いてなかつたやんな？ あれって事前に聞いてたから？」

「はあ？ なんだよ今更。まあそりだよ、あれより前に間違つたつて話は聞いてた」

「やつぱりか……。またひとつ考えていたことが確信に近づいた。わざわざ近付くためにもう一歩踏み込む。

「じゃあ、合宿のことも聞いたんやう？ 反対せんかったん？」

「反対は……したさ。でも美星がお役所仕事だから変更は無理とか言つし、バスケ参加者は強制だつて言つし……仕方なくだ」

ふむふむ、と頷きつつも走る速度は変わつていない。そうして作った間で次の質問を考える。

「真帆とはいつから知り合いなん？ この前気付いたんやけど、真帆が普通に名前で呼ぶのつて竹中と紗季だけやんな？」

「あいつとは1年からずっと同じクラスだ。紗季も一緒に、腐れ縁つてやつだな」

そんなに長いのかと感心する一方でそれなり、と続けて話す。

「なら、真帆の性格だって知ってるんだやない？　もとと聞こ過ぎたの時もあるけど根はすくへこい奴だって」

「…………違ひ」

違つって何が？　と聞く前に、先に竹中がもう一度『違つ』と繰り返した。

「違う。別に俺はあいつになにか言われたから怒つてるんじゃない。ただ許せないだけだ、…………あいつがバスケをやつしたこと」が

「はあ？！　なんやそれ？」

今聞いたことが到底我慢できず、つい声を荒げてしまつ。隣を走る竹中の肩を掴み、足を止める。

「なんで？　なんで真帆にだけそんなことを言つさせやつ？！」

「あこつか…………やつせ、あこつかまた途中で辞めちまつんだよ」

竹中はムキになつて言つて返してしまつたこと、つい自分の胸の内

をもらしてしまったことに恥じるみつて、チツと舌打ちをしてまた走りだそつと体の向きを変えようとする。

「待てって、どこのことなんやつて？ 真帆のなにがそんなに気にくわんの？」

そうはさせじと、もう一度肩を掴んでこいつを向かして問い合わせる。やつはカツとなつて頭に来ていたけども、逆に竹中がキレて少し落ち着くことができた。竹中の方も一瞬キレただけで、今は俺のしつこさに呆れたか、少しどはいえ本音をもらしたことを失敗だと思ってこいるのか、どこか諦めた顔をしている。

「なあお前、あいつ…… 真帆の家には行つたことあるか？」

しぶしぶと言つた感じで話しだす竹中の話の前後がかみ合わない」とで戸惑つたけども、あまり間をあけずに答える。

「ああ、あるよ。それが？」

「なら、あいつの部屋見たか？」

真帆の部屋？ 正直部屋がいっぱいありすぎて覚えていない。いやでも待てよ、たしかトイレの時に見た部屋が真帆の部屋だつて久井奈さん言つてたよな……。

「散りかつた部屋のことなら見たけど？」

「ああ、たぶんそれだ。その部屋、やたらいろいろなものがあつただろ？ それ全部、あいつがハマつて、そして途中で飽きたやつなんだよ」

「そういえば、あの時久井奈さんもそんなことを言ってた気がする。記憶が曖昧で、ずいぶん前のことのように思つけども、実際はまだ1カ月も経っていない。」

「あいつはなんでも興味持つて、すぐ上手くなつて……それですぐ飽かる。昔からそうだ」

「それも久井奈さんが言つてたことだ。確かに真帆は飲み込みが早いといつうか、口を掴むのが早い。それはシューートを教えていた時から思つていたことだつた。」

「1輪車や逆上がりだつてそつだつた。あいつはすぐできるようになつて、俺も悔しいからいっぱい練習して後からだけができるようになる。けどそのころには、もうあいつ別のこと夢中なんだよ。『そんのもうこゝよ、それよつこれ見てよ』てな」

苦笑いを浮かべて話す竹中がどこか疲れているように見えるのは、

ここまで走ってきたからというだけではないはずだ。でも、なんとなくわかつた気がする。竹中が真帆のなにが許せないのか……。

「まあ鉄棒とかならまだいいんだ、我慢できる。けど、それをバスケでやられたらたまたもんじゃない。俺はバスケが好きだ。大好きなんだよ。それをまた、ちょっとやつたくらいでチョロいもんだつて口にされたら許せない。我慢できない。でも、どうせまたそうなるだらうから、その前にこっちから絶交するんだ」

「そういう竹中は悔しさと憤りを混ぜたような顔をして、奥歯がギリッと音が鳴るくびりこに噛みしめる。

「確かにあいつは上達が早い、それは認める。けど、ショートが入るようになつただけじゃまだまだだ。まだほんの少ししかできていのに極めたみたいなこと言つて辞めちまうんだ。俺を負けっぱなしのままで……リベンジもさせてくれない今まで……俺の1番大事な場所でつ！」

だからだつたんだ。確かに今回は真帆の言い過ぎがキッカケで、けどそれだけじゃなくて。ホントは怖かつたんだ。こっちが本気になつても、向こうがスルリと土俵から降りてしまつことが。

最後には泣きそうな顔になつて胸の内をさりした竹中は、気まずそうにして目線をそらした。

「…………すまん、変なことグチった

もう言つて今度こそ走つだそうとする竹中は、今言つておきたいことを伝える。

「おい、竹中。確かに俺はお前に比べたら全然真帆のことじらんやうつし、今までの真帆はそりやつたかもしれんけど。でも、少なくとも俺の知つてる真帆は、バスケやつてる真帆は、そんな軽い気持ちでやつてないつて言える！ まだまだ上手くなりたいって思つてるはずや！ だから、やる価値ないなんて言わずに1回向き合つてみよや、真帆のバスケに」

俺の呼びかけに立ち上まつましても振り向かないまま、竹中は言う。

「何もわかつてねーくせに……、お前もあんまり入れ込むと後悔するやん

それだけ言つて走り出す竹中を見送り、じみじみそのまま立ち尽くす。

「俺はやらないで後悔するよ、せつて後悔したいタチなんですね

誰に聞かせるでもなく1人呟いて俺も走りだしたのだった。

20・竹中の思い（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

先週にあひるの空読んできました。といつても、7巻までなんですけど……。

みなさんガオススメしてくれてる通りすゞくおもしろかったです。7巻まで夢中で読んでしまいましたね。マン喫で読んだんですけど自分で買つか真剣に悩むレベルでしたね。

でも、内容に夢中で歩の新技にまで考えが及ばなかつたという残念な結果に……。

もう少し本作の話数的に余裕があると言つてもそろそろ決めないとあ。

2.1・確かめる気持ち（前書き）

最近は描くペースが上がってきたので今週2回目の更新です。
今回はアイスエイジ君臨？な回です。
それでは……どうぞ。

21・確かめる気持ち

（ガールズトーク）

まほまほ「よしあー、れんしゅうもおわった」とだし、みんなでゲームしようよ

紗季「なに言ってんの。」ほんの準備が先でしょー。」

ひなた「おー、ひなはおなかペコペコ」

湊智花「ふふ、私もお腹減っちゃった

あいり「ほんばざるんかいね？」

紗季「やippipip自分たけで用意する感じないかしらへ。」

まほまほ「それでこそがつしょくだよなー。じょあれとあれば、いざー」

あのあとは俺が竹中の後ろを走り、けども会話はないままでずっと走り続け戻ってきたのは、ちょうど真帆たちの練習も終わってころだった。

「ちょうどよかった。」うちも終わったからこれからみんなで泊まることしよう

戻ってきた俺達をみて長谷川さんがそう言ったので、みんなで宿泊小屋へ向かう。

「じつはん、じつはん

「おー、じつはん、じつはん

と、なにがそんなに楽しいのかスキップしてるのは真帆と、それのマネをしてくるひなだだ。

ざつと宿泊小屋の説明をすると、宿泊小屋は平屋で玄関を入るとまっすぐ廊下があり、左側に炊事場、トイレ、お風呂があり、右側に10畳の板間と5畳の和室がある。今回は人数的に板間が女子で、和室が男子という割り振りに決まっている。

荷物を置いて、さっそく炊事場にみんなで集合する。そこにはすでに食材が並べてあり、食材の置いてあるテーブルを挟んで、さながら調理実習の授業みたいに長谷川さんと他に分かれた。

でも、もしかしてJJの食材だと今日のJJさんは……。

「じゃあ、今日の夕食は好み焼きにしたいと思います」

長谷川さんの発表を聞いて、確かに俺を除くみんなの動きが一瞬止まった。それは緊張のような、恐怖のような感じで場の雰囲気が変わった。

俺と長谷川さんはどうしてこんな反応なのかわからず、2人してハテナマークを浮かべていた。まあ、その理由はこのあとすぐ嫌といつほどわかったのだけど……。

「なにしてんの、あんたはー！」

突如と響いた怒声は紗季のものだった。いや、今は「」呼んだ方がいいんだろう。『氷の絶対女王政』のものだった、と。この呼び名は、紗季の一つ名としてあとで智花に教えてもらった。いかんなく一つ名の迫力を發揮している紗季は、向こうで真帆に山芋がどうの、さらにあっちで竹中にだしがどうの、と次々と手厳しい指導をして、しまいにはみんなに戦力外通告を出す始末だった。

「なんで歩はお米を洗おつとしげるのかしら？ まさか『飯を一緒に食べる気じやないでしょ？』」

そして、半ば呆然と成り行きを見ていた俺についに氷の絶対女王アイス・エイ政の丞先ジが向いてしまった。

「え？ お好み焼きに『はんや』？ 普通やん」

「ぜんつぜん、普通じやないわよ！ なんで粉ものど『』飯と一緒に食べるわけ？ 炭水化物の取り過ぎでしょ！？」

みんなに戦力外通告を下した勢いそのままに、『女王様』がお怒りになっていた。けど、大阪とか関西は『』飯と一緒に食べるのが普通なんだけどなあ、と思い説得を試みてみる。

「いやいや、お好み焼きの本場の大阪では、逆に『』飯と一緒に食べよ？ まさか知らんとはいわんよな？」

「や、それくらい知ってるわよ。けど、ここは地域やあたしの家ではお好み焼きが主食なの」

よし、ちよつと揺らごだ。このままもうひと押し。

「え？ じゃあもしかして一緒に食べたことない？ それはもつ

たいないなー。それは本場の食べ方をしてみるべやで

本場といつのを強調してたたみかける。すると、「ううう」と言って紗季がひるんだ。

「あれはおいしいよー。アツアツの『ご飯』の上に一口サイズに切ったお好み焼きを乗せて一緒に頬張る。するとソースとマヨネーズの濃い味付けがマッチして、『ご飯がすすむ』こと間違になしやで。あれを食べたことないなんて、損しとるで」

「おー、おにしあわ。ジユルリ

ナイスフォローひなた。ちょうどいいタイミングで言つてくれたひなたを心の中で褒める。ちなみに「ジユルリ」は口で言つてゐるだけでホントによだれが垂れていたわけではない。天使のビジュアルを持つひなたにそんなことはあつてはならない。

まあ実際、ご飯はなくとも全然かまわないんだけどソリでここまで来てしまつたので最後まで行くことにする。

「それに、ここまで細かいことまで気を配つて作ったやつなんて单体だけでもすうじにおいしいのよ、『ご飯もつねばさう』といしあわで」

「くうう、もうここのわよ。認めるから焼きなさことよ、『ご飯

そしてついに女王の説得に成功した。後ろの方で「すげー、あの状態の紗季を打ち負かした」とか滋いてるやつがいたりするけど、びっくりしているのは俺も同じだ。

そんなこんなで、出来上がりのお好み焼き + ご飯をみんなでおいしくいただいた。

「これもありかも……」

そんなつぶやきが小さく聞こえ、後日とあるお好み焼き屋さんのメニューに「定食セットが追加されたとかされなかつたとか……。

「」飯を食べ終え、自由時間になつたので真帆が持ってきたゲームで遊ぶことになつた。みんなでワイワイと楽しんだんだけど、智花のポテンシャルの高さにただただ驚くことになつた。

そうしてお風呂に入る時間になり、レディファーストといつゝことで女性陣からの入浴に決まった。その間ヒマなので、どうしようかと思つてこむとトイレに行つていた長谷川さんが戻つてきた。

「ハマだし、コソボリでも行かないか

じつやう姫川さんもヒマだと想つたからして。こじりつけたまゝいつまでも

「あ、俺も行くぞ

すみと、なぜか竹中が慌てた様子でついてくる。

最寄りのコンビニまで徒歩で20分の距離を、男3人でゆっくり歩く。長谷川さんが少し前を歩き、その後ろを俺と竹中がついていく。しばらく無言で歩いていたが、この機会にと氣になっていたことを聞いてみることにした。

「なあ、竹中

「ん? なんだよ

「ひなたのこと好きなん?」

竹中が野球のヘッズストライディングみたいな恰好で見事にずつこける。

「な、な、なんだよ。そ、そんなことあ、あるわけないだろ」

面白いほど動搖をみせる竹中は、紗季たちの言うとおりバレてないと思つていろいろじい。この前の試合でもソノを突かれたのに、意地でも好きなことを認めないと意味す「こと思ひ。まあ、なんにせよ話が進まないのでコチラが折れることにする。

「じゃあ、仮定の話でいいわ。好きな子がおるってどんな感じ?」

「え? 仮定の話ならしかたねーな。でもあくまで仮定だからなつ」

そう念押して、顔を少し赤く染めて話し始める。

「そ、そりゃあ、あれだ。あくまで仮定だけど、やつぱす「こ」に氣になるんじやないか? ずっと一緒にいたいと思ひし、話ができるだけでもうれしいしな。それにソイシにはカツコイイとこ見せたいよな。普段から「コ」しやつだから悲しい顔してたら笑顔にしてやりたいし。つい、仮定だからな、仮定」

頑なに仮定なのを強調して話す竹中は、最後にはモジモジしながらだつたけども、真面目に話してくれた。

「でも、こきなりなんでそんなこと聞くんだよ?」

「んー、ちょっと……な」

あつそう、と深く追求してこないあたり、竹中の人の良さがうかがえる。ただ単に興味がないだけかもしないけど……。こつちはかなり無粋なことを聞いているという自覚はあるから、この反応はありがたかった。とはいえ、もしだれか気になる子がいるのかとか聞かれてもうまく答えられる自信はなかつた。むしろ、それを知るための質問だつたわけだし……。

そんな俺達のやり取りを聞くともなしに聞いていた長谷川さんが俺たちを微笑ましく思つてしたり、自分に話がふられないか内心ドキドキしていたとは、俺には知る由もなかつた。

そうしてコンビニからの帰り道、校門をくぐつてしまふとすぐにやら定期的に聞き覚えのある音が聞こえてきた。それは、この3人では聞き間違つはずもないもので、夜の学校で聞こえるのはおかしな音だつた。3人で目配せし、長谷川さんがこつちだと案内する方に静かに近づいていく。

「ひやく じゅう じゅう」

音に近付くにつれ、掛け声も聞こえてくるようになる。『なにを』はもう気付いているので、あとは『誰が』といつ部分だけがわからなかつたが、その犯人を見つけたとき2人は喜び、1人は驚きの表情になつた。

そこにはお風呂上がりだるうにも関わらず、汗を玉のように浮かべて壁に向かつてショート練習をしている真帆の姿があつた。

ボールが跳ねる音を聞いた時から、もしかしたらと思つてはいた。真帆があの試合の後も、練習がない日はもちろん練習のある日も家に帰つてからのショート練習を欠かしたことがない、というのを知つていたからだ。でも、実際にこの日で見るとなにかグッとするものがあるし、見れば長谷川さんも、どこか泣くのをこらえているような表情になつていた。

そして昼にあんな会話をした竹中を見てみると、真帆を最初に見た時は目をまんまるにして驚いていたけども、今はジッと真帆の方を見たままでたたずんでいた。

しばらく3人で真帆の練習を木陰に隠れてこつそりと見ていたら、最初に口を開いたのは竹中だった。

「なあ、知ってるか？ あいつって未だにおばけが恐いんだぜ。ホントは暗いとこだつて嫌なくらこ……」

今、真帆が練習しているところは近くに電灯が1本あるだけで、多少は明るいかもしないけども夜の不気味さを退けるほどではない。暗いところが恐いならなおさらだ。それでも、ないよりはマシといった程度の電灯を頼りにしてでも自主練をしたかったってことなんだらう。それを竹中も気付いたんだろう。

「俺はもうこぐぜ」

竹中はそう言って静かに立ち上がり、宿舎に戻っていく。その背中は、認めてもいいのか、それともまたいつもの気まぐれだと決めつけるのか、そう迷っているのを物語ついていた。

「俺もそろそろ戻らうかな。歩はんの？」

「俺はもうこります」

長谷川さんも宿舎に戻り、俺1人だけになる。しばらくして200を数えたところでノルマを達成したらしく、真帆の練習は終わつたようなので真帆のところへ向かう。

「お疲れさん。ハイ、飲み物」

「えつ、あゆむん? どつして!」
「..」

真帆にしてみたら、突然俺が出てきたも同然でびっくりさせてしまつ。待っている間に買ってきたジュースを渡して、壁に寄りかからながら腰をおろし、手振りだけで隣に座るように促す。

「コンビニに行つた帰りにボールの音に気づいてな。それで来てみたつてわけ」

「そつか」

真帆が隣に座り、汗を拭いたりジュースを飲んだりしているのを雰囲気だけで感じ、俺はずつとなんとなく前の方を見ていた。

しばらく無言が続き、そろそろ戻ろつかと思つていたら肩にふわりと淡い重みが寄りかかってきた。隣を見てみると、スウスウとうかわいらしい寝息とあどけない寝顔があつた。

「お疲れ様」

その寝顔にもう一度、聞こえてないだらけの言葉をかける。そして、動かずには聞いてくる静かな音色になんとはなしに耳を傾ける。思い出すのは少し前の竹中との会話。考えるのは自分の

気持ち。

すると、5月らしい爽やかな一陣の風が草木を揺らし、俺の元に隣から汗とシャンプーの香りを届けてくれた。

「 もう少しのままで……」

そう呟いて、俺の瞼も閉じていったのだった。

21・確かめる気持ち（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
次回はグラムサイト2さんからの感想にもあった歩々夏陽を描いてみようと思つてます。週末で描く気なので月曜の更新をお待ちください。

22. —騎記(前書き)

予告通り、歩々々夏陽です。
頑張つて描いた見たつもりですので楽しんでもらえたひつれしいです。
それでは……。おつかれ。

（アダルト?トーク）

美星 「およ？ あれは真帆と園田か？ あら、2人とも寝ちゃってるよ

。ふふ、2人ともかわいい顔しちゃって…………さてと」

（昂呼び出し中）

すばる 「いきなりなんだよ、って2人ともあれから寝ちゃったのか。じゃ

あ、呼び出しへ連れてけってことか？」

美星 「そう、私が真帆を連れてくからあんたは園田な

すばる 「了解、よつと」

（それぞれ寝かしつけ中）

すばる 「で、話つてなんだよ？」

美星 「いや、なに大したことじやないんだけどな。お前、あの子たちが

あそこにいるの知つてたのか？」

すばる 「？ ああ。途中まで一緒にいたしな。って、いだだだだだ？」

美星 「じゃあ、お・ま・え・は、」
え子を残して1人帰つたつていうんだな……」

すばる 「いだだだだつ！ まさか2人とも寝むけやつなんて思わなかつたし……

…。ちょ、や二^二はいつかに曲がらな

美星 「天・誅 ……」

すばる 「やあや……」

翌日、なにか物音がして目を覚ました。

「んーー、あれ？ 竹中がいない？」

軽く伸びをして部屋を見渡すと、竹中のふとんだけ空だった。長谷川さんはまだ寝ているみたいで、

「ううう……ミホ姉イタイ、……ミホ姉、……」わい……

一体どんな夢を見てるんだろう。すうい気になる。

あれ？ それはそうと、俺ってなんでふとんで寝てんだろう？ 確か昨日は、真帆の練習が終わるのを待ってたよな。そのあとは……そうだ！ 真帆が寝てしまつて、すぐ起こすのもなんだからつて待つてたら俺も寝たんだ。うーん、だとしたら誰かが連れてきてくれたんだろうなあ。まあ長谷川さんだらうから、あとでお礼言つとかないとな。

ひとまず、竹中を探してみようか。とこつてもある程度予想はしているんだけどな……。

「やつぱ、ひさしつたか

「なんだ、園田か」

竹中がいたのは予想通り、体育館だった。

「こつもの朝練？ それとも、昨日の真帆の練習に感化されて？」

「ふんひ、じひちでひいだひ」「

ブイツとそつぼを向く竹中に思わず笑つてしまひ。なんとなく吹つ切れたような表情を見せていて、真帆とのことは気持ちの整理はついたんだらひ。そして、それはきっととい方に転んだんだと察しがついた。

どうせ朝練してゐるだらうと思つていていたので、俺もジャージを着てきている。なので、便乗して俺も朝練をむせてもらひ。軽くストレッチとウォームアップを済ませる。

その間、竹中はレイアップやセットショートの練習、ドリブルの練習を繰り返していた。それを横田で見ながら思つてしまひ、やつぱり竹中は上手い、ということだ。セットショートをとつても智花ほどではないけど、きれいなフォームでどの角度でもほとんどはずすことなくショートを決めている。

「さてと、ウォーミングアップはこゝなにじうかな」

程よく体が温まつたところで俺もドリブルの練習を始める。右手、左手、それそれで練習をやつてショート練習に移る。すると竹中が話しかけてきた。

「なんかお前のドリブルつて、」「う……なんていうか柔らかくねえ？なんかコツとかあるのか？」

「え？ セうなんかな？ よくわからんけどな。まあ『シテ ハコ』とかドリブルする時はパー パーをイメージしてね」

パー パー？ と首をひねる竹中の一応答に説明を重ねる。

「なんていつんかなあ、ボールをつくりこつよつ引き寄せるつじいづイメージ？ まあ実際はそんなん無理やからあくまでイメージやけどな」

「ボールが手元に来るときに、手を引いて衝撃を受け流す感じか？」

なんとなくその感じで合っていると思ったので、そうそう、と頷いておく。すると竹中は、こんな感じか、と呟いてドリブルの練習をし始める。じつやら今のを参考にしているみたいだけど、さつきまでとの違いはよくわからぬ。いつまでも見ていても仕方ないので、俺も中断していたシート練習を再開する。じぱぱりべするど、ドリブルの練習をしながら竹中が話しかけてきた。

「なあ、お前つて前の学校でもバスケ部だったのか？」

「ああ、やうや、よ」

シートを打ちながら返事を返す。

くそ、はずした。ボールを拾いに行くと、竹中はドリブルの練習を止めてこっちにきていた。

「なあ、せっかくだし勝負しようぜ。お前がどんな選手か見てみたいしな」

「ええな。おもしろそーや」

竹中からの申し出に断る理由もなかつたし、俺も竹中とやつてみたいと思っていたので2つ返事で了承する。

ジャンケンで勝ったので俺からの先攻になる。2人でスリー・ポイントラインに移動し、バスの受け渡しをしてスタートした。

まずは、様子見ということで俺は高めにドリブルをして竹中の出方をうかがう。竹中の方も、つかず離れずの絶妙な距離でタイミングを計っている。

「こいよ

「言われんでも

不敵な笑みとともに言われ、こっちも思わず言い言葉的なものを返して、覚悟を決めグッと体を沈める。それを見て竹中も表情を真剣なものに切り替る。

俺から見て右にドライブを仕掛けた。すかさず竹中がコースを塞ぐので、ターンをかけて向きを左に変える。

「あめーよ

竹中も予想していたんだらう、抜ききれずにしっかりとマークされたままだ。でも、今ので抜けるほど甘くないのはわかつていた。さつきの攻防で、すでにミドルポスト附近にまでは近付いているので、かまわずにショートを放つ。初見では多少のマークは関係ないと自信をもつているフロイダウロイショートを。

「なつー！」

驚きながらもブロックしようとしたジャンプしてきて、なおかつもう少しで届きそうだったのはさすがだ。でも、ボールは無事にネットを揺りした。

「ふう……。まあねー点コードやな

転がるボールを拾つて竹中に渡し、さつきのお返しとじばかりに不敵な笑みでそう告げる。

「フヨイダウェイか、やるじゃねーか。けど、今度は竹中の番だ」

再びスリー・ポイントラインに移動し、今度は竹中の攻撃でスタートする。

ボールの受け渡しをやつて、竹中がリズムをとるために2、3回その場でドリブルしてから一気に攻め込んでくる。こっちも油断なく構えていたのであせらずに対処する。

俺よりも断然キレのあるドライブで踏み込んでくる竹中をなんとか抑える。勢いを止めるここには成功したけど、すぐさまフロントヒンジで逆をつかれた。少し体勢を崩されたけども、抜かれることはなくしつかりとついていく。すると竹中が急停止し、つづいてさつきよつも鋭いドライブで仕掛けてきた。

「こんにゃー！」

完全に意表をつかれた俺の抵抗も空しく、抜かれてレイアップを決められてしまう。

「これで同点だ」

そのままボールをこっちに渡してきて、どうだと言わんばかりの顔をしてくる。せりあはなしさ気に食わないの、すぐトライインまで移動する。

「もう1回いくぞ」

「おう」

またボールの受け渡しをやって、気合いを入れる。今度は抜いてやる気で突っ込む。しかし、じぱらくフロイントの応酬をやるけど一向に隙ができない。男バスのエースはティフロイントも上手いみたいだ。このままじゃ埒があかないで勝負にでることにする。

まず、田線と足の動きでフロイントを入れてからレッグスルーで右に、当然抜くことは無理だ。すかさず、フロントチェンジで左へ。

「いかすか！」

これにも少し体勢を崩せたけども抜くには至らなかつた。……でも俺もこれで止まるつもりもない。フロントチェンジで受けたボールをそのまま、もう1度右にレッグスルーで揺らがる。

「なに? !」

フロントチェンジすでに体勢が崩れていたので、2回目のレッグルーに竹中は反応できなかつた。そのまま抜き去りレイアップを決める。

「またリードや」

「やつてくれるな」

どうやら竹中の負けず嫌いに火をつけてしまつたらしい。顔は笑つてゐるけども、言葉の端々から負けねーぞオーラがにじみ出ている。いつも元より負けるつもりはないので真っ向から迎え撃つつもりだ。

ボールを拾つて、スタート位置について4回目のボールの受け渡しをする。やっぱり竹中のドライブは要注意だと思つからさつきよりも少し離れてティーフォンスにつく。

「いいのか？ そんな位置で…………それなり」

「しまつ？」

「……………」

そのままの位置から打たれたショートは無慈悲にも「ホールに吸い込まれていった。

「そら、同点だ。なにも外から打てるのは湊だけじゃねーってことだ」

「元やろー」

そうして、俺と竹中は入れて入れられて、止めて止められてを飽きることなく続けた。もう何回やったか数えるのも面倒になってしまふ頃、外が少し騒がしくなってきた。正確には騒がしいのが近づいてきていると言つた方がいいか。

「あー！ やつぱこじだつた。すばるーん、あゆむんもナツヒモーたよーっ」

扉を開けて入ってきたのは案の定真帆だつた。するとすばる長谷川さんたちみんながやつてきた。

「元にいたのか、起きたら2人ともいないから焦つたよ

どうやらみんなで俺たちを探していたらしい。確かに黙つて出でくるのはまずかったかな、なにか書き置きくらい残しておぐべきだつたか。なんて少し反省していると、長谷川さんが竹中を見ながら、

「今から練習するやう………… 竹中もやつてへか？ みんなと一緒に」

と、竹中を練習に誘つた。長谷川さんの顔が一やつもそつてなるのをいらいらしてこるように見えるのは、せつと長谷川さんも竹中の心境の変化に気付いたからだね。

「ナツヒツ。あたしはまだ認めてねーぞ。だからタイマンで勝負だつ！ 今度こそ追いで出してやる」

「バカが、百年はえーと、のつ」

竹中をビシッと指差して啖呵を切る真帆に、対する竹中は持つていたボールを真帆に投げ渡してさらに続ける。

「今のお前じや相手になんねーよ。そんなの俺が納得できない。ケンカ売つてくるならもつと上手くなつてからにしや」

やつて真帆に背を向ける竹中と、真帆はやうに突っかかる。

「な、なめんなよ。あたしだつて………… つて、ちよ、離せつてー」

なおも竹中に詰め寄りついた真帆を、紗季たちが引つ張つて更衣室に連れて行った。真帆に背を向けたことで俺の方を向いている竹中は、若干困っているような、呆れているような顔をしていた。

「『今のお前じゅ』『もつと上手くなつてから』やつて

「なんだよ」

一やつく顔を抑えられずにさつきの竹中のセリフを繰り返す。竹中は、くわつ、と言つて後ろ髪を搔いて照れている。それを見て余計に一やつこってしまった。

「それよつつ！… 勝負は一回引き分けだな。次は勝つからな

「うひのセリフやわ」

同点で引き分けになつた勝負の終了を告げる竹中は、照れ隠しの為か少し声が大きかつた。

そうじつしているうちに、真帆たちが着替えを済ませてやつてきたので練習を開始した。おそらく竹中にとっては普段の練習よりも軽いメニューになつてしまつたけども文句を言わずに、真帆も竹中のことを意識しつつも追い出したりはしないで練習に励んだ。

おやべく、あとひと押しあれば2人の溝はなくなるんじやないか

と思えるような時間だった……。

読んでいただきありがとうございました。
どうでしたでしょうか？

感想が来るのが恐いですね。表現が悪かったり、これおかしんじゃ
ね？的なところがあれば指摘お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9119v/>

ロウきゅうぶ～不可視の6人目～

2011年11月21日17時25分発行